

愛知学院大学

教養部紀要

第58巻 第3号

論文

- 伊豆原英子：間投助詞はどのように位置づけられてきたか……………（ 1 ）
- 近藤勝志：男らしくない男——デフォーの『シングルトン船長』について——……………（ 13 ）
- 清水義和：アントン・チェーホフの『桜の園』と寺山修司の『田園に死す』に於ける
創造的なアバンギャルド芸術の可能性……………（ 23 ）
- 吉井浩司郎：The Woodlanders の中にラディカルさを読み込むことは可能か？……………（ 53 ）

資料

- 木村文輝：静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)……………（ 69 ）
- 川口高風：明治期以降曹洞宗人物誌(三)……………（ 118 ）

2011

愛知学院大学教養部

間投助詞はどのように位置づけられてきたか

伊 豆 原 英 子

要旨

間投助詞は、会話において終助詞と並ぶ大切な機能を果たしているにもかかわらず、終助詞と比べて論じられることの少ない助詞である。

本稿は、その命名者である山田孝雄以降、間投助詞がどのように位置づけられてきたかを跡づけようとしたものである。「ね、よ」のような、文中、文末に置かれる助詞をどう位置づけるかの問いをめぐって、これまでさまざまな議論が積み重ねられ、終助詞と間投助詞の立ち位置が徐々に明確にされてきた。終助詞が文の成立という機能と切り離せないものであるととらえられてきた一方で、間投助詞は、「聞き手」と強く関わる助詞であることが明らかにされてきた。

最近では、談話分析という手法での間投助詞研究もなされているが、間投助詞の会話における機能は、まだ十分明らかになっていないと言えない。本稿では、終助詞と間投助詞はそれぞれ別のものであるとする立場を提案したが、文中、文末に置かれる助詞の適切な説明をめぐってこれからも議論を続ける必要がある。

1. はじめに

終助詞、間投助詞という名称は、山田孝雄（『日本文法論』1929）によるものである。山田は『日本文法学概論』（1936: 508-531）で、終助詞を「述語に関係あるものにして常に文句の終止にのみ用ゐらるるもの」で、「文末で用ゐられ、感動・希望・疑問・命令・禁止・念押し

などの意味を有するもの」、間投助詞を「語勢を添へ、若くは感動を高めむが為に用ゐらるるものにして、その位置他の助詞に比して稍自由なるもの」と定義している。

1992年に出版された益岡・田窪の『基礎日本語文法』では、「間投助詞」という名称は見当たらない。いわゆる「間投助詞」は、「終助詞の間投用法」という名称で呼ばれ、「文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働きをする」ものとされている (p. 53)。つまり、益岡・田窪では、山田の名づけによる「間投助詞」は、助詞の一分野としての位置は与えられていないということになる。

小倉 (1985: 225) が述べているように「終助詞、間投助詞の分類基準、所属させる助詞の範囲は、文法学説の相違によって、必ずしも同じではない」のである。

本稿の目的は、山田 (1929, 1936) 以降、間投助詞がどう位置付けられてきたかを整理し、そこにどのような考えが反映されているかを明らかにし、加えて、間投助詞の位置づけを提案することである。第2節では、終助詞、間投助詞（終助詞の間投用法など）が、山田から現代に至るまで、どのようにとらえられてきたのか、名称の変化はどのように位置づけられるのかを見ていく。続いて第3節では、間投助詞に焦点をあて、2節で明らかにされた点を整理する。そのうえで、談話分析的手法による間投助詞研究をとりあげ、間投助詞の位置づけを提言する。

2. 終助詞、間投助詞はどう説明されてきたか

本節では、山田以降今日に至るまでのいくつかの研究論文、文法概説書の記述を概観し、終助詞、間投助詞（終助詞の間投用法など）がどうとらえられてきたかを、助詞の現れる位置による分類を第1の基準にして分類する。それと同時に、研究者それぞれの終助詞と間投助詞の意味・機能・用法の説明と、所属する助詞の提示を必要に応じて行う。

2.1 文末に用いられるものを終助詞、文中・文末に用いられるものを間投助詞とする説

2.1.1 現われる位置の記述

このようにとらえる立場に立つものには、山田 (1929, 1936)、橋本 (1948)、田中 (1977)、仁田 (1982)、梅原 (1988) などがある。ここでまず、それぞれの研究者が、現れる位置について、どう記述しているかを簡単に見てみよう。

終助詞	間投助詞
山田 文句の終末にのみ用ゐらるもの	その位置他の助詞に比して稍自由なるもの

橋本	言ひ切りの文節の終にあるもの	文節（続く文節・言ひ切りの文節）の終に来るもの
田中	文末のみに用いられるもの	句末に用いられる（文中にも文末にも現れる）
仁田	命題に付く	命題及びいろいろな命題形成要素にかなり自由に付く
梅原	文末に位置する	文中の各種成分に比較的自由につく

これらは「文句の終末、言ひ切りの文節の終、文末や句末」などと言ひ方は異なるものの、文末に用いられるものを終助詞、文中・文末ともに用いられるものを間投助詞としている点で相違はない。この分類の視点からすると、基本的に終助詞・間投助詞に重なりはないはずである。確かに、橋本（1948）は、終助詞として「ぜ、ぞ、とも、て、わ、な（禁止）、か、や、よ、い、等」をあげ、間投助詞としては「「ね、な、さ」の類」であるとしている。また、田中（1977）は、終助詞の例として「か、な、の」をあげ、間投助詞としては「ね、よ、さ」をあげている。ここには、助詞の重なりは見られない。

しかし、梅原（1988）では、助詞の所属に重なりが見られる。梅原は、終助詞として「か、なあ（詠嘆）、な（禁止）、ぞ、よ、わ」をあげた後、終助詞で体言につくものがあるとして、確認表現として機能する「ね／よ／さ」をあげ（「あれが富士山ね／よ／さ」）、これは、「ね／よ／さ」が間投助詞として持っている意味の特徴（表現内容を聞き手に持ちかける）が、特殊な構文的位置で形を変えて現れたものと考えられるとしている（pp. 321-324）。つまり、「ね、よ、さ」は、文中にも文末にも比較的自由につく間投助詞であるが、体言につくという特殊な構文に限って、終助詞としての働き、つまり、文の表現類型の成立に関わる働きも持つと言っているのである。この場合の「ね、よ、さ」は、いわば「間投助詞の終助詞的用法」とでも言ってもよいものであろう。

このように梅原で助詞の所属に重なりが見られるのは、「ね、よ、さ」が、意味・機能の点から、終助詞としても位置づけられるとされているからである。梅原のこの考えは、「ね、よ、さ」を終助詞として位置づけ、これらの助詞には間投助詞としての用法もあるとする考え方（2.2、2.3、2.4で扱う）に連続していくものであろう。

2.1.2 意味・機能・用法はどのように説明されてきたか

梅原が間投助詞「ね、よ、さ」は、終助詞としての働きももつとしたのは、「ね、よ、さ」が確認表現としての機能を担うことからであった。そこで、ここでは、山田（1929、1936）、橋本（1948）、田中（1977）、小倉（1985）、仁田（1982）、梅原（1988）で、終助詞、間投助詞の意味、機能、用法がどのように扱われているかを見る。

- 1) 山田 (1936)¹⁾は、終助詞を述語に関係があり常に文句の終止にのみ用いられるもので、感動・希望・疑問・命令・禁止・念押しなどの意味を有するものとし、間投助詞を、語勢を添え、若しくは感動を高めるために用いられるものとしている。
- 2) 橋本は、終助詞を、それが用いられたところで文の意味が終止するもの（禁止、確かめ、問いなど）であるとし、間投助詞については、言い切りの文節と続く文節ではイントネーションが異なることに触れているだけである。
- 3) 田中は、終助詞を、質問・命令・禁止・詠嘆といった、一定の文表現を成立させうるもので、文表現を決定する性格をもっているものと、助詞「の」に見られるイントネーションの助けを借りてはじめて特定の文表現を成立させうるものに分けている。また、間投助詞を、話し手のうちけた、親しみの情を文全体にもりこんでいくものや、呼びかけに用いられるものであるとしている。さらに田中は、間投助詞の用法として話し手の親しみの気持を盛りこむものの他に、「ポーズを作る働き」、「語句を強調する」用法をあげている。(p. 449)
- 4) 仁田は、終助詞を命題に付き、それに、話し手の命題目当てのパラディグマチックな関係を付与し、そのことによって文を完結させるといったシンタグマチックな関係を与えるものとし、「文の表現類型の成立にかかわるもの」と「文の表現類型の成立には直接かかわりなく、話し手の聞き手目当てを中心に表すもの」に二分している。そして、間投助詞（間投性終助詞と呼ぶ場合もある）は、話し手の聞き手に向けたそれらの取り上げ方を示すものとしている。

仁田によると、終助詞、間投助詞は以下のように分類される。

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| ①終助詞 | か、もんか、な（禁止）、け、の、わ、ぞ、ぜ、よ |
| ②終助詞と間投助詞の間に位置するもの | さ、よ、の、だ |
| ③間投助詞（間投性終助詞） | ね（ねえ）、な（なあ） |

仁田は、間投助詞を「間投性終助詞」とも呼び、「な（なあ）、ね（ねえ）」をあげている。そして、終助詞と間投助詞の間に位置するものがあるとして、「さ、よ、の、だ」をあげている。「さ、よ」には、「明日は雨さ」のように、文の表現類型の成立に直接にかかわる終助詞的な場合があるとしている。仁田では、「の」「よ」以外の助詞の所属に重なりは見られないが、その名称には「間投性終助詞」や「終助詞的な場合」のような、終助詞に軸を置いた見方への傾きが見られる。

上記の分類中、②の「終助詞と間投助詞の間に位置するもの」という位置づけと、③の「間投助詞（間投性終助詞）」という位置づけの違いであるが、「さ、よ」には、「明日は雨さ」のように、文の表現類型の成立に直接にかかわる終助詞的な場合があるとしているところから、文の成立に関わるかどうか②と③を分けるポイントだということであろう。「間

投性終助詞」という名称が、2.4で見る「終助詞の間投用法」と内実が異なることは、仁田の分類では間投助詞とされている「ね、な」が、終助詞に属していないことからあきらかであろう。

- 5) 梅原も、仁田と同じように、終助詞を、「文表現の種類を決定するもの」と「表現内容を聞き手に持ちかけるもの（間投助詞に類する働き）」に分類し、間投助詞は、「表現内容を聞き手に持ちかけるもの」としている。

2.1.3 「聞き手」意識の登場

以上からわかることは、仁田、梅原では、間投助詞の意味・機能として、山田や橋本では用いられていなかった、「話し手の聞き手に向けたそれらの取り上げ方を示すもの（仁田）、表現内容を聞き手に持ちかけるもの（梅原）」という表現が使われていることである。つまり、間投助詞が「聞き手」を意識したものであることが明確になってきている。それと同時に重要なことは、仁田、梅原では終助詞の意味・機能の一つとして、「文の表現類型の成立には直接かわりなく、話し手の聞き手目当てを中心に表す」（仁田）、「表現内容を聞き手に持ちかける」（梅原）ことが取り上げられている点である。終助詞が文表現の成立といった意味・機能だけでなく、「聞き手目当て性」があることが明記されるようになってきているのである。梅原が述べているように、

（例）僕ね、昨日ね、ディズニーランドに行ったんだ。……

あの人とさ、ドライブに行こうってさ、約束してたのよね。

における「ね」や「さ」と、

（例）午後は買い物に行くのよね。

そんな馬鹿なことするなよな。

での「ね」や「な」の、表現内容を聞き手に持ちかける働きは、両者が、文末にのみ位置するか、成分の切れ目に位置するか、という違いがあるだけに過ぎない（pp. 325-326）のである。

上で見たように、仁田、梅原では、終助詞を、「文の表現類型の成立にかかわるもの、表現内容を聞き手に持ちかけるもの」という2つの視点でとらえ、間投助詞を「表現内容を聞き手に持ちかけるもの」という視点でとらえる見方が成立している。終助詞の機能には、間投助詞のそれと重なるものがあることが意識されてきているのである。あるいは、間投助詞の機能は終助詞の機能の一部という認識が成立してきているのである。

ここにおいて、「文末に用いられるものを終助詞、文中・文末に用いられるものを間投助詞とする」考え方に変化が表れてきている理由が読み取れる。つまり、聞き手意識をめぐって、これまで間投助詞に位置づけられてきた「ね」、「よ」、「さ」を、終助詞の範疇に含める素地が整ったのである。

2.2 文の終わりに来る助詞を終助詞とし、終助詞を終助詞と間投助詞相当に下位分類する立場

ここでは、終助詞を終助詞と間投助詞相当とに下位分類する研究を取り上げる。

- 1) 佐治 (1957) は、終助詞を「文の終わりに来る助詞」であり、話し手の何らかの態度を表すことを示すものとし、終助詞と間投助詞相当に下位分類している (p. 27)。終助詞の第1類は、続く文節に付き得て他の終助詞に付き得るもので、間投用法があり、間投助詞と言われるものに相当するとして「ね・な、よ・や・え・い、さ」をあげている。第2類は、続く文節に付き得ず他の終助詞に付き得ないもので、間投用法がない、せまい意味での終助詞であるとして「わ、とも、ぞ・ぜ、か」をあげている。そして、第1類のものは、話し手の聞き手に対する直接的な態度である (p. 28) と述べている。

佐治の言うところでは、終助詞の第1類と第2類は重なり合わない。終助詞を下位分類しているのだが、「文の終わりに来る助詞」で「続く文節に付き得て他の終助詞に付き得るもの」を間投助詞に相当するもの、「文の終わりに来る助詞」で「続く文節に付き得ず他の終助詞に付き得ないもの」を狭い意味での終助詞としているところは、2.1の立場に近い。しかしながら、第1類を「間投助詞と言われるものに相当する」としている点は、わかりにくい。2.1で検討した間投助詞と同じ位置づけであるということであろうか。

- 2) 渡辺 (1968) は、終助詞の構文的職能は文を終止するという点につきるとし、その意義的特徴は、聞き手に訴え、話し手自身の感情を表出するものとしている。渡辺は終助詞を、判断とのつながりを存す第1類 (か、さ、わ、ぞ、ぜ)、対象への呼びかけを存す第2類 (よ)、話し相手への呼びかけをししか存しない第3類 (ね (な)) に分類している。続いて渡辺は、「さ」「よ」は文中で第3類的に間投助詞としても用いられると述べ、これらは話し相手との直接的なつながりを示すものであり、終助詞と間投助詞との連続を示唆するものとしている。

渡辺が、「さ」を半間投助詞、「よ」を準間投助詞、「ね」を純間投助詞としているところを見ると、終助詞には、下位分類として終助詞と間投助詞があると分類していることになろう。

半間投助詞といい、準間投助詞といい、純間投助詞という渡辺の分類は極めてわかりにくい。純間投助詞の「ね」が「話し相手への呼びかけをするもの」、半間投助詞の「さ」、準間投助詞の「よ」が「話し相手のとの直接的なつながりを示すもの」としている点、「聞き手目当て性」が終助詞・間投助詞に共通する要素であると認めていることを示しているのではないだろうか。

2.3 文末で用いられるものを終助詞、文中で用いられるものを間投助詞とする立場

ここでは、文末で用いられるものを終助詞、文中で用いられるものを間投助詞とする研究を

見ていく。

- 1) 大野 (1977: 1-28) は、終助詞とは常に文の末尾に位置する（そこで文が切れる）特性を持つ助詞であり、文の判断全体を話しの相手に持ちかけ、関係づけをする役目を持つもの、間投助詞は、いわゆる「文節」の切れ目に投入される助詞で、
- 「あのデスネ、今夜デスネ、会合がデスネ、あることになりました」

のように、相手に対する話し手の人間関係の近さ、遠さ、親しさ、上下関係についての意識、または呼びかけなどがここに表明される (pp. 26-27) としている。

- 2) 山田 (2004) は、終助詞を、発信系終助詞「ぞ、さ、わ」、確認系終助詞「ね、よね」、疑問系終助詞「か」「かい、かな、かしら」に分類し、「ね (ねえ)」「さ (さあ)」「な (なあ)」など文節の切れ目に入れる助詞は間投助詞と呼ばれ、聞いてほしいと訴えかける働きを持つ (pp. 160-162) としている。これによると、「ね」「さ」は、その置かれる位置によって、終助詞でも間投助詞でもあるということになる。

- 3) 森田良行 (2007: 322-323) は、終助詞とは、文末にあって、疑問や禁止、詠嘆・感動・念押し・確述などの気持ちを添えて文をしめくくる働きの助詞の総称である。(中略) また、「よ、ね、な、さ」等は文末だけとは限らず、適宜、文中の文節の後に添えて、対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする役割を担っており、特に区別して間投助詞と名づける研究者もいる (pp. 322-323) としている。

大野が間投助詞としてあげている「ね」が終助詞でもあるかどうかは、大野が書いたものだけからは判断できないが、山田、森田からは、「ね」「さ」「な」が終助詞でもあり、間投助詞でもあるととらえられている（そうとらえる研究者がいる）ことがわかる。つまり、いくつかの助詞は終助詞でもあり、間投助詞でもあるというわけである。そして、上に見るように、山田にも森田にも終助詞と間投助詞の意味には異なりがあり、間投助詞は「聞いてほしいと訴えかける働きを持つ」「対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする」というように「聞き手目当て」であることが述べられている。ここでは、「ね、さ、な」のような助詞は、終助詞であり間投助詞でもある、という位置づけが明確になされるようになってきている。

2.4 文末に置かれるものを終助詞、文中に置かれるものを終助詞の間投用法とする立場

ここでとりあげるのは、いわゆる間投助詞を「終助詞の間投用法」と規定する立場に立つものであり、2.3とは、名称の与え方に異なりが見られるものである。

- 1) 益岡・田窪 (1992) は、終助詞を解説する中で、次のように述べている。「終助詞のうち、「ね」と「さ」は、文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働きをする。これを、終助詞の「間投用法」と呼ぶ」(p. 53)。ここでは「間投助詞」という一項は設けられていな

い。

終助詞の「ね」が、話し手と聞き手が知識を共有しているかどうかを確認するものと説明されているところから、終助詞と間投助詞の機能は異なるものにとらえていると思われる。

- 2) 『現代日本語文法 4』(2003) も、終助詞とその間投的な用法という立場をとる。間投的な用法として取り上げられているのは「ね」と「さ」である。ここでは、「ね」についての記述を取りあげる。

『現代日本語文法 4』は、終助詞「ね」の用法として3つをあげたあと、「ね」には間投的な用法があるとして、次のように説明している。「ね」は、文末に現れるだけでなく、文中に現れる間投的な用法をもつ。(中略) 間投的な「ね」は、話し手が聞き手を無視して一方的に話しているのではなく、聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示すものである(p. 260)。つまり、終助詞用法の3) 話し手が発話を続ける際に、聞き手を意識していることを示すもの(p. 259)と同じであるとしている。この説明によると、終助詞と間投助詞の意味・機能には重なりが見られる。

1) の益岡・田窪においても、2) の『現代日本語文法 4』においても、「ね」と「さ」は終助詞であると同時に文中の切れ目に現れる間投用法を持つというわけである。そして「間投用法」は「聞き手の注意を促す働きをする」(益岡・田窪)のものであり、「聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示すもの」(『現代日本語文法 4』)である。ここでも「聞き手目当て」であることが述べられている。

2.5 終助詞、間投助詞を分けない立場

終助詞、間投助詞(終助詞の間投用法)を分けない立場には、二通りある。一つは、終助詞、間投助詞(終助詞の間投用法)を分けることなく、「感動助辞」(松下大三郎)のような名称を与えるものである。もう一つは、「終助詞」で一つにくくる立場である。

ここでは、時枝(1951、1954)、白石(1968)を取り上げる。

- 1) 時枝(1951)は、対人関係を構成する助詞(pp. 8-9)として、「ね」「か」「ぞ」「よ」「な(禁止)」「なむ」「な(希望)」「かし」をあげている。

「ね」については、「一種の感動助詞」であるとして、聞き手を同調者としての関係に置こうとするものであり、「よ」は、聞き手に対して、話し手の意志や判断を強く押し付けるものであるとしている。また、時枝(1954: 227)では、感動を表わす助詞として「か、かしら、よ、な、ね、さ、そ、わ、ものか、とも、の、や」などをあげている。

時枝の記述からは、対話の相手である「聞き手」への言及が見られる。

- 2) 白石(p. 139)は、感動詞のような役をする助詞を終助詞というとして、終助詞は、文末、

文節の終わりに来ることで命名したのである、と述べている。白石によると、終助詞は、文の終わりや文節の切れ目に用いて、「か、な（禁止）、な（なあ）、ぞ、よ、ね」のように、疑問・禁止・感動・強めなどを表すものである。白石があげている例、

行ったのね。ぼくね、きょう行ってきたの。

いいさ、それがさ、なかなかわからないだよ。

を見ると、終助詞と間投助詞が終助詞という名称のもとに、一つにでくくられていることがわかる。ここには、「聞き手」への言及はない。

3. 間投助詞をどうとらえるか

3.1 聞き手の発見

間投助詞のとらえ方の変遷は、終助詞のとらえ方の変遷でもある。それは、終助詞を、構文的職能、陳述という点から見てく中で、間投助詞の意味・機能と両者の共通性を発見する過程であったとも言える。そして、それはまた、終助詞と間投助詞の所属に重なりがなく、二分されていたときから、重なりを当然と見る方向へ向かってきた歴史でもある。そこにあるのは、「聞き手の発見」という終助詞・間投助詞の意味・機能の共通性であった。そのような過程の中で、「ね、な、さ」のような、間投助詞に帰属させられていた助詞が、終助詞にも帰属させられるようになったのである。終助詞に文の成立に関わる機能と、聞き手目当て機能が認められたことで、終助詞と間投助詞の機能の重なりが理解されてきたとも言える。ことばを変えれば、「聞き手の発見」が、間投助詞を間投助詞たらしめてきたということである。

ここで、2節で取り上げた研究や概説書には、「聞き手」がどのように記述されていたかを、あらためて年代順に簡単にまとめてみる。

山田（1936）、橋本（1951）：聞き手に関する明示的な言及はない。

佐治（1959）：「間投助詞と言われるものに相当する」「ね・な・よ」などは、「話し手の聞き手に対する直接的な態度である」

渡辺（1968）：終助詞の第3類に分類した「ね」（渡辺の言う、「純間投助詞」）は「話し相手への呼びかけをしか存しないもの」

田中（1977）：「呼びかけに用いられるものである」

大野（1977）：「相手に対する話し手の人間関係の近さ、遠さ、親しさ、上下関係についての意識、または呼びかけなどがここに表明される」

仁田（1982）：「話し手の聞き手に向けたそれら（命題）の取り上げ方を示すもの」

梅原（1988）：「表現内容を聞き手にもちかけるもの」

益岡・田窪 (1992) : 「聞き手の注意を促す働きをするもの」

『現代日本語研文法4』 : 「聞き手を意識しながら話していることを示すもの」

山田 (2004) : 「聞いてほしいと訴えかける働きを持つ」

森田良行 (2007) : 「対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする」

このように、「聞き手の発見」は、研究の早い段階から見られる。しかし、その内実がどのようなものであるかは、ここにまとめた言葉以上のものは、わからない。

3.2 聞き手を意識するとは

3.1であげた、「表現内容を聞き手にもちかける」「聞き手の注意を促す働きをする」「聞き手を意識しながら話していることを示す」「聞いてほしいと訴えかける働きを持つ」「対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする」などと表現されている「聞き手を意識すること」は、具体的にどのような内容を指すのだろうか。間投助詞（終助詞の間投用法）に焦点をあてた研究はまだ少ないが、ここでは談話分析の視点から、間投助詞に迫った2つの研究、森田笑 (2007) と伊豆原 (2008) を取り上げる。

- 1) 森田は、終助詞・間投助詞の談話中での働きを分析し、両者を発話行為詞として位置付けることを提案している。森田はまず、

(1) いいよね：、ごはんがおいしくてね：、この街ってね：。

の例をあげ、3つの「ね」のどれを終助詞といい、どれを間投助詞というのか、そもそも話し手はこれらを終助詞・間投助詞として使い分けているのかと疑問を投げかける。その上で、「ね」や「さ」が、「話者の動き、行為、活動といったものを、その場の参加者の相互行為上の問題に合わせて区切っている」ことを例示し、「ね」や「さ」などは発話の最後に現れるにしろ、発話の途中に現れるにしろ、何らかの区切りをつけていること、相互行為の中での微妙な動きを示唆する機能を担っていることを明らかにしている (pp. 46-51)。

- 2) 伊豆原は、感動詞、間投助詞、終助詞の「ね」「よね」「よ」の談話管理機能を分析することで、間投助詞、終助詞はそれぞれ独自の機能をもっていることを明らかにした²⁾。

伊豆原によれば、終助詞と間投助詞の談話管理機能は異なる。間投助詞の談話管理機能は、大きく聞き手を発話に注目させる注目表示機能であり、談話の「時間性」と関わる機能と「聞き手に配慮」するための機能の2点があるとしている。談話の「時間性」と関わる機能とは、間投助詞を、話者が発話の保持を図るために用いたり、話者交替の際に用いたり、聞き手の理解を確認するために用いたり、発話への引きこみを図る際に用いたりすることである。そして、「聞き手に配慮」するための機能とは、正しく伝えようとしたり、わかりやすく伝えようとして言い直しや訂正をする際に、聞き手の注目を引こうとして使われるもの

である。

一方、終助詞の談話管理機能は、「聞き手への同意要求」や「同意」、「共感」、「知識の共有化」を示すものであるという。終助詞にも、間投助詞にもともに、「聞き手に対する意識」があるといっても、その内実は異なるのである。

このように談話管理という視点から終助詞、間投助詞を見ることで、これまで見えてこなかった両者の違いが明らかになる。終助詞も間投助詞もともに、話し言葉で用いられるものである。伊豆原の示しているように、話し言葉において文中に用いられる「ね」が、文末で用いられる「ね」や「さ」と異なる意味・機能をもつとしたら、両者は分けて考えるべきなのではないだろうか。間投助詞には、終助詞にない談話上の機能があることから、間投助詞を助詞の一分野として独立させて考えるほうが説明として望ましいのではないだろうか。

4. 今後の課題

本稿は、ほとんど注目されることのない、しかし、日常会話に頻出する「ね」や「さ」などの間投助詞が、これまで、どう説明されてきたかを、分析・考察したものである。間投助詞の談話分析は、ようやく緒についたばかりである³⁾。間投助詞を助詞の一分野として認めるべきだとした場合、その語数の少なさが問題になるかもしれない。わずか数語のために、一つの範疇を用意すべきかどうかである。しかし、問題は語数の多少ではなく、意味・機能の独立性・重要性ではないだろうか。

談話分析がさらに進められることで、間投助詞の位置づけに関する説明も深まっていくのではないと思われる。そのために研究を続けたいと思う。

注

- 1) 終助詞・間投助詞という用語は、山田（1929: 680、1936: 508, 517）で初めて用いられたものである。しかし、山田（1929: 680）で終助詞、間投助詞として言及されているのは文語に属するもので、口語に属する終助詞、間投助詞は言及されていない。
- 2) 伊豆原が実際に取りあげている助詞は、使用したデータの関係で、間投助詞としての「ね」、終助詞としての「ね、よね、よ」、感動詞的に用いられている間投助詞の「ねー」である。
- 3) 定延（2005）は、「ね」や「さ」とどまらない、いわゆる周辺的な間投助詞が日々行われていることに高い関心を寄せている。定延が取り上げている間投助詞には「じゃ、のう、ニャ、ピョン」などさまざまなものがある。

引用文献

- 伊豆原英子 (2008) 「間投助詞・終助詞の談話管理機能分析—「ね」「よね」「よ」の場合—」『愛知学院大学教養部紀要』第56巻1号 平成20年度国文学年次論集に再録
- 梅原恭則 (1988) 「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』明治書院
- 大野晋 (1977) 「日本語の助動詞と助詞」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店 (pp. 1-28)
- 北原保雄 (1976) 「文の構造」『岩波講座日本語 6 文法Ⅰ』岩波書店 (pp. 33-82)
- 小倉肇 (1985) 「終助詞・間投助詞」『研究資料日本文法⑦助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典』明治書院 (pp. 225-250)
- 定延利之 (2005) 『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化—』岩波書店
- 佐治圭三 (1956) 「終助詞の機能」『国語国文』第26巻、第7号 (pp. 23-31)
- 鈴木英夫 (1988) 「終助詞についての」構文論的研究『国語と国文学』1988年3月号 (pp. 1-16)
- 田中章夫 (1977) 「助詞 (3)」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店 (pp. 359-427)
- 時枝誠記 (1951) 「対人関係を構成する助詞、助動詞」『国語国文』20巻、9月号 (pp. 1-10)
- 橋本進吉 (1948) 『国語法研究』岩波書店
- 藤原与一 (1990) 『文末詞の言語学』三弥井書店
- 益岡・田窪 (1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 森田笑 (2007) 「終助詞・間投助詞の区別は必要か」『月刊言語』2007年3月号 大修館書店 (pp. 44-52)
- 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- 山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版
- 山田孝雄 (1925) 『日本文法論』実文館
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』実文館
- 渡辺実「終助詞の文法的位置—叙述と陳述再説」『国語学』72集 (pp. 127-135)

男らしくない男

——デフォアの『シングルトン船長』について——

近 藤 勝 志

序

『シングルトン船長』の正式の題名は *The Life, Adventures, and Piracies, of the famous Captain Singleton* (1721) である。J. Sutherland は『シングルトン船長』のことを、初めから終わりまで冒険物語であって、それ以外の何ものでもないと断言している。本論の課題はサザランドが指摘する冒険物語を「男らしさ」を手がかりにして具体的に読み直してみることである。もう少し詳しく言えば、この作品は題名に謳われているように前半部のアフリカ横断旅行に代表される冒険と後半部の海賊行為に大別される。主人公はデフォアの他の主人公同様、孤児・捨て子という設定になっている。前近代社会の社会通念であろうが、子供への関心がきわめて低いことを指摘しておきたい。たとえば、モル (Moll Flanders) は 5 回の結婚で総計 15 人の子供を出産するわけであるが、子供の行く末に言及することは稀である。主人公のシングルトンはジャック大佐 (Colonel Jack) 同様孤児であり、教育の機会を逸しているためか、前後半を通じて国内にとどまるかぎり、男らしい生き方は叶わない。しかし国外に出るやアイデンティティの確立のため富の追求に邁進する。というよりむしろ「交換への欲望」という人間の本性ともいえる欲望に駆り立てられる。前半部ではアフリカ大陸での合法的な象牙、砂金採取などにより莫大な資産形成に成功し、教師役の砲手 (Gunner) の指導のもと、まがりなりにもイギリス人としてのアイデンティティを確立して帰国する。しかし本人の語るところでは、「教育はなし、美德・宗教心には無縁」な存在にすぎないためか帰国後短期間に資産を蕩尽し、元の無一文に戻ってしまう。後半部では人生の振り出しに戻ったシングルトンは前半部同様生きるため、海賊に身を転じ再起を図る。海上で出会ったクウェーカー教徒のウィリアム (William

Waters) の計らいで見事に海賊から商人へ轉身し、商人としてのアイデンティティを確立して、無事帰国を果たす。しかし問題にしたいのは紳士階級への第一歩としての商人というアイデンティティを確立して、帰国を果たしても、シングルトンが英国内では *incognito* な生き方を強いられることである。別の言い方をすれば、この作品は紳士の子でありながら、George L. Mosse の言葉を借りれば、社会によって周縁化された、男らしさのいわば対抗的タイプともいえるシングルトンが奪われたアイデンティティを回復する物語として読めるということである。

I 子供時代・アフリカ横断旅行

まずシングルトンの生い立ちから見ていきたい。シングルトンはかなり裕福な両親のもとに生まれたということであるが、出自についての曖昧さは否めない。分かっていることは、子守 (Nursery Maid) の不手際のため、2歳の頃にイズリントン (Islington) 近くの原っぱで誘拐され、まず女の物乞いに売られたということだけである。つぎにジプシーの女性に12シリングで買い取られ、6歳まで一緒に各地を放浪する。ジプシーの母の処刑後12歳になるまで教区で厄介者として養育される。彼はある時、母と信じていたジプシーの女性から、彼女が実の母親でないことを知らされたり、ニューファウンドランド航路で行動を共にしていた親方からは、自分の子供があることを口実に、父親と呼ぶことを禁じられてしまう。このように幼少時から家族・家庭に恵まれないだけでなく、名前すら定かでない。ジプシーの母によれば、ボブ・シングルトン (Bob Singleton) という名前も洗礼名ではなく、単なる通称にすぎない。このように少年期までのシングルトンは、アイデンティティの不確かな物のような存在にすぎず、社会的な弱者であることが強調されている。

シングルトンが帰属するものを持たないことは、12歳の頃、乗っていた船がポルトガル船に拿捕されリスボンに係留中に、ポルトガル人老パイロットとの間に交わされるつぎのような会話からも明らかである。

「船を下りなさい」

「どこへ行けばいいですか」

「どこでもいい。なんなら、故郷へ帰りなさい」

「どうして帰らなければいけませんか」

「身寄りはないの」

「ありません。あの犬だけです」

と言って、犬を指さした。この犬は、さきほど肉片を盗んできて私のところへ置いてくれたので、それを食べたところだった。つまり、この犬だけが親友で、私の食事の世話をしてくれていた。(4)

シングルトンが伝統的な意味での冒険物語のヒーローから逸脱した人物であることは、犬並の生活を余儀なくされている境遇から明らかである。

帰属意識の希薄さは難破した船の修理が終わり皆でアフリカ大陸を目指すときの態度にも見られる。

私はそのことでは何も不安はなかった。行き先はどこでも構わなかった。前途に何が待っているかとか、自分の身に何が起こるか、あるいは起こらないかなどは考えてもみなかった。私の年齢では皆同じであろうが、提案されたことには、それがどんなに危険なことでも、成功の見込みがなくても、私は賛成した。(44)

帰属するものを持たないことについては物語の後半で、海賊生活に見切りをつけ、全うな生活に戻ることに関するシングルトンとウィリアムの対話をあげることができる。孤児であるシングルトンはホーム (Home) にあまり執着しない。取引のための取引、ましてや盗みのための盗みを働く輩はいないというウィリアムの言葉に対し、シングルトンは里心がついたのですかと反論する。それに対し、ウィリアムは国外にいる者にとって、資産形成の成就と望郷の念は不即不離の関係であり、それは自明の理でもあると説く。シングルトンは慈善学校育ちの身には、現在居住する場所こそがホームであり、従って資産の多寡とは関係なく、行き先を案じることはないと答える。(256)

シングルトンの根無し草的な人生を象徴するエピソードをもうひとつ挙げておきたい。シングルトンは、船上における謀反の咎でマダガスカル島に仲間とともに置き去りにされる。1年後仲間とともに脱出を敢行するが、貧弱なカヌーでは、航海というより、漂流に近い航行にならざるを得ない。

われわれは、本当に惨めだった。航海に出たが、航海しているとは言えなかった。どこかへ向かっているようで、向かっていなかった。自分たちのしたいことは分かっていたが、実際のところ何をしているのか分かっていた。(32)

このように家族・家庭さらに教育にも恵まれないシングルトンが生き延びるためとはいえ、

誘われるままに、船乗りという職業を選択することは、当然の成り行きであろう。

まず前半部のエピソードをいくつか具体的に見ていきたい。そこから透けて見えてくるものと、後半部の海賊らしからぬ生き方には通底するものがあるようである。船乗りとして英国を離れたシングルトンについて、まず指摘できることは、ジブシーとの放浪生活とか教区育ちのためか、教育を受ける機会を逸したことと、幼少時に耐えた辛苦のせい、周囲の情勢に対して善悪・正邪の判断をするよりは損得の判断をしがちなことと、自分の周囲の環境に概して敏捷な反応を示さないことである。

アフリカ横断のエピソードで注目すべき点は、まず、語り手（シングルトン）がアフリカの地誌・自然にあまり関心を示さないことである。たとえば、アフリカ大陸を横断中に、シングルトンのグループは、何度か大河に遭遇し、渡河に知恵をしばったり、支流で金の採取に没頭したりするが、河幅の説明に際しては、グレイヴズエンド（Gravesend）の下流とか（64）、ウィンザー（Windsor）あたりのテムズ河とか、水深については、ロンドンフェリーの航行に支障をきたすほどの深さしかない（73）といった説明に終始する。動植物についても同様の説明が繰り返される。たとえば、野兎については、「英国の野兎より大型、敏捷性に欠けるが美味」といった具合である（113）。博物学的な関心に変わるものは、執拗な食糧と飲料水確保への言及である。

つぎに印象的なことは、シングルトンのグループと住民との関わりである。彼らはモザンビーク沿いに北上した場合、紅海（the Red Sea）でアラブ人につかまり、トルコ人に奴隷として売られる可能性が高いこと、またアラビア海を横切ってインドまで航行可能な船の建造はかなわないと結論づける。次善の策として浮上したのがアフリカ横断旅行である。一行はアフリカ大陸の横断を始める前、酷暑の砂漠横断が不可避なため、物資の運搬手段に悩まされる。シングルトンは、住民との間に諍いを起こし、諍いの収拾にかこつけて、住民を10余人捕縛し、奴隷化することで、ガイド役とか他の地域の住民との折衝、物資の運搬役をさせることを提案する。横断旅行中にシングルトンは頭角を現し、仲間からキャプテン・ボブ（Captain Bob）と呼ばれるようになり、事あるごとに指揮を執ることになる。一行が住民の奴隷化の口実を思案中に、一行にとって好都合なことに、住民の一部が交易中に不正行為をした挙げ句、先に攻撃を仕掛けてくる。これを機に、一行は銃による反撃に出て、60人前後の屈強な若者の捕縛に成功する。さらに戦闘中に負傷した住民の王子の怪我を完治させることで、王子に捕縛した住民の間接統治を担わせると同時に、住民の信頼を得ることに成功する。

マダガスカル島滞在時およびアフリカ大陸横断の冒険で頻繁に言及されるのが、集団による、生存のための創意工夫の数々である。食糧と真水の調達それに物資の運搬手段の確保等に集団で知恵をしばる。『ロビンソン・クルーソー』（*The Life and Strange Surprising Adventures of*

Robinson Crusoe) の場合は、孤島でクルーソーが生存のために孤軍奮闘するわけであるが、『シングルトン船長』では、一行の中に砲手 (Gunner)、鉄細工師 (Cutler)、大工 (Carpenter) それに医師 (Surgeon) といった技術者が含まれている。面白いことに、4名の技術者の場合も、4人に特有の技術以外の事柄、たとえば、個性・風貌が紹介されることはない。ましてやそれ以外の人物は、細工物と交換した牛・山羊の干し肉づくり (コック見習い、34) とか、漏水防止用のピッチ・タールの代替品づくり (捕縛した現地住民、42) 等のように、生存のための技術に関わる時以外は、すべて関心の外におかれたままである。

時間軸に沿って前半部の主だった創意工夫を列举するとつぎのようになる。

- ①細工物による交換 (鉄細工師、27)
- ②牛肉の保存 (船乗り、29)
- ③真水の保存 (大工、30)
- ④交換した牛・山羊の干し肉 (コック見習い、34)
- ⑤船の漏水防止用のピッチ・タールの代用品 (捕縛した住民、42)
- ⑥熱砂対策を施した靴 (全員、48)
- ⑦位置の測定 (砲手、50)
- ⑧カヌーの軽量化 (大工、70)
- ⑨保存食用のパンの製造 (全員、71)
- ⑩軽量マットの製造 (捕縛した王子、84)
- ⑪釣り針・干物 (鉄細工師、87)
- ⑫雨期用の住居の強化と猛獣対策用の柵と杭 (全員、99)

上の引用から透けて見えることは、4人の技術者が中心になっているとはいえ、グループ全体が、アフリカ大陸という言葉から連想される伝統的な冒険に関わるというよりむしろ、物を手に入れる喜びと、それ以上に物を生産・加工して付加価値をつけ、さらにことばの通じない相手との沈黙交易の喜びを描くことに、語りの軸足が移動していることである。前半部を総括すれば、まず指摘できることは、シングルトン一行は国外では徹底した植民地主義者であるということである。つまり国外では「男らしく」、生き生きとしてくるということである。たとえば、シングルトン一行は横断中、羅針盤 (Compass) によって常に方向を確認している。捕縛を解かれたとえ釈放されても、武器も羅針盤も持たない王子一行が猛獣のいる大陸を逆戻りすることは不可能に近いはずなのにそれについては一切触れようとしない。語り手の眼差しが、技術と工夫、先述したように細工物の沈黙交易と金の産出量の数値化、仲間内での均等配分の

方向に向けられたままであることもつけ加えておきたい。

最後に横断旅行中に会った裸のイギリス人について触れておきたい。シングルトンの一行は、目的地である黄金海岸 (Gold Coast) 近くに到達したとき、シエラ・レオネ (Sierra Leone) のギニア会社 (English Guinea Company) の事務員 (Factor) をしていたイギリス人に出会う。シングルトンは裸のイギリス人について詳しい人物像の紹介を試みる。彼は紳士然としており、37歳前後、見たところ船乗りとか労働者階級の出ではない。ポルトガル語こそ話せないが、医者にはラテン語、相手によってはフランス語、イタリア語を使いこなす。シングルトンは今までに出会った人の人物像にこれだけのこだわりを見せたことはなかった。こだわりの理由は以下の通りである。このイギリス人の説得のお陰でシングルトン一行は「全とうな」方法で巨万の富を手に入れたからである。さらに言えば、裸のイギリス人は砲手とともにシングルトンがごろつき、放浪者から全とうな人間として帰国することを可能にしてくれた功労者である。彼の説得により、疲弊しきっていたにもかかわらず砂金の採取のため日程を大幅に遅らせる。採取した砂金は均等配分されることになり、シングルトンもかなりの資産の入手を保証される。

イギリス人の尽力により全うな人間として無事帰国を果たしても (137)、シングルトンは「祖国には信頼でき、相談のできる人」がいないため、悪い仲間と交わり、わずか2年間で全資産を放蕩三昧のうちに使い尽くし、もとの文無し状態に逆戻りしてしまう。このようにしてアイデンティティを確立出来ないまま最初の冒険は中途半端な形で終了する。シングルトンは12歳で英国を離れた時と少しも変わらないままつぎの冒険に船出せざるを得なくなる。

II 海賊行為

前半部ではアフリカ横断の冒険の際、交換価値に疎い裸の原住民と出会ったことで少なくとも無知な彼らとは自分は違うアイデンティティを持つという認識だけはできた。しかしシングルトンには風聞とはいえ紳士の生まれにふさわしいアイデンティティを回復するための試練・舞台が用意される必要がある。後半部は前半部では叶えられなかった「男らしい」男としてのアイデンティティ確立のための舞台設定がなされる。つまり資産形成のほかに悔悟、道徳への覚醒、宗教心の涵養、別の言い方をすれば、魂の浄化が必要になってくる。そうした観点に立って後半部のエピソードをいくつか見ていきたい。後半部は前半部と異なり、英国への帰路を除けば海が主な舞台になる。航跡は、カナリア諸島 (the Canaries, 141)→カリブ海域 (the West Indies, 141)→アラビア沿岸 (Arabia, 175)→台湾 (the Island Formosa, 198)→インド洋 (the Indian Ocean, 205) である。帰国時は陸路をバグダッド (Bagdat, 271)→ヴェニス (Venice, 272)

へと辿ることになる。広大な海域が先にあるのではなく、シングルトンらの海賊グループが安全に細心の注意を払いつつ、もっとも効率的な海賊行為、途中からは商取引を営むために移動を繰り返した結果が上述の広大な海域ということである。シングルトンらは広大な海域を移動する中で、陸地では想像もつかない量の現金・物資を、主に略奪行為によって入手する。この間に後で詳しく見ていくことになるが、命がけで蓄積した各国通貨および物資をもとにして、クウェーカー教徒で医師のウィリアムの助言により、ウィリアムの妹に対し慈善行為を重ねる。巧妙な善行が功を奏し、シングルトンは妹と結婚する。そして妹と作った家庭の中によくセンター (Centre, 276) を見い出せるはずである。

全体的に言えば、後半部も伝統的な意味での冒険から逸脱している。その一例として、住民との交戦のエピソードを見てみたい。海賊ものの場合、派手な戦を読者は当然のことながら、期待するはずであるが、後半部におけるもっとも大がかりな戦いは、ニューギニア (New Guinea) 近くの住民との小競り合いにすぎない。シングルトンの一行は海峡でのオランダ船による襲撃を避けるため、インド洋へ向かう。途中、飲料水と食糧の確保のためニューギニア近くの島へ立ち寄る。上陸した一行は和平の印に旗を浜辺に立てるが、住民は和平の合図を無視するかのように、弓矢で攻撃を仕掛けてくる。しかしインド洋航海を控えた一行は、食糧補給のため奥地へ向かうが、樹上からの投げ槍と弓矢による奇襲のため仲間を2人失う。樹上からの一方的な攻撃が続く中に、一行も反撃体制を整え、最終的には檣の巨木に何とか火薬を仕掛け、中にこもる住民もろとも爆破する。これにより両腕、両脚あるいは頭部が切断された住民の死体が砲弾のように散乱する。このエピソードで印象的なことは、住民の先制攻撃に対する報復の満足感と仲間の喪失に対する無念さよりも食糧の補充が叶わなかったことがより強調されることである。一行が住民の了承を得ないまま、勝手に侵入したこと、住民の言葉を解さないことが衝突の一因であることなどに語り手の分析がおよぶことはない。

洋上を漂う奴隸船との遭遇も後半部を特徴づけるエピソードの一つである。シングルトンの一行はブラジル沿岸で、600人以上の黒人を乗せたまま、洋上を漂う不思議な船に遭遇する。船がオランダで建造されフランスで改修されたことまではすぐに判明するが、不思議なことに白人の姿は一人も見当たらない。遭遇から10週間が経過した頃、英語が少し通じるようになって判明したことは、白人が黒人女性とその娘に対し二度にわたって乱暴を働いたことがもとで暴動になり、多数の死傷者を出しながらも、黒人側が勝利したが、黒人側は白人の報復を恐れ白人および武器弾薬類をことごとく海中に投棄したということである。このエピソードを通じて印象的なことは、ウィリアムの行動である。彼は暴動で重傷を負った黒人を見事に完治させたり、暴動に過剰反応する仲間に対し、「自然法」(the Law of Nature, 157) を持ち出し理詰めの説得を試みる。説得の結果、一行は労せずして船と黒人奴隷の確保に成功するが、これまでの

海賊行為の露見を恐れるあまり、その先の展望を描けない。結局ウィリアムがブラジルの農園主に言葉巧みに取り入り、5週間をかけて600余名の黒人奴隷と船の売却益として6万エイト（スペイン銀貨）とスループ船一隻それに大量の食糧と火薬を持ち帰る。

莫大な富を生むことでは、東インド諸島での香料の略奪・取引は、ブラジル沿岸における奴隷貿易と同じである。シングルトンの一行はオランダ政府による香料の取引禁止令を巧みにかわして、南シナ海域での香料の奪取・取引をもくろむ。狙いを定めるのはニュースペイン（New Spain）のアカプルコ（Acapulco）からやって来るスペイン船とか中国のジャンクである。中国船襲撃の目的は、ニクズクとか丁字あるいは絹、綿モスリン、キャラコとか現金の奪取にある。オランダ政府の監視を巧みにくぐり抜け、奪取あるいは取引を続ける中に、積み荷は香料だけで200トン前後に達する。全員が積み荷の量に納得した頃、一行は積み荷の換金のため台湾海域をめざす。素性の露見を恐れるあまり、中国本土にある英国の在外商館を迂回することを忘れない。取引相手は中国人商人である。彼らは一行を海賊と知りつつも、この海域での商談の成立は、彼らにとっても航海の大幅な短縮につながるため、積極的に取引に応ずる。取引対象は60トンもの香料とリンネルおよびウール製品である。このエピソードで注意したいのは、この商談のさなかにウィリアムが日本人僧から13名の英国人（座礁のため日本に滞在中）がグリーンランド（Greenland）→北極点（the North Pole）経由による北方航路を開拓したという情報を入手することである。結果的には、一行の新航路への強い関心にもかかわらず、一足違いで日本人僧との再会が叶わず、それ以上の探索は不可能になる。しかしこのエピソードから東インド諸島の経済的魅力と同時に新航路の開拓に寄せる当時の熱意が読みとれるようである。

シングルトンはウィリアムと共謀して主として略奪行為により獲得した積み荷を巧みな方法で換金することで商人への変身を急ぐ。手段の是非はひとまず措くとして、富を築くことで商人としてのアイデンティティを確認でき、帰国の準備は整ったことになる。しかしデフォーはここですんなり、シングルトンを帰国させずに、彼に過去の罪業を後悔させることを忘れない。ウィリアムの感化を受けて内省が可能になり後悔を意識し始めると、莫大な額に達していた資産も、足もとの塵芥と同然のものと思われてくる。所有欲も当然のことながら萎えてしまう。それどころかシングルトンは自殺とか資産の遺棄すら考える。ここでウィリアムは、シングルトンに対し、手当たり次第に略奪した資産を元の所有者に返還することが現実的でないことをまず納得させる。実行可能な次善の策として、未亡人で4人の子供を抱えている自分の妹への送金という善行を代替案として提案し、それで何とかシングルトンの悩みの解決をはかる。妹はウィリアムの安否を気遣う手紙に対し、近況を伝えると同時に帰国費用の足しにと5ポンドを同封してくる。ふたりは妹の優しさに涙を禁じ得ない。妹の人柄を見込んだふたりは

妹の金銭感覚を麻痺させないように、こまめに送金を続ける。まず160ポンド、10日後に540ポンド、さらに、2週間後に300ポンド、合計1000ポンドという送金方法である。送金額は5000ポンドに達する。

結論

シングルトンはウィリアムと共に莫大な資産を携え帰国する。一方、妹はウィリアムの指示に従い、病気を口実にして、叔父にも内緒であらかじめ故郷の店をたたみ、ロンドン近郊に新居を構えている。シングルトンは商人としてのアイデンティティを確立し、帰国後結婚した妹との家庭によくセンター（Centre, 276）を見出すことになる。しかし忘れてならないことは、帰国・定住に際しシングルトンとウィリアムが結んだ4項目からなる契約である。契約を列挙するとつぎのようになる。

- ①妹以外の誰に対しても素性を隠すこと
- ②ギリシャ風の髭を剃らずに、ギリシャ人（外国人）として暮らすこと
- ③妹以外に対して絶対に英語を使わないこと
- ④兄弟の絆を結ぶこと

シングルトンは人世の師（my Ghostly Father, 268）として仰ぐウィリアムの感化で何とか魂の浄化を済ませ、莫大な資産と共に帰国を果たす。商人としてのアイデンティティも確立し、ウィリアムの妹との家庭の中にセンターを見出したわけである。シングルトンの言葉を借りれば、「結婚によって閉ざされていた英国社会への扉が開かれた」にもかかわらず、彼は英語を捨て、ギリシャ人（外国人）として生きる以外にすべがない。つまりセンターは自分の中にしか存在しないことになる。男らしくないヒーローは放浪生活（a vagrant Life, 268）を続けながら、アフリカ横断旅行中に会った砲手、裸のイギリス人とウィリアムとの交流を通じて商人としてのアイデンティティの確立にこぎつけながら英国社会では incognito な状態でしか生きていけない。外国人として暮らすことは、海賊としての過去を隠す必要から生じた苦肉の策であることに違いはない。しかし貴族的でない、その意味でひ弱なヒーローは、生きる拠り所として金銭に固執し、財を築いて帰国しても英国内では「男らしく」生きられない。英国外での放浪生活中は可能であった「平等主義」など夢のまた夢である。

引用・参考文献

- Defoe, Daniel. *The Life, Adventures, and Piracies, of the Famous Captain Singleton*. Oxford University Press, 1990.
- . *The History and Remarkable Life of the Truly Honourable Col. Jacques Commonly Call'd Col. Jack*. Oxford University Press, 1989.
- . *Moll Franders*. Penguin Books, 1989.
- . *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*. Oxford University Press, 1981.
- Gregg, Steephenson H. *Defoe's Writings and Manliness*. Ashgate, 2009.
- Guilhamet, Leon. *Defoe and the Whig Novel*. Newark: University of Delaware Press, 2010.
- Maniquis, Robert and Fisher, Carl, (eds). *Defoe's Footprints*. The University of Toront Press, 2009.
- Richetti, John. *The Life of Daniel Defoe*. Blackwell Publishing, 2005.
- Sutherland, James. *Daniel Defoe, A Critical Study*. Harvard University Press, 1971.
- West, Richard. *Daniel Defoe: The Life and Strange, Surprising Adventures*. Carroll & Graf Publishers, 1998.
- 榎本 太『十八世紀イギリス小説とその周辺』、日本図書刊行会、2005年。
- 仙波豊ほか編『未分化の母体 十八世紀英文学論集』、英宝社、2007年。
- 宮崎孝一『ダニエル・デフォー アンビヴァレンスの航跡』、研究社出版、1991年。
- ジョージ・L・モッセ『男のイメージ 男性性の創造と近代社会』、作品社、2005年。

アントン・チェーホフの『桜の園』と 寺山修司の『田園に死す』に於ける 創造的なアバンギャルド芸術の可能性

清 水 義 和

01. まえおき

寺山修司は、1960年代、日本の新劇が上演するチェーホフの芝居は、赤毛の日本人俳優が西洋人を真似て発話するのが奇妙でおかしいと述べている。寺山は、柳瀬尚紀氏と『対談 翻訳家 この悪魔にも似た表現者』で以下のように述べている。

寺山 翻訳語を喋るとき、声優から踏襲してきた新劇の俳優たちの外人の発声法に対する固定観念が非常にあって、胸を張ってバリトンで「オー、ヘンリー、君はどこへ行ってたんだ」っていうふうな喋り方をするでしょう。あれもおそろしく肉体がないですね。（中略）チェホフなんかだって、生まれて始めて見たときには何となくしみりましたからね。しかし、だんだん言葉に対する疑問がでてくるようになって見れなくなっちゃったというのはありますけど¹⁾。

前述の寺山と柳瀬氏の対談を読むと、寺山がチェーホフの芝居が嫌いなのかと勘違いしてしまう。けれども、寺山は日本の新劇人によるチェーホフ上演が好きではないと述べているが、オリジナルのチェーホフ作品についての好悪を必ずしも述べているわけではない。

さて、1960年代日本でのチェーホフ劇上演を、2010年代から振り返ってみると、当時、専ら新劇関係者がチェーホフ劇を盛んに上演していた事に気が付く。ところで、1960年代、日本では、築地小劇場以来の欧米演劇とは別に、アメリカのニューヨークから伝わってきた前衛劇芸術の新しい波が草月アートセンターに押し寄せてきた。寺山は、このような前衛劇芸術に

影響されただけでなく、やがて、自身も劇団天井棧敷を引き連れてニューヨークやフランクフルトに渡り、同時に、世界各地で実験演劇や実験映画を具に観察する機会があった。だから、新しい芸術運動の視点から見ると、当時、寺山が、新劇のチェーホフ上演を観て日本の公演が旧態依然としたものに映ったとしても不思議ではなかった。かつて築地小劇場の女優、東山千栄子が『桜の園』のラネフスカヤ夫人を演じて、パセティックに心情を吐露する場面は、2010年代の上演方法から見るといささか感傷的である²⁾。

たとえば、流山児祥事務所が2010年に上演した『桜の園』では、安奈淳氏が演じたラネフスカヤ夫人は、自分が破滅する事に自虐的にならず、むしろ淡々としている。まるで、土地金がラスベガスで大金を摩ったように、ブルジョワによくある不労所得者のような愚かな振る舞いを見ているようであった。従って、ラネフスカヤ夫人の振る舞いは、失態を演じて笑いをとるピエロのようにみえる。しかも、実は、チェーホフは『桜の園』の中で女家庭教師シャルロッタの軽業師を配して、ラネフスカヤ夫人とパラレルの関係を作り出していた。

もう一度、演劇状況を1960年代に戻すと、当時、俳優座が1963年にチェーホフの『桜の園』を上演していた時に、俳優座や民藝以外に、様々な小劇場や学生演劇ではピンターの不条理劇を上演し、早稲田小劇場では別役実氏がベケットの不条理劇を盛んに上演していた。

或いはまた、ハロルド・ピンターやルイジ・ピランデッロの劇は、不条理劇であるという点を除けば、ピンターやピランデッロも、チェーホフのラネフスカヤ夫人の失態で大金を摩ると同じように彼らの劇の登場人物は滑稽さをドラマの中で表している。

それに、1960年代当時、新劇関係者は、一部の専門家以外に、ピンターやピランデッロの不条理劇がチェーホフの喜劇と極似している事を上演で積極的には表していないようであった。

けれども、ピンターにしてもピランデッロにしても、彼らが、チェーホフに影響されて新しい劇芸術を創作していた。いわば、ピンターやピランデッロは、チェーホフのヴォードヴィル風の喜劇を不条理劇（アブサード・プレイ＝馬鹿馬鹿しい芝居）に作り変えたのである。

寺山は、当時、新劇がチェーホフを真面目くさって上演しているのを見て、ピンターやピランデッロのヴォードヴィル風の視点でチェーホフ演出を批判し新しく解釈しようとしたのであろう。

ところが、1960年代、新劇関係者は、専ら新劇の立場からチェーホフを見て、寺山のチェーホフ評をサブカルチャー風の批判だと解釈し、幾分思い違いをしていたのである。だが、1960年代の新劇が上演したチェーホフ劇を、50年の歳月を濾過してふりかえって見ると、当時、新劇は、チェーホフのドラマを悲劇に重きを置いて、チェーホフをあまりヴォードヴィルとして解釈してみようとしなかったことが分かってくる。

さて、本島勲氏が、2010年、名古屋の千種文化小劇場で上演したピランデッロの『もしもあなたがそう思うならそのように』を演出した時に、「俳優の末吉康治さんは、彼が演じる男が狂信的に話すが、実は、客観的に見て狂信的で滑稽である事に気が付いてくれない。観客も専ら男が何故狂信的であるのかを見つめてばかりいて、一步引いて、滑稽であることに気が付いてくれない」と嘆いていた。つまり、チェーホフの『桜の園』にしても、1960年代の観客は当時登場人物を見て専ら哀れに思うだけで、彼らが滑稽だと余り気が付かなかったのと似ている。

また、ヴォードヴィルとして、チェーホフ劇を見る場合、ある程度の距離を置いて見る事が大切である。従って、流山児祥事務所が『桜の園』上演に成功したのは、チェーホフのドラマを突き放し距離を保って見つめていたからである。たとえば、名古屋の劇団パオカンパニーが、2010年『菩提樹の木の下で』を上演したとき、劇の中にチェーホフをキャラクターとして登場させていた。しかも、パオカンパニーの俳優たちは劇に感情移入するのではなくて、人形劇のマリオネットのように専ら劇そのものを突き放して、チェーホフのイメージを造型していた。だから、演出家の田井順子氏は、同劇で舞台を見るとき、観客が専ら俳優を中心にしているのではなく、まるで、ゴードン・グレイグのドラマを見るときのように、俳優を一種の人形のように舞台の一部として演出していた。言い換えれば、流山児祥事務所が『桜の園』上演に成功した秘訣は、役者一人一人の感情移入を殆ど排除し、まるで人形のように役者を総じて一見軽快で安っぽく見えるように作り上げていたからである。

流山児祥事務所は2010年9月、チェーホフの『桜の園』を従来の概念を、殊に日本の新劇風なりアリズムを破って上演してみせた。公演は、東京の池袋にある、『あうるすぽっととチェーホフフェスティバル2010』で「あうるすぽっと × チェーホフチェーホフ生誕150周年」を記念して行われた。公演前果たして、流山児氏がどのようにチェーホフの劇『桜の園』を徹底的に壊すのかは見所であった。ところが、流山児祥事務所の『桜の園』は、ロンドンのNT (National Theatre) で上演された『桜の園』や『かもめ』とそれほど変わらない質の高いハイ・レベルな上演を行った。また、いっぽうで、流山児祥事務所が、2009年東京ザ・スズナリで上演した天野天街演出の『田園に死す』は寺山の詩情を徹底的に破壊した公演であった。だから、チェーホフの『桜の園』の観劇前、流山児氏がチェーホフを如何にして徹底的に破壊するかを観るのが楽しみでもあった。ところが大方の予想に反して流山児氏は『桜の園』を上質で質の高い上演で見せてくれた。そこで、『桜の園』は、100年前の作品が時代を超越して、何時の時代にもシリアスなメッセージを語りかける作品である事を証明してくれたのである。

これまで、日本においては、チェーホフの『桜の園』上演は、新劇風のスタニスラフスキー・システムや、ブレヒト風の教育劇的な上演方法で行われた。いわゆる赤毛物風な演出

で、西洋人に変装したアジアの日本人がぎごちなく台詞を言い、無理な姿勢で所作をし、社会道德の模範を示す風潮が見られた。そこで、前述したように、かつて、寺山は、新劇の芝居を見る時、観客が座席でかしまって崇高な訓戒を傾聴する上演する方法を批判したのである。

そこで、次に、1960年代の新劇による日本でのチェーホフの『桜の園』と、殆ど同時代に寺山が撮った映画『田園に死す』をパラレルに見ながら、その相違点と類似点を二つの劇を対照的に見比べ、構造的に分析して、チェーホフと寺山のドラマ作りを浮き彫りにしてみたい。

02. 流山児祥事務所の『桜の園』上演

まず、最初に、流山児祥事務所の『桜の園』は、チェーホフの芝居の「間」の取り方が熟慮されていた。チェーホフの「間」の取り方は、かつてスタニスラフスキーが演出ノートで、自然科学的な心理学的分析を施し、しかもその解釈は緻密で極めて難解であった。

しかし、その後、ハロルド・ピンターが自分の劇にチェーホフの「間」の取り方を彷彿とさせるような「間」の取り方を取りこんだ。それ以来、チェーホフ劇は、従来の心理学的分析だけでなく、再び舞台での演劇的な観点で「間」の取り方をするようになった。その違いを実例で示すと、1994年、ロンドン大学の演劇学部のセミナーでは、デヴィッド・ブラッドビー教授は、チェーホフのドラマをスタニスラフスキーの演出ノートを使い、それに従って、先ず、キャラクターの職業の分析から入って行って、更に、その場面の細かい状況分析を詳細に調べて検討しながら、次第に、「間」が出来る瞬間を測定していった。

Loparhin: I say you're an old woman (*Makes to leave.*)

Mrs. Ranevsky: (*terrified*). No, don't go away, my dear man. Stay with us, I implore you. Perhaps we'll think of something.

Loparhin: 'Think'? This isn't a question of thinking.

Mrs. Ranevsky: Don't go away, I beg you. Besides, it's more amusing with you around. (*Pause.*) I keep expecting something awful to happen, as if the house was going to collapse around our ears.³⁾

ロパーピン 女の腐ったのですよ。(行こうとする)

ラネフスカヤ夫人 (怯えて) いいえ、行かないで、ここにいて、あなた。お願い。何かいい考えが浮かぶかもしれないから。

ロパーピン 今更何を考える事があるんです。

ラネフスカヤ夫人 行かないで、お願い。あなたといると、とにかく気が晴れるのよ……。

(間)

なんだか絶えず何かが起こるような気がするのよ。今にも家が頭上に崩れてくるような。

けれども、ピンターの劇では、ピンター自身が設定する「間」はチェーホフと異なる。というのは、ピンターの場合、台本のト書きに夥しい数の「間」が記してある。だから、キャストは、チェーホフの場合、台本に書かれた「間」以外に、書かれていない行間に「間」を探すのに手間取る。それに比べて、ピンターの場合、逆に、実際にテキストに記してある「間」から、否応なく「間」を考えさせられることになる。つまり、俳優は「間」を探すよりも先に、提示された「間」を見て、何故そこに「間」があるのかと真っ先に考えさせられる破目になる。結局チェーホフもピンターも同じ「間」があることに変わりはないのだが、それでも、ピンターの難解な不条理劇の網の目の下には、実はチェーホフのナチュラルプレイ（自然演劇）の「間」の心理分析が潜んでいる。つまり、ピンターは不条理劇であるのだけれども、心理分析においては、ピンターのドラマはナチュラリズム・プレイ（自然主義演劇）であるばかりか、しかも、時折劇場の仕組みから見ていくと、極めてリアリスティックな物差しで論理的に劇設定がされている。殊に、舞台上の劇設定においては、その観点から見ると、ピンターのドラマは、極めてチェーホフのドラマ設定に近いのである。言い換えれば、チェーホフの時代は、テレビや映画のメディアが無かった。だから、チェーホフがメディアの時代に生れたら、メディアの被膜の下に隠された心の奥底まで降りて行って、心理分析をせざるを得なかっただろう。従って、外観は、ピンターのアブサード・プレイとチェーホフのナチュラリズム・プレイは違うけれども、二人のドラマは基本的には「間」で繋がっている。

更に、流山児演出では、何時も問題になるラネフスカヤ夫人が何故浮浪者にお金をめぐんでやる場面を明快に提示してくれた。流山児演出によって、これまであったブルジョワとホームレスと間に横たわる歴然とした階級の垣根が取り払われてしまったのである。そこで、ラネフスカヤ夫人の階級意識が消えてなくなり、その代わり、彼女の性癖がよく見えるようになった。彼女はブルジョワ階級である前に、先ず浪費癖なのである。

また、流山児演出は、『桜の園』に描かれたロシア社会崩壊の問題を再考させてくれた。つまり、もはや、階級闘争や、構造主義や、脱構築の呪縛が希薄になった現代では、一族の崩壊よりも、むしろ執事の死と再生の方が強調されて劇が構成され纏められていたのである。

更に、ラネフスカヤ夫人が亡き子を思う母と子の関係や、桜の園が人手にわたってしまうところや、執事のフィルスが死と共に再生を暗示して終わるドラマ展開は、寺山の『田園に死

す』のドラマツルギーを想起させてくれた。つまり、『田園に死す』では、草衣が乳飲み子を川に流して間引きするところがある。また、化鳥の母親が借金の支払いが出来ず先祖代々の土地を売って、娘の化鳥は身を売る娼婦に身を落とす境涯がある。更に、化鳥が、地主と結婚した事を後悔して、恋人の嵐と縊りを戻して恐山で二人一緒に自殺し「母さん私をもう一度妊娠してください」と叫ぶところがある。それらは、寺山が『田園に死す』を書くときに、恐らく、チェーホフが『桜の園』に書いたテーマ、即ち、一族の崩壊のモチーフが念頭にあったからなのではないかと思わせた。

殊に、ラネフスカヤ夫人が亡き子を川で溺死させて後悔する場面は、思う母と子の関係を描いた場面との類似があり、殊に、寺山が、川を異常に恐れた理由を思い出させる。因みに九條今日子氏は、寺山が川を異常に恐れたのは、寺山が泳げなかったからだと言言している⁴⁾。

だが、寺山が川を恐れた大きな原因のひとつは、やはりラネフスカヤ夫人が亡き子を川で失う異常な嘆きと結びついているように思われる。親が子から眼を離した直後に子を失う事件は多々ある。たとえば、イブセンの『小さいイヨルフ』でも母親が夫と恋愛に耽っている間に、子が川に落ちて死ぬ。寺山の場合、『田園に死す』で草衣が赤子を川に流すシーンと、化鳥が嵐と心中して三途の川を渡るシーンとをダブらせて同じ藁人形を川に流すシーンで草衣と化鳥がパラレルに描かれている。寺山が二度にわたって藁人形を川に流すシーンを重ねてみせたのは、草衣が赤子がよいお母さんのもとに生まれ変わってくるように願う気持ちと、特に化鳥が「母さん私をもう一度妊娠してください」と語らせることによって、赤子と母親が一つに繋がるところにある。それにまた、寺山は、赤子であろうと母親であろうと、人間は元々同じ母胎から生まれることを象徴したかったからではないかと思われる。

チェーホフは、『桜の園』の中で、ラネフスカヤ夫人が亡き子を思う死の慟哭で始まり、フィリスの死の予告で終わる。そうだとすれば、寺山の『田園に死す』は草衣の赤子の死と化鳥の死をダブらせてドラマ化している意味がわかってくる。或いは、川に流すシーンだけをとってみれば、先に、草衣の赤子の藁人形が川を流れ、次に化鳥と嵐を模した藁人形が川を流れてくる。そして、ラストシーンで、息子の主人公が老いた母親を殺害することで迷っている。

或いは、主人公の「私」が、老いた母親を殺せば、自分は生まれて来なかったことになる。つまり、タイムマシンに乗って時間を遡り、祖母を殺せば、母も自分も生まれて来なかったことになる。『桜の園』は死によって再生を願うが、『田園に死す』では、死によって再生を願いながら、しかも、同時に、祖母の殺害によって、結局現在の自分を消去してしまおうというテーマが付き纏っている。これは、寺山の論理が、一見矛盾しているようにみえる。だが、寺山は、命の再生はあっても、個の再生はないと言っているかのようである。

さて、流山児氏は『桜の園』では、殊にフィルスの死と再生に焦点をあてて演出していた。だが、この死と復活のテーマは、更に、寺山の『田園に死す』に描かれた「子宮回帰」に発展していくように思わせる。

果たして、流山児氏が『桜の園』を上演する時、彼の念頭に、映画『田園に死す』の「子宮回帰」が思い浮かんだかどうかかわからない。もしも流山児氏の頭に、子宮回帰がもし浮かんだとすれば、恐らく偶然の一致だろう。

そこで、続いて、チェーホフの『桜の園』が、寺山の『田園に死す』と劇構成のコンセプトが繋がっている地点を辿り、寺山が、かつて新劇風の演出の『桜の園』を痛烈に批判したが、実際には、寺山がチェーホフを自作にどのように解釈しコラージュしていたのかを考究する。

03. チェーホフの『桜の園』

流山児祥事務所がプロジェクトしたチェーホフの『桜の園』は実に質の高い出来栄であった。少なくとも、これまでであった日本でのチェーホフ上演とはかなり異なっていた。流山児氏はその違いについて次のように語っている。

本フェスティバルは、4月から12月にかけて舞台芸術の第一線で活躍するカンパニー・アーティストとともに、チェーホフ関連作品9演目を上演する企画です。チェーホフ戯曲をテキスト通りに上演する作品にとどまらず、チェーホフ戯曲に着想を得たストレートプレイ、ダンス、古典芸能まで含め多彩なアプローチの舞台をラインナップし、チェーホフの世界を通して、パフォーミングアーツの魅力と醍醐味をご紹介します⁵⁾。

さて、『桜の園』を、日本の近代劇史を通じて見ていると、ピンターがチェーホフの『桜の園』の戯曲の中に頻繁に出没する「間」に独特の解釈を与えていた事や、自分の戯曲にも「間」を応用していたことを見落としてしまう。

しかも、ピンターは、チェーホフだけでなく、イブセンの『最後に目覚める時』で、教授の強権的な孤独を、自作の『故郷』で再登場させた。ドラマ『故郷』では、他のキャラクターが性愛を謳歌しているので、このおとなしい教授は殆ど研究室に閉じこもり物静かで目立たない存在である。だが、実は教授は劇中ほんの短い瞬間に、イブセンの教授と同じ位権柄づくである事を表に表し、冷静ではあるが、心の起伏を爆発的な気持ちを抑えて話す。しかも、殆どの場面で、実に穏やかに語るのも、教授がどれだけ強権的であるのか分らない。しかも、他のキャラクターは教授の言う事が全く分からずしかも理解しようとしなから、観客も、教授

がきまぐれに口をきいたものとしか思わない。つまり、この違いは、ピンターの時代には、イブセンの時代と較べ学問的な階級制度が希薄になったことを示している。

従って、ピンターがチェーホフやイブセンのドラマを一種の脱構築してしまった後では、チェーホフの『桜の園』にあった階級制度もかつてあったかもしれない過去の遺物のように見える。だが、20世紀後半以降では、世界中の階級制度はすっかり忘却の彼方に消えてしまったと言ってもいいかもしれない。言い換えれば、近代劇に描かれた階級制度がピンターのドラマでは消え失せてしまったので、逆に見れば、近代劇を見慣れた観客は、ピンターの芝居が無秩序で不条理な劇のように見えた。だが、近代劇に描かれた階級意識が一種の虚偽意識のように消えてしまった結果、そこに残るのは、何時までも、階級意識に囚われている集団たちである。その典型是老執事のフィルスでいつも「死にぞこないめ」と自分を罵る。しかし、彼のような老執事はもはや存在しないのだから、幽霊のような存在に変わってしまう。

ところで、ピンターが書いた芝居『昔の日々』の中で、過去の亡霊の声をドラマ化している。そこで、今はこの世にいない、いわば失われた言葉で話す人物の態度を見てみると、わけのわからないドラマを見ているように思われる。しかし、ピンターが執筆したドラマ『昔の日々』の原型ともいうべき、チェーホフの芝居『桜の園』を見てみると、実は、チェーホフは、階級制度を書いていたのではなく、階級制度の抜け殻を書いていた事が分かる。それは、ピンターの芝居と見比べているうちに透けて見えてくるのである。つまり、チェーホフもピンターも時代に翻弄されている人間を滑稽に描いている。そのような観点から、今一度、流山児演出の『桜の園』を見てみると、チェーホフはドラマを階級制度ではなく、なんとも滑稽で愚劣な人間どもの日常生活を祝祭にして劇を作り上げていた事が見えてくる。

こうして、ラネフスカヤ夫人からブルジョワの傲慢さが消え、キャラクターは皆平均化されてしまうと、ラネフスカヤ夫人の傲慢な行為も子供じみてきてしまう。

階級支配の観点から見ると、ブルジョワのラネフスカヤ夫人が浮浪者に何故金貨を与えるのか容易には分らない。しかし、流山児氏は『桜の園』で、ラネフスカヤ夫人が浮浪者と同等の人間、もしくは、彼女が浮浪者以下の自堕落な浪費家だという事に気が付いたとき、チェーホフはラネフスカヤ夫人が誰にでも、つまり、浮浪者にさえも金を与えて、遂には身を滅ぼす事を象徴したのだという事が分かってくるのである。

Mrs. Ranevsky: (*flustered*). Here, have this. (*Looks in her purse.*) I've no silver. Never mind, here's some gold.(p. 268.)

ラネフスカヤ夫人（あつけにとられて）持ってらっしゃい……さあ……。 （財布の中を探る）銀貨がないわ……。いいわ。ほら金貨。

先に触れたように、ラネフスカヤ夫人が川で坊やを亡くすところや、彼女もやがて土地を失うところや、また老執事のフィルスが死に直面するが再生を暗示するところがあるが、これらの場面は、寺山の『田園に死す』で、草衣が子供を川に流して間引きするところや、化鳥の母が土地を亡くし、彼女も不倫の恋で自殺し、「かあさん、私をもう一度妊娠してください」という場面と類似している事が分かってくる。従って、こうして見てみると、この場面で、寺山が、チェーホフの『桜の園』の人物像を『田園に死す』の人物像にコラージュしているところではないだろうかと考えてしまう。

さて、英国近代演劇のバーナード・ショーは、ブルジョワとホームレスの階級闘争を『マイ・フェア・レディ』に書いた。劇中、ホームレスのイライザに恋をするフレディを見てみると、ワーリャとロパーピンの関係のように見えてくる。やがて、イライザは自立するが、フレディは相変わらずラネフスカヤ夫人のように恋にうつつを抜かし滅びていく。或いは、ショーのもう一つの傑作『傷心の家』は、『桜の園』の悲喜劇をロシアからイギリスに移した英国版悲喜劇である。ショーによると、大英帝国はロシア帝国のように滅びようとしていたが、原因は、ブルジョワ（＝中流階級）の浪費癖からだという。また英国を動かしている支配者はロパーピンのようなマンガン親方である。ワーリャがロパーピンと結婚にためらうように、貧乏なエリーは、一旦はマンガン親方と結婚を試みる。けれども、最後には、エリーは、ワーリャのように、金で汚された人生ではなく自分自身の人生を生きる事を決意する。『傷心の家』では、マンガンはロンドン空襲でツーッペリンの爆弾投下によって爆死する。ロパーピンもまたロシア革命によって滅亡する。だが、二十一世紀のロシアでは、ロパーピンのような成り上がり者のブルジョワが亡霊のように跋扈している。ショーはチェーホフの後になって『桜の園』をコラージュした『傷心の家』を書いた。だが、今から振り返ってショーよりもチェーホフの方が作品の中で慎重に政治問題を描く事を避けていた。この点で、寺山が、政治の問題に無関心で専ら子宮回帰を考えていたのと、チェーホフが『桜の園』の結末で、フィルスが、子宮回帰を思わせるように再生を願うところは、政治よりもむしろ人間の生命を中心にして描いている点で類似性がある。

04. ピンターの『昔の日々』

ピンターの『帰郷』で、教授の妻が、教授の父や兄弟たちを誘惑し、或いは誘惑されて、遂には、妻は夫を捨てて、夫の親兄弟のもとに留まる。ラネフスカヤ夫人も愛人のいるパリへロシアの桜の園から出発する。このラネフスカヤ夫人がとる訳の分からない行動は、ピンターが『帰郷』で描いた教授夫人の狂った恋情と同様に馬鹿馬鹿しい。一方、流山児演出の『桜の園』

では、ラネフスカヤ夫人は愁嘆場を繰り広げることもなく、愛人の待つパリへ戻っていく。これは、ちょうど『帰郷』の教授夫人が彼女の地位を物ともせずかなぐり捨てた馬鹿馬鹿しい行動と紙一重である。

また、ピンターの芝居には、台詞と台詞の間に頻繁に「間」の指示が書いてある。いっぽう、チェーホフの『桜の園』の場合には、ピンターの芝居ほど「間」の指示が多くない。ともかく、チェーホフもピンターも台詞と台詞との「間」がある場合、その「間」のせいで、台詞のやりとりが、普通の日常生活の会話ではない事が容易に見てとれる。つまり、医者と下女との会話であったり、下女と地主の会話であったりするが、彼らは言葉を交わし合っているだけで意思の疎通は殆ど無い。その典型は、ラネフスカヤ夫人と浮浪者の会話である。二人の会話は別世界の人間が言葉を交わし合っているようで会話がかみ合わない。そこで、台本には書いてないが、奇妙な「間」が生じる。

いっぽうピンターが書いた『昔の日々』の第2幕では、寝室で、ディーリーとアナがコーヒーを飲んでいいる。ディーリーは昔アナと旅人亭出会った事があると語る。するとアナはそんな筈はないと答える。

Ana: Never.

Deeley: It's the truth. I remember clearly.

Pause

Ana: You?

Deeley: I've bought you drinks.

Pause

Twenty years ago ... or so⁶⁾

アナ：いいえ。

ディーリー：本当だとも。はっきりと覚えているんだ。

(間)

アナ：あなたが？

ディーリー：飲み物を買ってやったではないか。

(間)

20年前か……それくらいの頃。

前述のディーリーとアナとの会話の間には、「間」が絶えず入るので、会話が絶えず中断し、時間の流れや記憶間違いが生じる。さてチェーホフはドラマ『桜の園』の他に『かもめ』にも

「間」を書いたが、ピンターのドラマの「間」とは幾分違うようだ⁷⁾。というのは、チェーホフには、劇作家であると同時に、医者や科学者としての視点があり、科学的な分析によって、人と人との間には職業や身分などの違いを区分し、それによって会話のくい違いが起こり心理的な「間」が生じてくるからである。しかし、ピンターの「間」は、「間」が生じた間に途方も無い時間が経過したり、或いは「間」のせいで記憶違いや話の中断が生じたりする。その結果ピンターには独特の「間」が生まれ、遂にはその「間」によって、不可思議で、しかも不条理で、それに馬鹿馬鹿しくて、全く曖昧な世界が眼前に現れるようになる。

寺山の『田園に死す』では、青森定住の少年と流民のサーカス芸人との出会いが、異文化と未知の遭遇のようにちぐはぐである。ところが、サーカスという異文化が示された後、次第に状況が変わり、全ての状況が馬鹿馬鹿しくなってしまう。その例として、それまで淑女然としていた化鳥が、土地を失って娼婦になり下がった過去があった事が分かる。いわば、化鳥は、サーカス芸人のように遊民であった。ラネフスカヤ夫人も淑女然としているから分かりにくいだが、結局落ちぶれて、化鳥の母親のように身を滅ぼして死んでしまうのは必定となる。いっぽう、ピンターの『昔の日々』では、ケートとアナは別人である筈だが、同一人物でもありうる。二人が同一人物であるとするなら、ケートは淑女でありアナは娼婦であるから、全く正反対の人格が一人の人間の中に同居している事になる。こうした多重人格性障害は、他にもしばしばみられる。たとえば、チャイコフスキーのバレエ『白鳥の湖』では、一人のプリマドンナが白鳥と黒鳥を踊る。この例を『昔の日々』に当てはめて考えてみると、先ず、ケートは清純を象徴し、アナは欲望を象徴している。やがて、アナは欲望に溺れ身を滅ぼすが、いったん死ぬと、大地に帰って再生して、ケートのように清純になって蘇る。

いっぽう、『桜の園』で再生するのはラネフスカヤ夫人であるというよりも、むしろ死に近い老執事のフィルスの方である。また、死に近いキャラクターとして考えるなら、フィルスとアナは、死んでいるも同然であるが、やがて再生する。フィルスとアナは性格が全く似ていないが、二人とも、結末でどんでん返しがあり、死ぬ事によって、再生を予告する。

さて、これまで見てきたように、チェーホフとピンターのドラマを結び付けるのは「間」であった。たとえば、『桜の園』には、間が頻発するが、間の抜けた腰砕けの「間」である。しかも、この「間」は人物同士の間で産まれる。いっぽう、ピンターの『昔の日々』の場合、「間」が芝居に予め指示してあり、しかも絶え間なく頻発する夥しい数の「間」である。この「間」の為にピンターの『昔の日々』は、なかなか先に進まない。「間」の為にドラマが先に進まない事を見ていくと、『田園に死す』では、映画が途中で一度中断すると、不可解な「間」が生じ、暗礁に乗り上げた船のように映画自体が忽ち座礁して、異次元の世界へと紛れ込んでしまう。

05. テネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』

ウィリアムズは、チェーホフの『桜の園』の主題となっている裕福な家族の没落をコラージュして、『欲望という名の電車』でアメリカ南部の富豪な家族の没落に変えて書いた。その意味でいえば、『田園に死す』でも家族の没落が描かれているので、ウィリアムズの『欲望という名の電車』に描かれた家族の没落とパラレルになっている事に思いあたる。少なくとも、三つのドラマには、共通して家族の崩壊が描かれている事に気が付くのである。

さて、ウィリアムズが書いた『欲望という名の電車』を、劇のテーマではなくて、台詞のコラージュ作品として見ていくと、寺山が書いたドラマ『青ひげ公の城』の中に同じセリフをコラージュしている結末のところに注意が向いてしまう。だから、『欲望という名の電車』が、『青ひげ公の城』よりも、『田園に死す』と主題が似ている事を見落としてしまう。更に、『欲望という名の電車』には、ブランチがレスビアンなので生に不毛であり、それ故、子宮回帰が希薄になっている。それに対して、『桜の園』では、ラネフスカヤ夫人と赤子の関係が提示されているので、子宮回帰が主題である事が分かる。しかしながら、『桜の園』を家族の崩壊や国の崩壊で見ていくと、『欲望という名の電車』のテーマとよく似ていることが分かる。しかも、寺山の『田園に死す』には、『欲望という名の電車』にはない、再生のテーマが暗示されている。

さて、ブランチが語る話は皆嘘である。何故ブランチが嘘をつくかというと、ブランチは精神病院を抜け出してきた精神病患者であるからだ。彼女は昔裕福な生まれの女性であったが、南部の崩壊と共に、家族は破産して、土地は人手にわたってしまう。しかも、ブランチの婚約者はホモセクシャルである事が分かり、そのために、婚約者はブランチとの恋を裏切ったと自責の念を抱いて自殺してしまう。その結果、ブランチは婚約者の自殺事件がトラウマになって、やがて、ブランチは自身も滅ぼして娼婦となる。しかもブランチはラネフスカヤ夫人と較べるとラネフスカヤ夫人にはない性格が細かく描かれている。つまり、ブランチの方は、心が墮落しただけでなく、ブランチ自身がレズの同性愛者になる。これはラネフスカヤ夫人にはないけれども、ブランチ自身が直面する心の苦悩である。

前述したように、寺山は、ブランチが身を滅ぼす運命を、自作の『青ひげ公の城』にコラージュしている。更にまた、ウィリアムズもまたチェーホフの『桜の園』の家族の崩壊のテーマに惹かれ、コラージュして『欲望という名の電車』の中で南部の崩壊として描いた。また、既に述べたように、このコラージュ方法を、寺山は『青ひげ公の城』の中に取り入れている。しかも、『青ひげ公の城』の場合、家族の崩壊だけではなく、青ひげ公は姿を失ってしまうのであり、人間存在としての崩壊を表しているのである。

実はこのコラージュの方法は、由来がある。俳人の馬場駿吉氏は、2009年「演劇大学 in 愛知寺山修司」の講演で、「ゴーギャンの『われわれはどこから来たのか、われわれは何者なのか、われわれはどこへ行くのか』の中に描かれた人物群の構図は、様々な絵画や彫刻から『われわれはどこから来たのかわれわれは何者なのか、われわれはどこへ行くのか』にコラージュしたのであり、更に、後になってピカソが『アヴィニヨンの娘』で、ゴーギャン『われわれはどこから来たのかわれわれは何者なのか、われわれはどこへ行くのか』をコラージュしているのである」と述べ、このコラージュ方法が寺山の詩歌、映画、演劇にも見られると語った。

ところで、寺山は、唐十郎氏との対談で「ウィリアムズには文学があった」と語っているが、この発言は、寺山の文学に対する考え方をよく示している発言である。例えば、寺山は、唐十郎氏との対談で明言している。

寺山 ぼくは昔、テネシー・ウィリアムズの台詞にしびれたね。ジロドゥもそうだ。あの頃の演劇は「文学」だったんだよ⁸⁾。

特に、寺山は、『欲望という名の電車』の中に出てくる葬式の花売りの場面に関心を示した。というのは、寺山の劇は、『欲望という名の電車』のように、あの世からこの世を見ている芝居だといわれているからである。寺山が、劇や映画でしばしば使った葬式会場の場所を指し示す、「指マーク」は、『欲望という名の電車』に描かれた葬式の花売りとの類似性を喚起させる。寺山は『欲望という名の電車』の中にある台詞を以下のように自作の『青ひげ公の城』の中にコラージュしている。

女優 死神だけ——私の坐っているのが、ここだとすると、ちょうどあそこここに、あの人が坐っている——すると、ついそこそこ、今、この子が坐ってるくらいのところに死神が控えている⁹⁾。

この女優が『青ひげ公の城』の中で言う台詞を、『欲望という名の電車』の第九場では、以下のように、ブランチが同じような台詞を言って答える。

BLANCHE: Death—I used to sit here and she used to sit over there and death was as close as you are ... We didn't dare even admit we had heard of it!¹⁰⁾

ブランチ 死神だけ——私がここにすわってると、すると、お母さんがそこ、そしてすぐそばに、あなたのあたりに、死神がいた……それが聞こえたと思えるだけの勇気がな

かった。

寺山は、明らかにウィリアムズの死生観を踏襲して、そのコンセプトを自作の『青ひげ公の城』の中に、『欲望という名の電車』からコラージュしている。

もう一人の女優 御供養の花……、葬式の花……

女優 死と裏おもてになっているものは欲望…… (pp. 8-9)

いっぽう、ウィリアムズの『欲望という名の電車』の第九場では、ブランチは弔いの花と彼女の運命とを重ねていく。

MEXICAN WOMAN: *Flores para los muertos, flores—flores ...*

BLANCHE: The opposite is desire. (p. 206)

メキシコ女 フローレス。ご供養の花、フローレス、フローレス……

ブランチ 死の反対は欲望。

ウィリアムズが書いた『欲望という名の電車』では、ブランチにとって、供養の花は、死の思い出と結びついている。ところで、寺山は、『欲望という名の電車』から、自作に数多く引用しているので、剽窃ではないかという懸念が働いてしまう。ところが、肝心な事は、この場面で、主人公の少女が、他人の芝居稽古を見ているという視点が働いていることを逃してはならない。この場合、ブランチ役が、台詞を言っているが、実は、この台詞は、潜在的に、少女の心を打ち明けているのだ。鏡の関係でいえば、二人の間に鏡がある。そこで、二人が離れていても、一人の心を表わしていることになる。だが、鏡は、双子を映しているのに、心は二つに分裂している。言い換えれば、少女はブランチでもある。だが、それは嘘である。しかし、少女はブランチの真実を知っている。或いは、次のように言い換えてもよいだろう。ウィリアムズは、ブランチである。だが、それは嘘である。しかし、ウィリアムズは、ブランチの真実を知っている、と。結局、寺山には、ウィリアムズは、ブランチである事が分かっていたが、ウィリアムズの心を捻りして少女に読み替えて自作を劇化したのだ。

こうして、寺山は、『青ひげ公の城』の中で、劇中劇として、俳優たちが、芝居を稽古しているという場面を作った。ちょうど、シェイクスピアが、『ハムレット』の中で「ゴンザロー殺し」の場面を設けたようにである¹¹⁾。ハムレットは、劇中劇で役者たちに指図するので、近代演出術の原型に譬えるようだが、少女の場合、『青ひげ公の城』の幾人もの妻たちに、少女

の心が投影され、更に『欲望という名の電車』のブランチの心にも、重層的に反響していく。明らかに、寺山は、少女の心象風景を多重的に幾重にも重ねて、少女の心を錯乱状態に追い詰めていく。

寺山は『青ひげ公の城』で、青ひげ公の「噂」から『欲望という名の電車』のブランチの「噂」へと転換し、更に、「死」の主題に突き進んでいく。

寺山は詩人として『欲望という名の電車』の「葬式の花」を、巧みに、テネシー・ウィリアムズのドラマのコンセプトとして、掬い取って、自作の芝居の中に取り込んでしまう。

いっぽう、『青ひげ公の城』の中で、少女は、横槍の入った劇中劇『欲望という名の電車』に臆することなく、青ひげ公を求める。だが、舞台には、青ひげ公の衣装が残されているだけで、青ひげ公はいない。

ところで、ここで、テネシー・ウィリアムズ自身の家族の事を考える必要がある。というのは、ウィリアムズの姉のローズの思い出とブランチの思い出が重なっていることが分かるからである。ローズは、前頭葉の手術を受けて以来、会話が出来なくなったという。つまり、『欲望という名の電車』では、アランに対するブランチの罪意識は、実生活におけるローズに対するウィリアムズの罪意識と重なって現われたと考えられる¹²⁾『ガラスの動物園』では、ローズはローラと名前が変わっている。だが、ローズはローラと関係がある。寺山は、ローズからローラに変わるのではなくて、アントナン・アルトーのコンセプトで、ローズからローラが「ダブル」として産まれたと解釈した。実際、寺山は、ドラマの主人公をダブルにする。『レミング』では、王（ワン）から、通（ツウ）を生みだした。事実、寺山は、『ガラスの動物園』のローラを、寺山の実験映画『ローラ』の題名にも使っている。ところで、青ひげ公の第二の妻は、ブランチの片鱗がある。

第二の妻 あたしと比べると？

付人 豚と薔薇です。(pp. 46-7)

この場合、少女は、「豚」に、そして第二の妻は「薔薇」に例えられている。『欲望という名の電車』の第十場では、ブランチが、スタンレーに向かって「豚」と言う。

BLANCHE: ... But I have been foolish—casting my pearls before swine!

STANLEY: Swine, huh? (p. 212)

ブランチ ……でも私はばかでした——豚に真珠を投げ与えたりして！

スタンリー 何だって、豚だと？

つまり、少女の不安は、極めて、ブランチに近い。だが、寺山の『青ひげ公の城』では、第二の妻の方がブランチのキャラクターに近いのである。なぜなら、少女は人生の経験が浅いが、第二の妻の心には、人生がぎっしりと詰まっているからである。ブランチは、外見は、おぼこ娘を気取っているが、中身は、人生がいっぱい詰まっている。

さて、『青ひげ公の城』の「9 台本を人生でよごさないで」では、女優が出てきて、一人で、ジャンヌやガートルードやブランチの台詞を口走る。つまり、第一の妻や第二の妻たちは、ダブルの意味から生まれた。例えば寺山の『ガリガリ博士の犯罪』でも、同じキャラクターの人物四十一番目の男が、番号を変えて四十二番目の男として登場して、同じ台詞を言う。実際、生の舞台では、何が起こるか分からない。だから、常に、代役がいる。そこで、寺山は、舞台上の約束事を応用して、代役に記号をつけ、ステージに登場させたのである。或いは、場合によっては、キャラクターが、前に言った同じ台詞を繰り返す場合がある。ところで、寺山の『青ひげ公の城』では、女優が、青ひげ公やブランチの台詞を使って演じて見せるのである。

また、「10 七つの扉」で、第二の妻は、少女の兄との恋愛を話す。このエピソードは、『欲望という名の電車』の中の第六場の、ブランチの初恋の人との恋愛と相似形になっている。

BLANCHE: ... We danced the Varsouviana! Suddenly in the middle of the dance the boy I had married broke away from me and ran out of the casino. A few moments later—a shot! (p. 183)

ブランチ ……私たちはワルシャワ舞曲を踊ったの！ 突然、ダンスの途中で、私の夫であつたその少年は私を突き放してカジノをとび出していった。そして、まもなく——銃声が一発！

他方、ウィリアムズの『欲望という名の電車』では、ブランチは、彼女の結婚相手の自殺によって、彼女の心に傷がつき、その傷が深手となって、家も彼女も零落していく。そして、ブランチは、精神病患者がするように、当てもなく、妄想にかられて、電話をする。ところで、寺山は自作の『青ひげ公の城』では、この愁嘆の場면을喜劇的にコラージュしている。

女優 ああ、何か雑音がきこえる！ もうだめ！ すぐ迎えにきて、パパの大切なつぐみは……もう死に掛けているわ、どこか埋めるお庭をさがしておいてちょうだい！ もっと立派な劇場の、そうレカミエ座の舞台のスポットライトの中に……それから、この蜘蛛たちに札束叩きつけて追い払ってちょうだい！ あたしの傷つけられた自尊心を洗い流すために……雨で……そう、何もかも洗い流してくれる、観客一杯のあふれる

雨で……

いつのまに入ってきたか、七人目の妻（役の少女）、その電話器のコードのはしをひろいあげる。と、そのコードは途中で切れていて、どこにもつながっていないのだ。(pp. 88-9)

オリジナルの『欲望という名の電車』の第十場では、ブランチが、スタンレーや、そして、やがては、精神病院の医師や看護婦に追い詰められていく場面で、パセティックな盛り上がり搔きたてるシーンがある。ある意味では、チェーホフ風な、劇的なクライマックスを産み出す場面である。

BLANCHE: ... Operator, operator! Give me long-distance, please ... I want to get in touch with Mr. Shep Huntleigh of Dallas. He's so well-known he doesn't require any address. Just ask anybody who—Wait!! —No, I couldn't find it right now. ... Please understand, I—No! No, wait! One moment! Someone is—Nothing! Hold on, please! (p. 213)

ブランチ ……交換台、交換台！ 長距離電話をお願いします。……ダラスのシェップ・ハントレーさんをお願いします。とても有名な方ですから、名前だけで分かるはずです。誰にでも尋ねてみてください、誰か——待ってください！！——いや、今は分かりません、やっぱり。……お願いですから、よく聞いてください、私は——いや！ いや、持ってください！ ……待ってください！ 誰かが——なんでもありません！ 切らないでください！

或いはまた、寺山は『欲望という名の電車』の中で、ウィリアムズがブランチの狂気を劇化するとき、ブランチのパッションの中にチェーホフ的なタッチを感じたのか、パロディシカルに、悲劇的な場面を、喜劇的に仕立て直したのかもしれない。

また更に、芝居の展開を見ていくと、寺山の『青ひげ公の城』から、途中でブランチは消えてしまったかに見える。しかし、『14『月より遠い場所』』で、少女の口を通して、ブランチの行く末が語られる。

欲望という名の電車をさがして、とうとう青山墓地まで来てしまった保険外交員のブランチは、またあてのない電話をかけている。(p. 142)

オリジナルの『欲望という名の電車』では、ブランチは、精神病院に収容されるが、寺山

は、ブランチが社会復帰して、保険外交員をしているという消息を書いた。或いは、また、ブランチを精神病院に収容させた、スタンレーも、終幕で、彼の消息が語られる。

いま頃、酔っぱらったスタンレーは「東京スポーツ」を小脇にはさんで、山手線の中でいねむりしてることでしょう。(p. 142)

この場合、寺山が『青ひげ公の城』の中で、描いたブランチやスタンレーの台詞は、ウィリアムズが書いた『欲望という名の電車』の中の台詞と直接リンクしていない。だが、ふつう、役者たちは、劇が終わると、市街に出て、今度は、保険外交員や酔っ払いを演じているのだ。

寺山は、『青ひげ公の城』の中に、劇中劇として『欲望という名の電車』を割り込ませ、ブランチの台詞を口ずさむ役を作り出した。特に、寺山は、『青ひげ公の城』のラストシーンで、語りつづけている少女を、劇場の管理課員と舞台監督が抱えるように連れてゆく場面にしている。この場面は、『欲望という名の電車』の第十一場の場面で、ブランチが精神病院に連れていかれる場面を連想させる。

The MATRON releases her. BLANCHE extends her hands towards the DOCTOR. He draws her up gently and supports her with his arm and leads her through the portières. (p. 225)

看護婦は手を離す。ブランチは医師に両手を差し伸べる。医師は優しく引き起こして立たせ、腕をかけて支えてやり、仕切り幕の間を通過して連れだしていく。

こうして、『青ひげ公の城』の中で少女は、失った兄を偲びつつ、劇場を去っていく。或いは、少女は、ブランチのように精神病院に戻っていくのかもしれない。

以上、寺山が、『欲望という名の電車』を自作の『青ひげ公の城』にコラージュしたのであり、これは、短歌でいえば、本歌取りに似た手法を指しているように思われる。ちょうど『源氏物語』が『古今集』や『新古今和歌集』の本歌取りした歌物語であるとすれば、寺山の映画『田園に死す』も詩集『田園に死す』から本歌取りした作品である。それだけでなく、また、寺山は、『桜の園』や、更に『欲望という名の電車』からも、同じ台詞をコラージュしているのである。

06. 寺山修司の『田園に死す』

寺山は詩集『田園に死す』を先ず日本テレビでドラマ化している。寺山は、テレビドラマ

『田園に死す』を、死で終わる結末を考えていたせいか、チェーホフが『かもめ』の結末をピストル自殺で終わる状況と近くなった。『かもめ』も『田園に死す』も田舎の古い自分を捨てて新しい都会にあこがれるというのが、寺山にもチェーホフにもあるテーマである。しかしながら、二つの作品とも、田舎と都会をコントラストで表わしているように、土着とモダンとが分かちがたくせめぎ合っている。『かもめ』ではニーナが都会のあか抜けしたトリゴーリンを追ってモスクワに立ち去ろうとする。すると、田舎の住民であるトレープレフがかもめを撃ち殺す。後になって、ニーナがトリゴーリンに捨てられボロボロになって帰郷する。それでも、ニーナがトリゴーリンを愛しているのをトレープレフは知って、2年前にかもめを撃ち殺したように、今度はトレープレフ自身が銃で自殺する。都会と田舎、土着とモダンとがドラマの中でない交ぜになって絡まり合っている。いっぽう、寺山の場合、テレビドラマ『田園に死す』でミキが夫を殺して、勉と家出を図る。しかし、ミキは夫を銃殺する事によって自分自身をも殺した事を悟り勉と別れる。『かもめ』の中で、トレープレフがかもめを殺し自殺するのと、テレビドラマ『田園に死す』の中で、ミキが夫を殺し警察に自首するのとは細かく見ると細部は微妙に異なっているが、両作品には共通した都会に憧れた青年の「田園の死」というテーマがある。従って、寺山はテレビドラマ『田園に死す』をチェーホフの「かもめの死」を想定してドラマ化したのではないかと思えてくる。しかも、ミキはニーナのように生きているがまるで生きるしかばねになる。このミキは寺山のテレビドラマ『わが心のかもめ』のかもめの不死と繋がっていくようにも思われる。

更に、寺山は詩集『田園に死す』をATGで映画化するに当たって、筋をテレビドラマよりも複雑にした。或いは、寺山はチェーホフの『かもめ』から新しく脱皮したいと考えていたのかもしれない。ともかく映画『田園に死す』には、ダブルのイメージが頻繁に見られる。従って、アルトーのドゥーブルのアイデアは、寺山にとって、創作映画を制作する時、新しい映画への脱皮に繋がる鍵になると考えていたのかもしれない。

さて、鈴木達夫氏は『田園に死す』でカメラマンとして参加した。鈴木達夫氏は『田園に死す』が映画化されるプロセスを以下のように書いている。

寺山の残した映画たちの中で、初めて監督と撮影者として組んだのが「田園に死す」だった。

ロケハンで寺山と初めて青森・恐山を訪れたのが初夏の頃で、空は晴れわたって高く青く、森は緑が濃く、岩山は白く輝いてまぶしく、寺山の歌集「田園に死す」を読んで抱いていた恐山のイメージとあまりにかけ離れていたのがあつけにとられた。私は荒涼とした砂塵をふきすさぶ霊場を想像していたので、これは、偽物の恐山なのじゃないかという気が一瞬したりもし

た。でもここで、一瞬とは言え偽物と感じたのは、その後寺山と仕事をしていく上で、都合が良かったのだと思う。彼の中で“偽”は、大きな位置を占めているからだ。俳句や短歌から出発して演劇や映画や競馬予想などいろいろなことをやってきたが、本当の自分とはどういうものなのかと問われて、寺山は「短歌を作った自分も、映画監督の自分も、それぞれ他人同士で、それぞれに繋がりがなくて、不連続に他人として共存しているのだと」などと言ったり、自分や親のことを語るときは、事実につくり話をまじえて素知らぬふりをしていたり、現実には虚構をもちこんで共存させることを愉しんでいた風がある。(中略)

ところで18年前とはいえ、5、60人のスタッフ、キャストを抱え、制作費800万円で映画をつくるということは大変なことだった。(中略)

残念をついでにもう一つ、二つ。「現在」の青年が、過去の時代に戻ってくる場面で、できれば、田圃の中に大きな穴を掘り、その中から出て来るようにしたかったのだが、資金不足で諦め、やむを得ず現地にあった用水路を利用したことや、後半の、私と20年前の私である少年が向き合って将棋をさしている田圃の場面では、前景の二人の後景で、並行してさまざまな寺山好みのストーリーが演じられているのだが、観客に十分伝わったか懸念されるところなどがある。

それにしても、寺山のからくり箱の中は、どうなっていたのだろうか。持続性のないストーリーが押し合いへし合い共存していたのだろうか。永久に陽の目を見ることのない寺山の水子たちが哀れだ、というより勿体なくて仕方がない¹³⁾。

さて、寺山は、『田園に死す』で化鳥と嵐の心中を描く前に、先ず、化鳥と少年時代の私の道行きの伏線を作った。この伏線は、テレビドラマ『田園に死す』のプロットに最も近い。更に、ATG、『田園に死す』化鳥のドゥーブルのような草衣がパラレルに登場し、自分の赤子を川に流すことによって、化鳥と嵐の心中と赤子間引きと重ねた。寺山が、ダブルのイメージを考えたのは、先に触れたアルトーのドゥーブルのアイデアがあるが、他にブニュエルとダリの合作映画『アンダルシアの犬』で、同じ人間がもう一人の同じ人間を殺害するところから取ってきたものとも思われる。それからフィクションという劇的な要素が入り込んできている。ATG映画『田園に死す』の中で「私の少年時代は私の嘘だ」というのは、ピアンデッロが『作者を探す六人の登場人物』のフィクションと現実との錯綜からヒントを得たものかもしれない。

寺山の『田園に死す』がピアンデッロのフィクションよりも複雑なのは、アルトーのドゥーブルのアイデアが付け加えてあるからでもある。しかもこのドゥーブルには迷宮の意味がある。迷宮とは子宮のことであり、化鳥が心中する時に「母さん私をもう一度妊娠してください

い」というが、この場面で、寺山は、結局死と再生を表していることになる。しかも、死と再生のテーマは『桜の園』のフィルスにもある。

ところで、『桜の園』の家族の崩壊を見ていると、寺山の『田園に死す』の中で化鳥の家族が崩壊するのと似ている事に気が付く。だが、化鳥は元娼婦なので『桜の園』でラネフスカヤ夫人が落ちぶれるといっても娼婦まで落ちぶれるというのは考えにくい。或いはそれが原因のせいで、『田園に死す』と『桜の園』が似ている事に気が付かないのかもしれない。或いは、また、ウィリアムズが『欲望という名の電車』でアメリカ南部の崩壊を書くときに『桜の園』のロシアの崩壊が背景にあった。そして『欲望という名の電車』でブランチが娼婦になり精神病院で隔離されるのは、『桜の園』のラネフスカヤ夫人のなれの果てを予測しているようにも思われる。けれども『欲望という名の電車』と『桜の園』が似ているのは、国の崩壊や家族の崩壊を表しているからであろう。また、寺山にしても『桜の園』よりもむしろ『欲望という名の電車』に嗜好があったようであり、その結果『田園に死す』と『桜の園』が似ていることを見逃してしまうのではないと思われる。

また、寺山は、『田園に死す』の映画化で短歌と短歌の間をどの様に埋めるかを念頭に苦勞しながら台本を書いた。そもそも詩をもとに日常会話の散文やアドリブを加えてドラマ化したのはシェイクスピアであり河竹黙阿弥であった。ところが、メディアの時代になると、詩人で劇作家のハロルド・ピンターはラジオドラマを書き、更にそれを劇場台本に脚色することによって不思議なシチュエーションを作り出した。つまり、ラジオドラマでは放送中に台詞のないキャストは黙ったままスタジオにいても姿が見えないからおかしくない。だが、舞台では台詞のないキャストがそのまま黙って舞台に残っているのは不気味である。また、時には、そのキャストがステージで口も利かないでいつまでもいると、幽霊のような存在に思えてきてしまう。ピンターは『昔の日々』の終幕で死んで舞台にいない筈のアナがステージに残ってじっと動かず立像のように存在させた。恐らく、寺山は、このピンターのドラマ技法に興味を持っていたのだろう。つまり、『田園に死す』に出てくる不可思議な群衆達の霊やシャーマンのような暗黒舞踏も、或いは、寺山が、テレビドラマを映画に脚色していく過程で、ピンターがドラマに書いた不可思議なキャラクターに興味を抱き、自分の映画に取り入れたのかもしれない。それは、ちょうど、マクルーハンが『グーテンベルグの銀河系』で述べた『リア王』のように、活字に閉じ込められていたキャラクターたちがダーク・ファクターのように解放されて宇宙に拡散していくようにも思える。

例えば、寺山が書いたラジオドラマ『大人狩』の放送を聞くと子供たちの蜂起は音しか聞こえないのでただ想像力を掻き立てられクーデターを思い描く事が出来る。だが、寺山が『大人狩』を映画化した『トマトケチャップ皇帝』では、スクリーン上に、脳裏に浮かんだクーデ

ターを表現しなくてはならない。しかも、ラジオドラマと異なって脳裏に浮かんだ想像力は、映画ではリアルには描けないから、むしろファンタジーの魔術を借りないわけにはいかなくなる。というのは、映画では、ラジオドラマのように想像力が働かないから、リアリズムで描写すると嘘っぽく見えてしまうからかもしれない。そこで映画では、現実には見えないものを如何にして想像力を強く喚起させるようにみせるかが問題になる。萩原朔美氏が、かつて述べたように、映画監督は、自分の映画の中に、他の映画の良い場面を引用する。従って、寺山は他の映画作品の中から多くの事例を探し廻って自作に利用したように思われる。たとえば、『田園に死す』のラストシーンで恐山の麓にある生家の屋台壊しは、川島雄三監督の『幕末太陽伝』のラストシーンで主人公が江戸から昭和にタイムトラベルするシーンを引用して作られたといわれる¹⁴⁾。しかし、寺山は、江戸と昭和をタイムトラベルして近代と土俗が混淆するのに注目し、恐山と東京を主人公がタイムトラベルして土俗と現代とが混淆するのに用いた。

寺山のテレビドラマ『田園に死す』と比べ、映画『田園に死す』の方がより一層前衛と土俗の混合がラストシーンで濃厚に表わされた。更にまた、ピンターと寺山のドラマが類似しているが、異なっているのもこの前衛と土俗が混淆しているところである。ピンターの『昔の日々』(1970)は、1930年代の英国のアナと2000年以前のギリシア神話の女神デメテルとが絶妙に混淆している。それにまた、デメテルはフレイザーが『金枝篇』で描いたシャーマンの魔術と繋がっている。というのは、ピンターは『昔の日々』の中へ、呪術師シャーマンと霊の関係と同時に、スクリーンの映像と生人間との関係をドラマ化しているからである¹⁵⁾。

他方、寺山は『田園に死す』の冒頭のかくれんぼのシーンで、子供たちの姿が消え鬼になった子供だけが残されるシーンを撮った。すると、間もなく、卒塔婆の陰から戦没者の幽霊が現れる。現実の墓場では寺山の父八郎が埋葬されている。従って、この墓場シーンは霊の気配を感じる事が出来る。この気配は、ジョン・ケージの『4分33秒』に影響されて、更に、ナム・ジュン・パイクが作った実験映画『映像の為の禅』の中で、闇のサイレンスの中に気配を感じ取るのを想起させてくれる。先ず、寺山は映画の冒頭で真っ暗な闇をスクリーンに映す。そしてサイレンスの気配が生じると、子供の頃かくれんぼをして遊んだ墓場が現れ、次いで、子供たちが隠れると、忽ち時間は墓場の中へと逆送する。すると、時間も逆走して、戦没者の幽霊が登場する。このショットは時間の流れでみるとラストシーンの屋台崩しとは時間の流れが逆になっているが、現実にはない現象を、カメラの映像で時間を逆さにすることにより異次元の世界を描いて見せたのである。そして、これは、ピンターが『昔の日々』でスクリーンの出来事と現実の出来事を繋いでしまい、アナが「起こらなかったことも起こったことのひとつ」と言う場面を描いたシーンを想起させる。というのは、寺山は『田園に死す』の冒頭のかくれんぼのシーンで、起こるはずがない事を映像化して見せたからである。

さて、寺山はスクリーンに自作の前衛短歌をスーパーインポーズして東北訛りの音声で音読する。寺山の短歌は斬新な短歌であるが、先ず、音読すると、七五調であり、東北方言特有の訛りが生じる。日本テレビで放送されたテレビドラマ『田園に死す』では、最後に、方言詩の子守唄がスーパーインポーズされる。

姉こあ凶作で
売られていって
お父は鉄道自殺した¹⁶⁾

だが、寺山は、ATG 映画『田園に死す』の中で自作の短歌を用いた理由は、自作の短歌が前衛詩だという自負があったからではないだろうか。

ほどかれて少女の髪をむすばれし葬儀の花の花ことばかな
亡き母の真赤な櫛を埋めにゆく恐山には風吹くばかり¹⁷⁾

つまり、寺山は、前衛と土俗を、短歌の文字と方言の音声とを衝突させて表そうとしたのではなかったらうか。

そして、寺山の映画の途中で中断がある。この中断によって、恐山の土俗的な風土と東京の都会生活とがパラレルになるのであり、主人公が暮らすモダンな都会と失われた土俗的な故郷の恐山とがコラージュされる場面である。一例として、アンディ・ウォーホルの実験映画『チェルシーガールズ』では二つの次元の違うシーンを一つのスクリーンに表すのである。だが、寺山の映画が『チェルシーガールズ』と違うのはスクリーンを真ん中で二分するのではなくて、一つの画面に土俗とモダンとが互いに浸透していくところである。

さて、映画の中で、「ボルフェスが昨日のコインと明日のコインは違う」といっているのを引用して、主人公は昔の自分は現在の自分と違うと何度も主張する。だが、逆に、もしも主人公が今と20年前とは違うと言わなければ、時間は一直線になって繋がってしまい、前衛と土俗が、いわば空間を浮遊するように微妙に混淆しているのが見えてこない。ところで、作曲家の柳慧氏の言葉を借りれば、音楽を時間と空間とを区別しなければ、時間の概念では、20年後の私は、いつまでたっても20年前の土俗的な人間のままだいることになってしまう。しかし、もし仮に、空間という立体的な三次元世界を想定すれば、20年後の私はモダンのままであり、20年前の私は土俗的なままである事という事になる。だが、モダンと土俗を無理やり分けて時間を直線に繋いでしまうと、映画は嘘になってしまう。つまり、20年前の私と20

年後の私が微妙に空間の中で浮遊し混淆しているからこそ、モダンで土俗的な私の姿が浮かんでくるのである。寺山は、エッセイの中で「歴史は好きではないが地理が好きだ」と言っている。これは、一柳氏の時間音楽と空間音楽の違いのコンセプトと幾分に似ているように思われる。或いは、一柳氏は日本では画一的なホリゾン幕を背にしたホールで演奏するのではなく、かつての西洋ホールと異なった昔の建物や神社や寺院で演奏すると、画一的な音楽を断ち切って、斬新な音の空間世界を生み出す事が出来ると主張する¹⁸⁾。そうだとすれば、近代よりも土俗的な空間の方が斬新な音の空間を含んでいる事になる。従って、寺山が、映画『田園に死す』で「私の少年時代は私の嘘である」というのは、時間を直線で捉えるのではなく、時間を空間的に拡充して色んな方角から異次元世界を捉えようとしているから、スクリーンの中で、少年がダブリ、迷宮の世界を表しているかた嘘のように見えてしまうのである。

07. まとめ

作曲家のジョン・ケージの音楽は過去の音楽の否定から生まれた。ワグナーの時代から音楽の調性が壊れ始め、シェーンベルクを経てシュトックハウゼンで音楽の調性が無くなると、ケージがサイレンスの音楽『4分33秒』を生み出した。こうして音楽は、調性の無い、無調の数々の作品が生まれ、サイレンスの中で気配を感じたりすると、風の音や自動車のエンジン音やエレクトロニクスも音楽となり、現在、音楽はサブカルチャーとなった。戦後の演劇にしても、戦前の歌舞伎の七五調を否定して口語で書かれた日常会話になった。寺山にしても歌人として悉く現存する短歌俳句のリズムを否定して、前衛的な短歌俳句を作った。映画『田園に死す』では訛りのある土着的な東北方言で自作の短歌を詠んだ。それだけでなく、寺山は既成の劇場映画や新劇的な演劇を否定し続けた。寺山の創作態度は、ちょうど、ケージがシェーンベルクを研究しながら、シェーンベルクのもとで「調性」を否定して「チャンスオペレーション」や「プリペアドピアノ」を創りだしたり、またケージに師事したナム・ジュン・パイクもが、既成の音楽・芸術を破壊しつつけたりしたのと似ている。そのように、寺山もまた近代演劇の新劇を悉く否定して前衛的なドラマや映画を創った。

また、寺山はチェーホフの芝居を否定する前に、チェーホフを具に研究していた。だから、寺山が新劇調のチェーホフに対して違和感があることに気がつくつと遂に否定したのである。従って、寺山はチェーホフが嫌いなのかと思っていると、必ずしも嫌いではないことが分かってくる。というのは、チェーホフが『桜の園』に描いた家族の崩壊のテーマは、寺山も『田園に死す』の中で家族の崩壊を描いている事に気が付くからであり、その類似性に触れると幾分驚いてしまうのである。つまり、寺山はチェーホフを否定する前にかなりチェーホフのドラマ

を研究していたことが分かってくるのである。それがたとえウィリアムズの『欲望という名の電車』を通してであっても、恐らく、寺山は、チェーホフの『桜の園』を詳細に研究していたことが両作品を重ねることによって見えてくるのである。

更にまた、ピンターは不条理劇『昔の日々』を書きながら、チェーホフの『桜の園』の「間」の使い方と自分の劇の『昔の日々』の「間」の使い方に応用していることが分かってくる。そのような具合に、寺山は新劇風の『桜の園』を脱構築しながら、実験的な不条理演劇の手法を応用し、『桜の園』を執拗に追及して、その成果を『田園に死す』の中に引用して映画製作をしているのである。つまり、寺山の『田園に死す』は、『桜の園』にある紳士気取りを削ぎ落とし、チェーホフの骨格だけを浮き彫りにしたのである。すると、『桜の園』の背後に隠れていた無機質な詩情や呪術やヴォードヴィルが現れた。

この無機質な詩情や呪術やヴォードヴィルは、ケージがエリック・サテイの一分前後のピアノ曲『ヴェクサシオン』を840回中断せず13時間38分繰り返すよう指示した演奏する光景を思い起させる。寺山の実験映画『審判』や『じゃんけん戦争』は、殆どサテイのピアノ曲『ヴェクサシオン』を思わせる単調な同じ場面の繰り返しを想起させる。かつて、萩原朔美氏は、寺山の実験映画が、ウォーホルの『エンパイア』のように単純な繰り返しではなく、観客が退屈しないように衝撃的な場面を散りばめていると指摘したことがある。けれども、ウォーホルにしても実験映画『エンパイア』だけでなく、『ドラキュラ』等の娯楽本位のB級作品も作っている。その意味でみると、寺山は『田園に死す』の実験的で不条理的な映画作品の中に、ウォーホルのB級映画作品のように娯乐的で衝撃的な場面を映画に嵌めこんで作り変えているかもしれない。ともかく、寺山の演出した映画『田園に死す』のコンセプトは、ケージやサテイやウォーホルのような実験音楽や実験映画に近い。従って、寺山が既成映画に対して行った脱構築は、『田園に死す』を実験映画に近い作品に仕上げた。けれども、問題は残っている。つまり、寺山の実験映画の場合、『田園に死す』よりも、自作の実験映画：『檻囚』『トマトケチャップ皇帝（短縮版）』『ジャンケン戦争』『蝶服記』『迷宮譚』『疱瘡譚』『消しゴム』『マルドロールの歌』『一寸法師を記述する試み』『二頭女一影の映画』『書見機』『トマトケチャップ皇帝 オリジナル完全版』のほうが優れているといわれている。だが果たして寺山の『田園に死す』は他の実験映画に劣るといえるかどうかは判断できない。だから、逆説的にいえば、寺山の『田園に死す』も衝撃的な場面を省いていったら、「母さん私をもう一度妊娠してください」という呪術的でヴォードヴィルな言葉だけが残るのかもしれない。つまり、寺山の子宮回帰は、『田園に死す』に濃厚に表れている。こうして見てくると、寺山の『田園に死す』は、実験映画の原点を露わにしてくれる。たとえば、映像作家の安藤紘平氏が寺山の母殺しのテーマの影響を受けて撮った『オー・マイ・マザー』論¹⁹⁾で指摘しているように、『田園

に死す』にある寺山が『田園に死す』で描いた母殺しのテーマは、オイディプス・コンプレックスにあるけれども、映画では、古代ギリシアの人間ではなくて、現代の映画カメラ自体が母親殺しを表現する。そうだとすれば、ブニュエルの映画『アンダルシアの犬』で若い女性の眼が切り裂かれた場面のように、現実では見てはいけないありとあらゆるタブーの世界を映画は映し出すことになる。しかも、カメラは無性なので、両性的でもあり、母親殺しは、そのまま『毛皮のマリー』のホモセクシャルなマリーが欣也の母親を間接的に殺害したように母親殺しを写し撮ることにもなる。そして、そのタブーを犯した罪によって、その禁を破ったカメラが罪の報いを受けるかのように、真の闇の世界へと退行する。だが、寺山は、真の闇という報いを受ける覚悟で、『田園に死す』でタブーの世界を描いた。それが、寺山が映画で描いた子宮回帰であり、母親殺しのテーマである。

いっぽう、流山児氏は、『桜の園』で、ラネフスカヤ夫人が亡き子を嘆く悲痛な回想よりも自堕落な恋人を追ってパリへ戻る滑稽さをドラマ化している。しかも、流山児氏は、更に老執事フィルスの不条理な死を、劇の最初から最後まで一貫してヴォードヴィル風に描いた。しかも、流山児氏は次の公演で、鹿目由紀作『愛と嘘っぱち』（2010年長久手文化の家公演）を演出して、幸徳秋水と菅野スガの不条理な死を描いた。ところが、流山児氏は菅野スガの無駄死に描くことよりも、むしろ事件を取材に来た婦人記者が陣痛で苦しむ場面を劇の最初から最後まで執拗に描いた。そして、結末で、赤子の出産シーンを使ってヴォードヴィル風にドラマ化して菅野スガの無駄な犬死を笑い飛ばした。

流山児氏が『桜の園』や『愛と嘘っぱち』でラネフスカヤ夫人や菅野スガの滅亡を通して、子宮回帰を描き、死と生の再生を描いたことは確かだ。もしかしたら、流山児氏が両作品で寺山の子宮回帰や母親殺しから影響を受けていることを表しているのかもしれない。少なくとも、流山児氏のおかげで『桜の園』を観劇しながら、その間に、ひょっとしたら『田園に死す』の子宮回帰や母親殺しを思い出すことになったのかもしれない²⁰⁾。

或いはまた、寺山の映画や演劇には、母親殺しや子宮回帰だけでは収まりきらないテーマが幾つも隠れている。そのことも、流山児演出の『田園に死す』は明らかにしてくれた。

寺山は、『田園に死す』で、既成映画のコンセプトを解体するにあたり、自分の技法で作品に鑿を激しく打ちつけた。寺山は『田園に死す』の中で既成映画のコンセプトを破壊したが、破壊し尽くせないものも幾つが残った。寺山の映画や演劇は概して呪術的であるが、むしろ、真骨頂は実験そのものにある。その寺山が実験映画技法で『田園に死す』を制作したのだが、結果的に単純な実験映画的手法で再構築してしまった。実際に出来上がった『田園に死す』から、少なくとも恐山の霊や子宮回帰を読み取ることはできる。それに又確かに、寺山の『田園に死す』は実験映画的であった筈であるが、寺山が実験映画的手法でメスを入れた瞬間、それ

まで、『田園に死す』の背後で隠れていた諸々のものが一斉に消え失せてしまったのも確かである。寺山は『田園に死す』を単純でペラペラで、メカニックで、ポップイズムのような乾いた作品に変貌を遂げさせてしまった。『田園に死す』は、なるほど寺山芸術の一部分を表した作品であるが、多面的で懐が深い奥行きのある情念が消え、がらんどうのような作品に変貌してしまった。しかしある意味では寺山は『田園に死す』の映像化によってケージやウォーホルのポップアートに近くなったかもしれない。結局、寺山は『田園に死す』で、既成映画のコンセプトケージやウォーホルのポップアートの片鱗を表しているにすぎない映画である事を証明してしまったかもしれない。

ここで、もう一度、総括的に両作品を見直すと、少なくとも、流山児氏は『桜の園』から、100年前のロシア社会の贅肉を削ぎ落してしまい、サーカスのアクロバットを楽しむ雰囲気の中で包んでしまった。その意味から見ていくと、寺山の『田園に死す』も、サーカスが東北の貧しい村へ巡業に来て、異次元社会を作り上げ東北の寒村全体を祝祭化した。

また、流山児氏は『桜の園』の上演によって、寺山の『田園に死す』との類似性を浮き彫りにしてくれた。そのことは流山児氏が2009年に『田園に死す』を上演したことからも明らかだ。更に流山児氏は、チェーホフの劇にある「間」とヴォードヴィル風で軽演劇的要素をドラマに加えて、ピンターの「間」とフェリーニが『8 1/2』で描いた祝祭的なサーカスを取りこんで『桜の園』を構築した²¹⁾。そのことは、流山児氏が『桜の園』の上演を通して、流山児氏自身が寺山の演劇を継承し発展させてきたことを実証して見せたことから明らかである。

注

- 1) 寺山修司、柳瀬尚紀『対談 翻訳家 この悪魔にも似た表現者』(翻訳の世界 日本翻訳家養成センター 1981.7 pp. 61-2)
- 2) 東山千栄子「桜の園二百回」『新劇女優』(学風書院、1957), pp. 108-114. 昭和2年2月から昭和26年1月にかけて、200回出演。
- 3) Chekhov, Anton, *Five Plays* Translated by Ronald Hingley (Oxford U.P., 1980), p. 262. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 4) 九條今日子『回想・寺山修司 百年たったら帰っておいで』(デーリー東北新聞社、2005), p. 42. 「ある時は、「泳げないから」と言ってしぶる寺山を、」
- 5) 「豊島区立舞台芸術交流センターあうるすぽっととチェーホフフェスティバル」 www.owlspot.jp/info/100421_detail.html
- 6) Pinter, Harold, *Complete Works: Four* (Grove Press, 1981), pp. 27-28. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- 7) Cf. Lahr, John, *Pinter and Chekhov: The Bond of Naturalism, Pinter A Collection of Critical Essays* (Prentice-Hall, Inc., 1972), p. 63.
- 8) 『寺山修司対談集 密室から市街へ』(フィルムアート社、1976), p. 67.

- 9) 寺山修司『魔術音楽劇バルトークの“青ひげ公の城”』（西部劇場上演台本、1979），p. 7.（以下、同台本の頁のみ記す）
- 10) Williams, Tennessee, *A Streetcar Named Desire* (Penguin Plays, 1986), p. 206. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 11) 『寺山修司演劇論集』（国文社、2000），p. 19.
- 12) Williams, Tennessee, *Memoirs* (A Star Book, 1975), pp. 48, 126, 255.
- 13) 鈴木達夫「田園に死す」（『寺山幻想映像の招待 寺山修司 青少年のための映画入門』ダゲレオ出版、1993），p. 87.
- 14) 川島雄三監督『幕末太陽伝』のラストシーン www.sadanari.com/k-sakuhin/baku-st.html
- 15) Cf. Elizabeth GENNARELLI, *Harold Pinter -/- janvier 1997* (revel.unice.fr/cycnos/personne.html?id=1203&type=auteur, 2009/08/14)
- 16) 寺山修司『田園に死す』（『ジオノ・飛ばなかった男 寺山修司ドラマシナリオ集』筑摩書房、1994），p. 120.
- 17) 寺山修司『田園に死す』（『寺山修司全シナリオⅠ』フィルムアート社），pp. 239-240.
- 18) 特別講義「音楽と空間」一柳 慧 www.geocities.co.jp/Technopolis/7045/keiolecture/ichiyanagi.html
- 19) 安藤紘平「映画と私と寺山修司“最近、なぜか、寺山修司…”」（『寺山修司研究』第4号、2010），pp. 52-57.
- 20) 流山児祥「テラヤマさんが教えてくれた。～私的70年代アングラ演劇ノート～」（『寺山修司研究』第4号、2010），pp. 14-33.
- 21) フェリーニの『8 1/2』の祝祭的なサーカス Cf. Fellini, Federico, 8 1/2 Edited by Charles Affron (Rutgers UP, 1978)

参考文献

- Chekhov, Anton, *Five Plays* (Oxford U.P., 1977)
- Tchekhov, Anton, *Plays and Stories* (Everyman's Library, 1967)
- Pritchett, V. S., *Chekhov A Biography* (Penguin Books, 1990)
- Chekhov The Critical Heritage* Edited by Victor Emeljanow (Routledge & Kegan Paul, 1981)
- Magarshack, David, *Chekhov The Dramatist* (A Drama Book, 1960)
- Chekhov on The British Stage* Edited by Patrick Miles (Cambridge U.P., 1993)
- Leverich, Lyle, *Tom The Unknown Tennessee Williams* (Hodder & Stoughton, 1995)
- Williams, Tennessee, *A Streetcar Named Desire* (Penguin Plays, 1986)
- Williams, Tennessee, *A Streetcar Named Desire* (Kinsei-do publisher, 1979)
- Williams, Tennessee, *Memoirs* (A Star Book, 1975)
- Tennessee Williams* edited by Harold Bloom (Modern Critical Views, Chelsea House, 1987)
- Lefstedt, Carl, *Inside Bluebeard's Castle: Music And Drama In Bela Bartok's Opera* (Oxford U.P., 2004)
- Bartok, Bela, *The Stage Works of Bela Bartok (Opera Guide)* Translated by J. L. Davies (Riverrun Press, 1991)
- Anouilh, Jean, *L'Alouette* (Philipp Reclam jun. Stuttgart, 2004)
- Jean Anouilh (Five Plays) Volume 1* (A Mermaid Dramabook, 1967)

アントン・チェーホフの『桜の園』と寺山修司の『田園に死す』に於ける創造的なアバンギャルド芸術の可能性

Shakespeare, William, *Macbeth* (The New Cambridge Shakespeare, Cambridge U.P., 2001)

寺山修司『田園に死す』（『寺山修司全シナリオ I』フィルムアート社）

寺山修司『田園に死す』（『ジオノ・飛ばなかった男 寺山修司ドラマシナリオ集』筑摩書房、1994）

『寺山修司対談集 密室から市街へ』（フィルムアート社、1976）

東山千栄子『新劇女優』（学風書院、1957）

九條今日子『回想・寺山修司 百年たったら帰っておいで』（デーリー東北新聞社、2005）

The Woodlanders の中にラディカルさを 読み込むことは可能か？

吉井浩司郎

序論

トマス・ハーディの六作の主要小説の中で第四作目にあたる *The Woodlanders* は、*Macmillan's Magazine* に1886年5月号から翌年の4月号まで連載され¹⁾、1887年3月15日に、三巻本としてマクミラン社から出版されたのだが²⁾、その *Macmillan's Magazine* と言えば、ハーディの幻の処女作 *The Poor Man and the Lady by the Poor Man* を出版拒否し、また、実質上の処女作 *Desperate Remedies* の出版も拒絶し、更には、ハーディの出世作となる *Under the Greenwood Tree* の出版を打診するハーディの手紙に対して冷淡な返事を寄越したためにハーディはその手紙を出版拒否の手紙だと誤解して、原稿を送り返すよう再度手紙を出した雑誌であり³⁾、これほどまでもハーディとは縁のなかった雑誌なのであった。また、T. R. Wright によれば、*Macmillan's Magazine* は知的には *the Graphic* などよりも上層階級向けの雑誌であって⁴⁾、新人の小説家にとって連載をしてもらうのがかなり敷居の高い雑誌なのであった。そのような雑誌の編集長 Mowbray Morris が突然にハーディに連載の依頼をしてきたのであるから、Carl J. Weber は、そのときのハーディを次のように、

After nearly eighteen years of failure in knocking at the door, Hardy must have been more than delighted when Mowbray Morris, editor of *Macmillan's Magazine*, suddenly asked Hardy for a serial novel.⁵⁾

と、*The Poor Man and the Lady by the Poor Man* の出版を拒絶されて以来苦節18年の歳月の後だ

けに、“Hardy must have been more than delighted”だったに違いない、と述べている。なお、ウィーバーによれば、この連載依頼を受けたときのハーディは、Max Gate の建築と *The Mayor of Casterbridge* の制作とで二重に忙しい時期ではあったが、

as soon as those responsibilities had been taken care of, Hardy turned with unusual satisfaction to the writing of *The Woodlanders*.⁶⁾

と、『森林地の人々』の制作に取りかかったという。

この作品の着想は、モリスの連載依頼の時のものではなく、実は、ハーディの自伝なる *The Life* によれば、

and the author of *Far from the Madding Crowd* having been discovered to be a house-decorator(!). Criticism like this influenced him to put aside a woodland story he had thought of (which later took shape in *The Woodlanders*), and make a plunge in a new and untried direction.⁷⁾

というように、『森林地の人々』の骨子は『狂乱の群れを離れて』の直後に構想されていたものの、田舎の建築家だから田舎を舞台とするパストラルしか書けないのだという批判を避けるために、随分長く棚上げされたままだったのである。作品の構想の点から言うと、『狂乱の群れを離れて』と『帰郷』との間に来るパストラルという特徴を持つが、しかし、パストラルという要素だけではない他の要素も入り込んでいるがそれについては後ほど触れるとして、さて、ハーディにとって憧れの雑誌からの連載依頼であったから、ハーディはこの作品に幻の処女作からハーディ小説に特有のラディカルな主張を盛り込むのを果たして控えたのだろうか。

Michael Millgate はトマス・ハーディの小説の流れには、ラディカルな主張を持つ幻の処女作から出発して、その主張が社会に受け入れられないのをハーディが悟るや、その主張を抑制する中期の作品が続ぎ、後期の『ジュード』に至って再びラディカルな主張が表面に露出してくるというサイクルが形成されている、と主張する。例えば、

Hardy's unhappy experience with his first book seems to have taught him not that the concept of the social instrumentality of fiction was invalid, but that it was commercially impracticable, at least for a new and unknown author. In his first published novels he was thus forced to a radical confrontation with the problem of determining what sort of a novelist he was to be, of shaping his

work to the circumstances of his time and the necessities of his own situation. The process seems to have involved not so much the surrender as the gradual repression, in terms of literary expression, of the kind of emotions, opinions, and attitudes which had gone into *The Poor Man and the Lady*—and which were only to return to the surface in the pages of *Jude the Obscure*.⁸⁾

ミルゲイトは、上掲のように、ハーディの中期の作品はラディカルな主張が抑制されているとするのだが、その中期の作品の一つである *The Woodlanders* の中に、ラディカルな主張を読み込むことは、果たして、可能なのだろうか。結論を先に述べるなら、ラディカルな主張を読み込むことはできない。ラディカルな要素は作品の一要素として作品全体の構造の中に埋め込まれていて、目立たないように配慮されて提示されている。つまり、テーマとしてではなく、作品の一要素として盛り込まれているに過ぎない。それでは、どのようなラディカルな要素がどのような形で作品の中に忍び込まされているのか、それを探るのが今回の目的である。

(1) 時代の流れがもたらしたもの

この作品は、“the rambler”（ぶらぶら歩きの人）が“for old association’s sake”（古い昔のことを思い出すために）「今は打ち捨てられた馬車道」（“the forsaken coach-road”）を散策すると、

the many gay charioteers now perished who have rolled along the way, the blistered soles that have trodden it, and the tears that have wetted it, return upon the mind of the loiterer.⁹⁾

という具合に、これから物語が展開される *The Woodlanders* の舞台が今はもうそこには人が住んでいない、打ち捨てられた世界であるかのような印象を読者に与える書き出しがされている。更には、「打ち捨てられた街道（“a deserted highway”）の地形は、谷やら高原地には見られない程の孤独の様を表す」とか「たった一步のことで人がいないだけの世界から見放されたものの悪夢（“an incubus of the forlorn”）の空間に身を置くことになる」という具合に、時代の流れの前に取り残されて、うらぶれた街道の様が強調されている。時代の流れに取り残されているのは、この街道のみならず、その街道を往来する定期便の馬車、更には、それを引く馬も“The old horse, whose hair was of the roughness and colour of heather, whose leg-joints, shoulders, and hoofs were distorted by harness and drudgery from colthood ... had trodden this road almost daily for twenty years.” (p. 36) と、老いぼれているのである。これからドラマが展開される Little Hintock（リトル・ヒントック）の世界がこのように時代の流れから取り残された世界であり、

It was one of those sequestered spots outside the gates of the world where may usually be found more meditation than action, and more listlessness than meditation; where reasoning proceeds on narrow premisses, and results in inferences wildly imaginative; yet where, from time to time, dramas of a grandeur and unity truly Sophoclean are enacted in the real, by virtue of the concentrated passions and closely-knit interdependence of the lives therein. (p. 38)

と都会の文明世界から見れば対蹠的とも言うべき辺境の地として提示されている。いわば、時代の流れに置いてきぼりにされた世界としてリトル・ヒントック村は提示されている。しかもそれが Marty (マーティ) と Giles (ジャイルズ) らの生きる田舎社会なのである。

他方、時代の流れと言え、この作品の女主人公 Grace (グレイス) は、都会の寄宿学校で教育を身につけたあと帰郷するという設定になっているが、これも時代の流れを表している。というのは、女性たちが教育を身につけて、自分よりも身分の上の男性を射止めようとすることは時代の流れ¹⁰⁾であったのであり、グレイスはそのような女性の一人として設定されている。

つまり、時代の流れが都会の Fitzpiers (フィッツピアーズ) を Little Hintock 村に住まわせ、そこから、主要登場人物たちの人生行路が様々な影響を受ける様を描くのがこの作品の主題だと言っていいだろう。ハーディがマクミランとモリスにこの作品のタイトルとして提案した2つのタイトルをここで想起するなら、それらのタイトルは先述のハーディのこの作品における狙いを反映するものであることが分かるだろう。すなわち、“Fitzpiers at Hintock”と“The Woodlanders”をハーディが提案し、結局、マクミランが後者のタイトルを選んだのであった¹¹⁾。

この作品におけるラディカルさに注目するということは、グレイスという女主人公が置かれたヴィクトリア朝時代の女性の境遇と結婚制度及び離婚問題を取り上げることになるのだが、この作品の複数の視点¹²⁾の働きの結果、グレイスの結婚と離婚の問題は作品のテーマの前面に押し出されて扱われているという印象は醸し出されない。むしろ、時代の流れの中に位置づけられて描出されている、と言う方が適切だろう。この点については後ほど詳述するとして、それでは節を改めて、都会の教育を身につけて帰郷してきたグレイスにとって結婚の問題はどのようなものとして扱われているかを、見てみよう。

(2) グレイスの結婚問題

グレイスの父 Melbury (メルベリー) はその昔彼の友人で、ジャイルズの今は亡き父から恋

人を奪ったことで良心の呵責に苦しめられ、ジャイルズがグレイスを好いているのを見て、二人を結婚させることで昔の罪に対する償いをしようと思う。せっかく結婚をさせるのなら、グレイスをジャイルズにとって出来るだけ素晴らしい贈り物とするために、グレイスに上級の教育を身につけさせたのであった。ところが、この身につけられた教育が当初のメルベリーの意図を超えた影響をもたらす。つまり、当のメルベリーには、都会の教育を身につけたグレイスを田舎者のジャイルズに嫁がせるのが惜しい気持ちを引き起こさせるし、また他方、グレイスとジャイルズとの間に不協和音を引き起こす。例えば、寄宿学校から帰郷してくるグレイスと彼女を迎えに行ったジャイルズとの間には、あたかも接点が無一つ無いような関係が次々に描き出されている。ジャイルズにとってグレイスに話が出来るのは、Brownley の farm-buildings が元あった場所から丘の頂上に移設されたのは奇妙に見えるのでしょうか、取り入れたリンゴの山を見て、すりつぶせないほど沢山の収穫があったのだね、と言う程度で、それに対してグレイスは気のない相づちを打つばかり。また、グレイスがジャイルズに話が出来るのは、都会での話やら、この前の夏に大陸旅行に行った時のことなどで、ジャイルズは “With all my heart” (p. 74) と言って聞いたものの、彼には関心のない内容だった。語り手はこのような二人の遣り取りを描出することで、二人の間にもはや共通の基盤が失われてしまっていることに読者の注意を向けている。つまり読者は、グレイスへのジャイルズの求婚は失敗に終わることだろうという印象を抱かざるを得ない。

ジャイルズは田舎社会に住み続けている訳であって、その田舎社会の生活の延長線上にあるグレイス像しか思い描けないのである。ところが実際のグレイスは、都会の boarding-school の教育を身につけたことで、彼女のアイデンティティの拠り所が田舎社会でもなく、都会の世界でもない、いわばその中間領域に身を置かざるを得なくなっている。そのことが、二人の関係における齟齬を生み、また、グレイスが生家に戻ってきても自分がその家の中で “an alien” (p. 77) となってしまったかのような疎外感を感じる根本となっている。このグレイスの拠って立つところが田舎世界でなくなってしまったという点こそ、この後ジャイルズがグレイスへの求婚を推進する意図で a Christmas party を催したとしても (Chapters 9 and 10)、失敗に終わる原因になっている。

ジャイルズはマーティと共に植樹するときには、

He had a marvellous power of making trees grow. Although he would seem to shovel in the earth quite carelessly there was a sort of sympathy between himself and the fir, oak, or beech that he was operating on; so that the roots took hold of the soil in a few days. (pp. 93-4)

とも、また、

Winterborne's fingers were endowed with a gentle conjurer's touch in spreading the roots of each little tree, resulting in a sort of caress under which the delicate fibres all laid themselves out in their proper directions for growth. (p. 94)

とも評されるような、植樹の名人であり、また、“the Autumn's very brother” (p. 235) と象徴的に、土に生きる人々の理想像のように語り手によって讃えられている。ジャイルズは田舎世界の中で生きている限り、彼本来の姿を保つことができるが、グレイスとの関係では、彼本来の姿を見失って、失敗の連続となる。例えば、グレイスのことを考えるあまりに、知らず知らずのうちに、メルベリーを相手に競売で薪木類を買い占めてしまったり (Chapter 7)、マーティと植樹する約束を忘れていたり (Chapter 8) という具合に、彼本来の姿を見失っている様が描かれる。いや、それだけではない。グレイスと結婚した場合、グレイスの乗馬用に購入した馬をメルベリー家の人たちに見せに来たジャイルズは、一家の人々が既に朝食を終えて、次の仕事に取りかかろうとしている事情も察せずに、食事に招かれてそのまま居続けるとか、グレイスとの結婚を考えるあまりに、彼の周りのことがあまり見えなくなっているジャイルズの姿が強調して描き出されている。

ジャイルズは『狂乱の群れを離れて』のゲイブリエル・オウクの後継者でありながら、オウクに特有の現実的認識力がなかったという点で、ジャイルズの恋は実ることがなかった。そればかりか、現実的認識力の欠如は、身近の借地・借家の形態の問題で早めの対処を怠ったばかりに、サウス (South) の死と同時に、借地・借家権を喪失して、生活の基盤を失い、リング酒作りの季節労働者に落ちぶれて、グレイスの恋人の地位から転落するだけでなく、ストーリーの表舞台からも姿を消していく。

ジャイルズに代わって、グレイスの結婚相手として登場するのが、Fitzpiers (フィッツピアーズ) である。

フィッツピアーズは、本来、没落貴族の末裔で、Oakbury Fitzpiers という村にその名を賦与した貴族の家柄の子孫である。他の医者たちと医業が競合しない場所としてリトル・ヒントック村に医者の診療所を開業している¹³⁾。

彼は、いつかは都会で開業しようと思っており、今は仮住まいとしてリトル・ヒントック村で開業しているに過ぎない。

そんな彼は、グレイスの本質ではない都会的な洗練さを Grace の本質だと誤解したまま、グレイスに引かれていく。また、グレイスの父の財産は、フィッツピアーズが将来都会で開業す

るときの助けになるだろうとの打算もあって、グレイスと結婚する。

ところで、グレイスが結婚相手としてジャイルズとフィッツピアーズとの間でどちらを選ぶべきかを迷う点で、レイモンド・ウィリアムズが見事な分析をしている箇所があるので、引用してみよう。

トマス・ハーディが生まれたのは、あのトルパドルからほんの数マイルのところ、労働組合を結成すべく結集した農場労働者が国外追放に処せられた（1834）数年後のことである。この事実だけをもってしても、ハーディが生み落とされたのが、しばしば彼が追いやられてしまう時間を越えた淀みのなかなどでなく、変化しつつあり、苦闘しつつある田舎の社会だったのだということがわかろうというものである。

〈中略〉

しかしハーディの小説は、一作一作と変化を問題にするようになっていく。小説の背景となっている時代は、ハーディ誕生直前の時代から現に筆をとっていた時代までのどこかであるが、最後の、そしてもっとも深刻な小説、『テス』と『日陰者ジュード』は意味深くももっとも同時代的である。

〈中略〉

ハーディがいまわれわれに語りかけてくるのは、古い田舎の世界からでも、遠隔の地からでもない。彼が語りかけてくるのは、なじみのものと変化しつつあるもののいまだに生きている経験の中心からなのである。

〈中略〉

構造自体が変化しつつあるなかで、流動性のもっとも直接的な影響は結婚の選択の難しさに現れる。そしてこの状況は、バスシーバがボールドウッドとオークの、グレイスがジャイルズとフィッツピアーズの、ジュードがアラベラとスーの、どちらを選ぶべきかに迷う例に見られるように、個人的であると同時に社会的なものとして繰り返し現れる。特殊な階級的要素と、階級的要素にたいする不安定な経済の影響は、煎じ詰めれば根本的には生きかたの選択であり、また誰かれの人間と一体になるという点でアイデンティティの選択である個人的な選択の、一部をなしている¹⁴⁾。

The Woodlanders における変化と言え、いな、時代の流れと言うべきだろうか、労働者階級出身のメルベリーの一人娘グレイスが教育を身につけて、帰郷してくることだろう。メルベリーは、現在、材木商であるから労働者階級ではない。しかし、彼の元来の出身は、ジャイルズの父と同じ労働者階級であり、自らの努力と才覚によって材木商にまで出世したのである。

そのこと自体、レイモンド・ウィリアムズが言うところのヴィクトリア朝時代の流動性を象徴している。都会的なものが田舎社会に流入するという流動性に満ちた時代であるからこそ、都会の教育を身につけたグレイスが、知識人で医者という専門職にあるフィッツピアーズと出会うということも起こりうるのである。

実は、都会の教育を身につけて田舎社会に帰郷する女主人公として、グレイスには先輩がいる。それは、*Under the Greenwood Tree* の Fancy Day である。二人の生き様、換言すれば、どのように結婚相手を選択したかを比較すれば、グレイスの特徴が浮き彫りになるだろう。

ヴィクトリア朝時代において女性が身につけた教育は、上の身分の男性を射止めるための武器であった。しかし、ファンシー・デイの場合、その教育を武器として使わずに、牧師のメイボールドと運送屋のディック・デューイとに求婚されて結局自らの意志で田舎者のディックを選んだのであった。それに対してグレイスは、これまでも触れているように、都会の教育を身につけたことによって都会の世界の価値観を身につけ、その結果、リトル・ヒントック村に戻ってきても、都会の世界にも田舎の世界にも所属し得ない、いわば、中間領域に身を置かざるをえないのである。その状況を語り手は、彼女が “in mid-air between two storeys of society” (p. 246) にあるとし、彼女が自らの行動基盤を失って自らの意志で結婚相手を選択できない様を描き出す。その結果、父親のメルベリーの言うままになって、愛情不在のままフィッツピアーズと結婚してしまうのである。父親の言うままに結婚するという点で、グレイスは結婚の問題でヴィクトリア朝時代の女性の置かれていた境遇を象徴している。しかもまた、彼女の身につけた教育が、フィッツピアーズをしてグレイスに引きつける根本的な要因にもなっているのである。つまり、結果的には、グレイスの意志ではないにしても、彼女の身につけた教育が上の身分のフィッツピアーズとの結婚へとグレイスを導いたということになるのである。

それでは、節を改めて、彼等の結婚の特質について見てみよう。

(3) 身分差の結婚

グレイスとフィッツピアーズとの身分差の結婚¹⁵⁾は、身分差故の齟齬と亀裂を生み、フィッツピアーズをしてチャーモンド夫人との浮気へと駆り立てていき、結婚生活の破綻へと至る。

そもそも二人の間には、結婚前に既に身分差がもたらす齟齬が生じていたのである。例えば、結婚式をどこで執り行うかについて、フィッツピアーズは “at a registry office” (戸籍登記所) ですればよいと主張する。教会とは違って、田舎者たちにじろじろ見られなくて済むし、自分とグレイスとの結婚のことが人々の噂にのぼることがなくて済むし、それ故、将来バッドマスで医業を開業したときにグレイスの出身をとやかく言われなくて済む、とフィッツピアー

ズは考えて、戸籍登記所を主張するのである。フィッツピアーズにはグレイスの出自を上流の人々に知られたくないという気持ちがあるのである。ということは、一步間違えば、上流の人々の目から見たら、秘密の結婚のイメージが付きまとうのである。

一方グレイスは、自分の周りの人々から祝福されたいということで、田舎出身であるから、この土地に根ざした伝統的な教会で執り行われる結婚式を望むのである (Chapter 23)。しかし、この件に関してはメルベリーの同意を得ていると言うフィッツピアーズに、グレイスは押し切られる形となる。しかし、先ほども述べたように、グレイスはフィッツピアーズが自分たちの結婚を何か隠しておきたい秘密の結婚のように思っているのではという疑いを抱いて、

But she was indefinably depressed as they walked homeward. (p. 195)

と、漠然とした不安と憂鬱な気持ちとに支配されている。そしてグレイスは、結婚式を挙げる場所を巡ってフィッツピアーズが自分とは全く異なった考え方を持っていることから、自分にとってフィッツピアーズの生きる世界が異なっていることを思い知らされる。更にグレイスは、フィッツピアーズが Suke Damson (シューク・ダムソン) と浮気をしているのではないかと疑い、フィッツピアーズとの結婚に疑問を感じて、結婚を取りやめたいと父親に言うまでに至る。しかし、グレイスはメルベリーとフィッツピアーズとに巧妙に言いくるめられてしまって、教会で結婚式を挙げるという条件を彼女の方から出すことで、結婚に同意している。

グレイスには、以上のように、主体性の欠如、親の言いなりになるという受動性が作中随所に強調されている。こういった彼女の主体性の欠如と受動性は、ヴィクトリア朝時代の中産階級女性の境遇を象徴的に示している、と見るべきだろう。

結婚式の後、グレイスは父の家に夫と住むことになる。一方、フィッツピアーズは、大勢の村人たちが結婚の祝いに来たことに嫌悪感を感じ、妻のグレイスに村人たちとつきあうなと命じる。と同時に、フィッツピアーズはグレイスの周りの田舎人たちに嫌気がさしてくる。それで、バッドマスでの医者の開業権が800ポンドで獲得できることをメルベリーも承知済みだとグレイスに言って、暗に、この村を出ることを臭わせる。結局、身分違いの結婚は、どのように事が運んでも、グレイスをこの村での生活には留め置かないことを暗示する。しかし、ストーリーは、身分違いの結婚がもたらす夫婦間の不調和に加えて、フィッツピアーズとチャーモンド夫人との不倫関係をも描いていく。

チャーモンド夫人の計略によって、フィッツピアーズはヒントック・ハウスのチャーモンド夫人の怪我の治療をする巡り合わせになり、またそのチャーモンド夫人がフィッツピアーズにとって初恋の人であったことから、二人の間に恋の情熱が燃え上がる。フィッツピアーズは

チャーモンド夫人との恋愛のためにバッドマスでの医者の開業権すらも放棄してしまう。

親の言いなりになって結婚したものの、グレイスが彼女の結婚生活で見出したものとは、チャーモンド夫人との不倫に明け暮れる夫、また、その夫は結婚前にシューク・ダムソンとも肉体関係を持っていたということであった。このような境遇に置かれたグレイスがあまり怒りだとか嫉妬を感じない、と以下のように語り手は説明する。

Grace was amazed at the mildness of the anger which the suspicion engendered in her. She was but little excited, and her jealousy was languid even to death. (p. 233)

As her husband's character thus shaped itself under the touch of time, Grace was almost startled to find how little she suffered from that jealous excitement which is conventionally attributed to all wives in such circumstances. (p. 239)

グレイスは、何故、嫉妬とか怒りをあまり感じないのだろうか。結局彼女の結婚は愛情からのものではなく、親の言いなりになってしてしまった結婚であったからである。しかしそれでも、グレイスはとんでもない誤った結婚をしてしまったという後悔の念に駆られている。また、フィッツピアーズの不倫を知ったメルベリーも、娘をジャイルズと結婚させなかったことを後悔し始める。

ストーリーは、この後、フィッツピアーズと別れてくれというチャーモンド夫人に対するメルベリーの説得、フィッツピアーズと別れようと思って散歩に出たチャーモンド夫人とグレイスとの森の中での遭遇、落馬したフィッツピアーズが自分を助けてくれたのが義父のメルベリーとはつゆ知らず、自分の妻の身に何かが起こってくれば自分を真に理解してくれる“a passionate soul” (p. 282) と結婚できるのにと、言ってしまい、メルベリーから振り落とされるフィッツピアーズ、そして、フィッツピアーズとチャーモンド夫人との大陸への駆け落ち、へと展開する。

ハーディは、この後のストーリーをグレイスの離婚の問題へと持ち込んでいるのだが、節を改めて検討してみよう。

(4) グレイスの離婚問題

夫フィッツピアーズにチャーモンド夫人との不倫に走られ、その挙げ句に二人して大陸に駆け落ちまでされたグレイスという娘を持つメルベリーは、シャートンの市に出かけた折りに、

フレッド・ボーコックから声を掛けられて、

‘Under the new law, sir. A new court was established last year, and under the new statute, twenty and twenty-one Vic., cap. eighty-five, unmarrying is as easy as marrying. No more Acts of Parliament necessary: no longer one law for the rich and another for the poor. But come inside—I was just going to have a nipper-kin of rum-hot—I’ll explain it all to you.’ (pp. 298–9)

という具合に、グレイスがフィッツピアーズと離婚できる可能性のあることを知らされている。

しかし、我々読者はここで注意しなければならないことがある。それは、ボーコックがペテン師であり、メルベリーを鴨にして金儲けを企んでいる、という風な印象を読者に与えるような語り方を語り手（≡ハーディ）がしている点である。メルベリーと会ったこの時のボーコックは酒に溺れて弁護士事務官の職を失って数年が経過しており、今では居酒屋で一件半クラウンで遺言書を作成することでかろうじて生計を立てているに過ぎないところまで落ちぶれていたのである。このようなボーコックにとって、夫に逃げられた娘を持つメルベリーは、離婚問題を解決してあげようと近づけばすぐに乗ってくる格好の鴨なのであった。

ボーコックの言うところの離婚法が the Matrimonial Causes Act of 1857 であれ、あるいは、その改正法の the Matrimonial Causes Act of 1878 であれ、いずれにしても¹⁶⁾、その内容に精通していれば、グレイスに離婚の可能性はほとんどないことが分かるはずなのである。しかし、いずれの法律の内容も詳しくは知らないボーコックであったからこそ、メルベリーと共にロンドンに出て、それらの法律に詳しい弁護士に相談に行くのである。当然のことながら、フィッツピアーズの conduct（振る舞い）はグレイスがフィッツピアーズと離婚できるほどには残酷なものではなかったので、結局、離婚できないことが判明する。

一方、恐らく離婚できるだろう、という情報がロンドンに出たメルベリーから、グレイスとジャイルズとの両者に、離婚不可能ということが判明する前に既に送られてきていて、その情報に基づいて、二人が接近し、結婚を前提にして付き合い始めたのを、語り手（≡ハーディ）は、次のようにコメントする。

To hear these two Arcadian innocents talk of imperial law would have made a humane person weep who should have known what a dangerous structure they were building up on their supposed knowledge. They remained in thought, like children in the presence of the incomprehensible. (p. 309)

上掲のコメントは、語り手（≡ハーディ）が離婚法に精通していることを示唆している。しかし、このコメントからは、語り手（≡ハーディ）がラディカルな視点から離婚問題をこの作品で扱おうとしているのかどうかを見極めることはできない。William A. Davis が指摘していることだが¹⁷⁾、ハーディは『ジュード』においては、破綻した夫婦関係は解消出来るべきだと述べている、ということであって、明らかに離婚法の改正を念頭に置いているようだが、『森林地の人々』においては、そこまで突っ込んだ考え方にまで到達しているとは言い難い。というのは、作品の結末について先回りして触れれば、グレイスのために掘っ立て小屋を明け渡したジャイルズは嵐に打たれて前年の冬にこじらせていた腸チフス¹⁸⁾が元で亡くなり、一方、グレイスは結局夫フィッツピアーズと和解して、リトル・ヒントック村をあとにしてミッドランド地方に移住していくのであり、このような結末からは、離婚法は改正されるべきだというラディカルな主張を読み込むことはできない。つまり、この結末は社会ダーウィニズムの結末であり、時代の流れがもたらす社会の変化に対応できなかったばかりにジャイルズは死んでいくのであり、時代の流れに適応していたグレイスは、フィッツピアーズと和解して、故郷を去って、ミッドランド地方に出発するという未来がかろうじて残されているのである。但し、その未来がグレイスに幸福な結婚生活を約束するものではないにしても（pp. 389-390）¹⁹⁾。

(5) ラディカルな要素と複数の視点の働き

この作品において、グレイスの離婚問題というラディカルな問題が扱われているが、その扱われ方がラディカルな主張を読み込むことを可能とするような扱われ方ではないことを前節の終わりの部分で指摘した。

実は、女性にとっての離婚問題というラディカルな内容が作品内の一要素に過ぎず、ラディカルな主張とはならない構造をこの作品が持っていることを最後に指摘しておきたい。

筆者は今から25年ほど前に「*The Woodlanders* における複数の視点の働きについて」²⁰⁾という小論で、この作品には、1. 密着的視点、2. 巨視的視点、3. ノスタルジックな眼差し、4. ダーウィンの自然観、これら4つの視点が採用されており、その結果、主要登場人物たちの人生行路それぞれが均等の比重で描き出されていることを明らかにした。ここで、その論を再度詳細に展開する必要はないので簡略ながらこの拙論を要約すると以下となる。すなわち、この作品の語り手は、密着的な視点により物語の出来事を客観的に描いていき、ノスタルジックな眼差しから田舎世界の住人たちジャイルズとマーティとの人生を、そして、ダーウィンの自然観から派生する社会ダーウィニズムの視点から、都会世界の出身者フィッツピアーズとチャーモンド夫人らの生き様、女主人公グレイスの人生行路、並びに、ジャイルズの宿命的滅

びの人生を描き、巨視的な視点から人間世界のあらゆる営みを矮小化することによって、それぞれの主要登場人物たちの人生を均等の比重を持つものとして描き出している、ということを明らかにした。換言すれば、 그레이スの結婚の問題を中心にして物語は展開しているけれども、読者は主人公 그레이スの人生の問題のみを辿るような読解を妨げられている。従って、 그레이スの結婚を通して触れられている離婚問題及び離婚法の問題は、それらだけが焦点を当てられてクローズアップするのではなくて、チャーモンド夫人の根無し草的人生、ジャイルズの社会ダーウィニズム的な滅びの宿命の人生、田舎世界の価値観を持ち続けて、ジャイルズの死後も彼に献身的な愛を捧げ続けるマーティの姿、他の主要な登場人物たちの人生の問題と共に読者の脳裏に焼きつけられて物語は終わっているのである。

特に、作品最後の章は、亡くなったチャーモンド夫人とジャイルズとを除くほとんどの登場人物たちが登場しており、この章は主要登場人物たちの人生行路を均等の比重を持つものとして描出しているというこの作品の構造の縮図ともなっているという意味で、まさにこの章は物語の最後を飾るに相応しい終わり方となっている。

人捕りわなの一件で、 그레이スとフィッツピアーズとの間に和解が成立し、フィッツピアーズの叔母が遺してくれた遺産でミッドランド地方で医者の開業権を取得しているフィッツピアーズは 그레이スと一緒にミッドランド地方に行くことを申し入れて、 그레이スがそれを承諾したのである。ところが、フィッツピアーズの乗るべき最終列車が発車したあとであったので、二人はシャートンの the Earl of Wessex Hotel に行くことにしたのであった。このような成り行きを一切知らず、 그레이スが庭にちょっと出ただけだと思っており、その 그레이スの姿がどこにも見あたらないので心配になったメルベリーが、必死になって 그레이スを探しているので、リトル・ヒントック村のお馴染みの連中がメルベリーと共に 그레이ス探索に協力してくれ、ついに一行はシャートンの「ウェッセックス伯爵ホテル」までやってきて、 그레이スとフィッツピアーズとの和解の顛末を知り、帰りに居酒屋で一杯引っかけからまたリトル・ヒントック村に引き返していくというドタバタ劇が演じられる。リトル・ヒントック村に戻ってきた一行は墓地でジャイルズ・ウィンターボーンの墓前に花を手向けるマーティの姿を見かける。そして作品最後は、先ほども触れたように、永遠の愛をジャイルズの墓前に捧げるマーティの姿を描くことで、終わっているのである。

言い換えれば、この作品は複数の視点の採用によって、 그레이スの人生の物語だけではなく、他の主要登場人物たちの人生の物語をも辿ることを読者は要請され、なおかつ、物語は、 그레이スとフィッツピアーズとの和解という結末とジャイルズの墓前に永遠の愛を捧げるマーティの姿という結末、これら二つの結末が併置されているのである。

このように、 그레이スの離婚問題を扱う中で、ラディカルな要素が盛り込まれてはいるが、

読者の関心がそこに焦点を結ぶのを阻止する構造がこの作品にはあることが理解されるだろう。

それでは、この作品は一体何を主題として描出しているというのだろうか。繰り返しになるが、1870年代初頭²¹⁾の足掛け4年、期間にして2年半の間の、主要登場人物たちの人生行路の物語が互いに絡み合う形で描出されているということである。そう言えば、ハーディは彼の実質的な自伝である *The Life* の中で次のように記している。

The human race to be shown as one great network or tissue which quivers in every part when one point is shaken, like a spider's web if touched.²²⁾

上掲の引用中の“one point”をこの作品に当てはめて考えれば、この作品のタイトル候補の一つ“Fitzpiers at Hintock”が示すように、リトル・ヒントック村に医業を開業したフィッツピアーズその人であり、彼の存在がリトル・ヒントック村の主だった人物たちの人生に波紋をもたらす、その様が描き出され、それぞれにいろいろな影響を受けたそのすべては時代の流れがもたらしたものであることが、読後の読者の脳裏に刻みつけられるのではなかろうか。

注

- 1) R. L. Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (Oxford: The Clarendon Press, First Published in 1954, Reprinted in 1968 and 1978), p. 55.
- 2) William R. Rutland, *Thomas Hardy: A Study of his Writings and their Background* (New York: Russell & Russell Inc., First Published in 1938, Reissued in 1962), p. 212.
- 3) Carl J. Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1965), p. 154.
- 4) T. R. Wright, *Hardy and His Readers* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003), p. 160.
- 5) Weber, *op. cit.*, p. 154.
- 6) Weber, *op. cit.*, p. 155.
- 7) Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., Reprinted in 1973, First Published in 1962), p. 102.
- 8) Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (London: The Bodley Head Ltd., 1971), pp. 23–24.
- 9) Thomas Hardy, *The Woodlanders* (London: Macmillan Press Ltd., 1974 [paperback]), p. 35. 本文引用はすべてこの版からであり、以下頁数は引用等に続けて括弧に入れて示す。
- 10) Penny Boumelha, “The patriarchy of class: *Under the Greenwood Tree, Far from the Madding Crowd, The Woodlanders*”, *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*, ed. Dale Kramer (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), p. 130.
- 11) T. R. Wright, *op. cit.*, p. 162.
- 12) この点については、後ほど詳細に触れることにする。

- 13) 『産業革命と民衆』（角山榮・川北稔・村岡健次著、河出書房新社、1992年、p. 289）によれば、ヴィクトリア朝時代は長子相続であったから、貴族の次三男は土地財産にありつけず、他の職業に就く他なかった。従って、医業を開業しているフィッツピアーズは長男でなかったことになる。また同書の同じ頁に次のような記述がある。

「またナポレオン戦争終結時（1815年）には、国教会の牧師、パリスタと呼ばれる法廷弁護士、それに内科医は、間違いなくジェントルマンと一般に認められるようになっていたから、これらの人々は、中流階級ではなく、上流階級にいられた方が本当はいいのかもしれない。」

- 14) レイモンド・ウィリアムズ著・山本和平・増田秀男・小川雅魚訳、『田舎と都会』（昌文社、1985年）、pp. 264-282.
- 15) 身分差の結婚については、Michael Millgate (*Thomas Hardy—A Biography* [Oxford & New York: Oxford University Press, 1985], p. 279) が以下のように指摘している。

but it seems possible that he [=Hardy] in some sense identified Grace Melbury with his grandmother, that he saw both of them as unhappily caught between conflicting class backgrounds and family loyalties, and that Betty Swetman's disastrous marriage to George Hand found an oblique reflection in the difficulties of Grace's relationship with her husband, Edred Fitzpiers.

- 16) この作品で扱われている離婚法がいずれの離婚法であるのかについては、拙論「*The Woodlanders* の時代設定について」（『教養部紀要第58巻第2号』）を参照されたい。
- 17) William A. Davis, *Thomas Hardy and the Law: Legal Presences in Hardy's Life and Fiction* (Newark: University of Delaware Press, 2003), p. 123.
- 18) 『産業革命と民衆』（p. 191）によれば、ヴィクトリア朝時代には、腸チフスがよく流行したようである。ヴィクトリア女王の夫君アルバート公も腸チフスが原因で亡くなっている。
- 19) Simon Gatrell, *Hardy the Creator: A Textual Biography* (Oxford: Clarendon Press, 1988), p. 133.
- H. M. Daleski, *Thomas Hardy and Paradoxes of Love* (Columbia and London: University of Missouri Press, 1997), p. 150.
- 20) 拙論「*The Woodlanders* における複数の視点の働きについて」（『松元寛先生退官記念論文集—英米文学語学研究』[英宝社、昭和62年、pp. 222-229]）
- 21) この作品の時代設定については、拙論「*The Woodlanders* の時代設定について」（『教養部紀要第58巻第2号』）を参照されたい。
- 22) Florence Emily Hardy, *op. cit.*, p. 177.

静岡県中・東部地方における 曹洞宗寺院の歴住世代(7)

木 村 文 輝

本稿は、『愛知学院大学教養部紀要』第57巻第1、2、3、4号、第58巻第1、2号に所収の拙稿「静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(6)」の続編である。本稿では、曹洞宗静岡県第1宗務所管内の第12、第13教区に属する寺院の調査結果を掲載する。ただし、調査票未回収の寺院については掲載を見送った。凡例に関しては、前掲の各拙稿に記載のものに従う。なお、同宗務所管内第14教区以下の寺院の結果については、次号に引き続き掲載する予定である。

追記、調査に御協力下さった各寺院御住職に対し、謝意を表します。また、本稿作成にあたり、調査票配布と資料整理には愛知学院大学大学院中村早栄氏の御助力を賜った。さらに、資料整理には静岡市在住村越健氏、谷田貝ちさと氏、山崎政美氏の御協力を賜った。記して謝意を表します。

12教区	しょうじゅざん	ばんせきじ	〒	421-0214
528番	正受山	盤石寺	住 所	焼津市中島421
			住 職	梶田恵光
開 山 年	文明12(1480)		草創年	不詳・臨済宗能満寺(吉田町)末
本 尊	釋迦牟尼佛			
開 基	不詳			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	玉翁周琳	明応1 (1492)10・27		則 心 寺(530)2世、高 岳 寺(531)2世、大靈寺(533)開山	325b
2	華笑周巖	永正9 (1512)5・21	勅特賜玄珠大明禪師	大本山總持寺輪住403世(文亀3)、即心寺(530)3世、三嘉寺(547)廃)開山	1027d
3	雪堂東積	永正15(1518)8・9		長徳寺(545)開山、円応寺開山?、福寿院開山?	
4	留室全逗	天文15(1546)9・22		長翁寺(537)廃)開山	
5	鳳山現龍			意雲庵(546)開山	
6	建國晃立	天文16(1547)11・26		大智寺(廃)開山、長源寺開山	
7	慶崑林賀				
8	覚州受泰	承応3 (1654)8・27		喜徳庵(541)開山	
9	南國榮胡	12・27			
10	香外涼薫	寛文3 (1663)3・22		龍泉寺(548)開山	
11	老山巨翁	寛永5 (1628)6・24			
12	圓爾鏡國	享保2 (1717)11・3			
13	富峰國瑞	享保16(1731)6・24			
14	乘興唱宗	明和4 (1767)8・14		石雲院(607)輪住(寛保1)、洞雲寺(459)12世	411f
15	日宗禪朝	元文3 (1738)7・21			
16	法山壽聞	明和2 (1765)7・21	火災で本堂焼失	瑞光寺(廃?)	265b
17	百癡眉毛	寛政3 (1791)6・18			265c
18	九包自脊	寛政4 (1792)7・13	天明2現本堂新築	成因寺10世	
19	渴堂大休	寛政12(1800)5・8			
20	大轉秀教	文化2 (1805)4・22		林叟院(388)22世	
21	壽昌養存	文化3 (1806)2・23			
22	大應智乘	天保6 (1835)3・23		延命寺(191)2世、成道寺(551)18世、泉龍寺(558)法地開山、興源寺(562)開山	325h
23	華巖錦嶺	天保3 (1832)7・3			
24	月溪石山	慶応2 (1866)3・25			
25	至雄大淳	文久3 (1863)10・8			
26	首岩揺鱗	明治40(1907)9・29	(世寿76歳、山西洞家より)	一乗寺(126)21世、三嘉寺(廃)	
27	鵠天寛齡	慶応4 (1868)7・25		延命寺(191)9世	326a

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

28	大乘道悟	明治41(1908)3・2	(世寿66歳、同上) [白川]	曹源寺(76)22世、宝珠院(78宝月院)伝法開山、養福寺(79)3世、延命寺(191)14世、成道寺(551)22世、興聖院(554)3世、泉龍寺(558)5世、興源寺(562)4世、指月院(廃)2世	326b
29	至山朴淳	昭和3(1928)5・26	隨意会地開闢、(世寿80歳、同上) [青野]		326b
30	雄外大俊	昭和14(1939)9・21	在住40年 [青野]	大智寺法地開山、長翁寺(537廃)法地開山	326b
31	祖淳孝山	昭和25(1950)4・2	[青野]	興聖院(554)6世、長徳寺法地開山?	326c
32	禪峰祖俊	昭和52(1977)5・6	[梶田]	長翁寺?	326c
33	恵光	現住	[梶田]	意雲庵(546)現住、龍泉寺(548)現住	326d

12教区	しょうじゅざん	だいがくじ	〒	421-0203
529番	正寿山	大学寺	住 所	焼津市藤守2604
			住 職	池田孝志
開 山 年	天正2(1574)		草創年	不詳(平安時代?)
本 尊	釈迦牟尼如来			
開 基	加藤勘右衛門			
旧 名 称	(智母山、藤枝村誌より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―梅林院(390)―萬松院(394)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大専麟撮	天正19(1591)3・4		萬松院(394)3世	
2	天桂麟香	慶長19(1614)9・25		萬松院(394)5世	
3	明菴秀永	寛永20(1643)10・22		萬松院(394)6世	
4	廬州守岳	寛文3(1663)3・8		石雲院(607)輪住(寛永15)、萬松院(394)8世、正寿院開山?	
5	品国州序	延宝5(1677)9・3			
6	慈山鉄眼	享保3(1718)1・17			
7	恵印密源(慧)	享保16(1731)6・1	(享保年間本堂再建、藤枝町誌より)		
8	柏巖智統	寛保3(1718)5・21			
9	月窓角紋	延享4(1747)10・25			
10	憲應覚春	明和7(1770)8・8 (天明2(1782))			409d
11	麒山瑞麟	天明4(1784)4・18		石雲院(607)輪住(明和3)	409e
12	薰嶽閑香	寛政12(1800)4・21		成道寺(551)14世、竜江院13世	
13	到岸断流	文政13(1830)10・5	中興	石雲院(607)輪住(文化11)	409f
14	摩天春鳳	安政2(1855)6・9		孤雲院(538)14世、成道寺(551)19世	409g
15	開翁禪透	元治1(1864)11・18			
16	祥山鳳瑞	万延1(1860)6・9		延命寺(191)6世、昌泉院(561)5世、長泉寺(567)前住?	409h

17	瑞岸祥龍	明治27(1894)7・9	[下條]	石雲院(607)輪住(文久2)、昌泉院(561)6世	409c
18	瑞嶽祥道	明治32(1899)7・26	(明治19半僧坊堂創建、藤枝町誌より) [戸本]		409d
19	性海無底	昭和17(1942)12・25	(世寿74歳、山西洞家より) [戸本]		409c
20	瑞嶽尚玄	昭和58(1983)9・5	重興 [池田]		409d
21	大学弘道	平成11(1999)2・18	[池田]		409e
22	隆法孝志	現住	[池田]		

12教区	じょうふざん	そくしんじ	〒	421-0202
530番	静富山	則心寺	住 所	焼津市下小杉975
			住 職	大原俊雄
開 山 年	文明4(1472)3・25		草創年	不詳・真言宗
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基				
旧 名 称	隣富山(山門葦酒塔より)、即心寺(能満寺文書より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	華溪祖菊	文明4 (1472)3・25	南明寺3世梅林禪芳法弟	高岳寺(531)開山	325a
2	玉翁周淋	明応1 (1492)10・27		盤石寺(528)開山、高岳寺(531)2世、大靈寺(533)開山、高福寺開山?	325b
3	華笑周巖	永正9 (1512)5・21		大本山總持寺輪住403世(文亀3)、盤石寺(528)2世、三嘉寺(547)廃開山	1027d
4	南宗源心	天文3 (1532)8・7			
5	桃庵良源	永禄1 (1558)4・16			
6	智山文能	天正2 (1574)5・28	示寂日は武田勝頼襲来による当寺退出日との説あり。同年6月より武田氏滅亡まで臨済宗能満寺(吉田町)末となる		
7	竹翁広嫩	寛永20(1643)5・2			
8	菟洲宗徹	正徳5 (1715)2・5		林松院(543)廃開山?	
9	青山太秀	慶安3 (1650)10・13		長昌寺(536)開山	
10	明暗伊噉	承応3 (1654)1・23			
11	三翁韓秀	延宝5 (1677)12・20			
12	祥山仙光	享保15(1730)8・22			
13	仏山千海	享保11(1726)7・2			
14	普見柳朝	元文3 (1738)9・10		貞善院(552)9世	409c
15	嶺屋仙岫	享保20(1735)8・4			
16	徹外超宗	明和8 (1771)9・7			274a
17	大寂謂雲	寛延2 (1749)1・7			274a
18	明庵吳白	安永6 (1777)4・3			
19	葦豊英厚	明和1 (1764)11・16			
20	雷雄守説	寛政7 (1795)1・10		高德寺(535)法地開山	
21	秀价旭春	寛政9 (1797)3・19			22b

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

22	正山蘭宗	天保8 (1837)2・10		秀道院(37)11世	22c
23	仏山大宗	嘉永7 (1854)7・10		増善寺(60)33世、長昌寺(536)法地開山、大泉寺	22d
24	大安道宗	慶応2 (1866)2・6		高德寺(535)2世、長昌寺(536)2世	22b
25	牧牛林童	明治32(1899)9・13	(世寿72歳、山西洞家より)	大靈寺(533)2世、長昌寺(536)3世、高福寺法地開山?	22c
26	朴翁恵淳	明治24(1891)2・11		高德寺(535)3世、大靈寺(533)7世	22d
27	祥童天瑞	明治36(1903)10・31	[朝比奈]	(長昌寺(536)(5世))	22e
28	聖庵靈光	昭和10(1935)7・1	[田中]	長昌寺(536)6世	22f
29	靈雲義綱	大正2 (1913)1・2	[大原]	長昌寺(536)5世	22g
30	光運義範	昭和50(1975)4・13	[大原]	高德寺(535)8世	22f
31	大器俊雄	現住	[大原]	長昌寺(536)11世	22g

12教区	きちえいざん	こうがくじ	〒	421-0212
531番	吉永山	高岳寺	住所	焼津市利右衛門855-1
			住職	溝口正治
開山年	文明3(1471)		草創年	
本尊	釈迦牟尼佛			
開基				
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	萃溪素菊	文明4 (1472)3・25		則心寺(530)開山	325a
2	玉翁周林	明応1 (1492)10・27		盤石寺(528)開山、則心寺(530)2世、大靈寺(533)開山、高福寺開山?	325b
3	宇伯周永	15			325c
4	喜堂素観	28			325d
5	連室梵岳	元和4 (1618)9・2		正寿寺(539)開山、長楽寺(542廃)開山?	325e
6	盛州伝茂	24			325f
7	拔州文序	24			325g
8	剛國愚健	延宝4 (1676)9・10			325h
9	天快宏補	宝永1 (1704)3・15			325b
10	大船重頓	享保2 (1717)5・5	中興		325c
11	大雲竜海	元文2 (1737)8・18			325d
12	円宗宏海	明和1 (1764)3・23 (宝暦14)			325e
13	宝山登閣	文化5 (1808)6・23			325f
14	満堂宝充	文政7 (1824)4・5		香橋寺(497)16世	325g
15	春林昌豊	嘉永6 (1853)12・4			
16	金提龍文	明治14(1881)1・18	重興	顕光院(1)23世、宗乗寺(460)25世、松寿寺(469)5世、正泉寺(532)法地開山、大靈寺(533)4世	462d

17	大器實成	文久1 (1861)4・29		正泉寺(532)2世、大靈寺(533)5世	462b
18	戒完禪法	慶応1 (1865)10・2		正泉寺(532)3世	462c
19	大道玄祐	明治9 (1876)11・25		正泉寺(532)4世	462b
20	月山龍吟	明治25 (1892)9・22		正泉寺(532)5世	462c
21	大応禪道	昭和10 (1935)1・1	[澁谷]	大靈寺(533)10世	462d
22	孝学道順	昭和14 (1939)1・22	[加藤]	顕光院(1)25世	462e
23	懷仁道安	大正8 (1919)2・1	(世寿23歳、山西洞家より)		
24	大寛義祐	昭和58 (1983)3・13	[木村]	顕光院(1)26世	462f
25	皎鶴恵順	昭和53 (1978)10・31	[近藤]	大靈寺(533)11世、正寿寺(539)法地開山	462f
26	正治	現住	25世弟子、昭和54・7・9入山、昭和55・5晋山 [溝口]		

12教区	かんのんざん	しょうせんじ	〒	421-0204
532番	観音山	正泉寺	住 所	焼津市高新田152
			住 職	近藤勝秋
開山年	慶長3 (1598)		草創年	
本尊	聖観世音菩薩			
開基	蔭田権右衛門			
旧名称				
旧所在地	(昭和20現在地へ移転)			
本寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—高岳寺(531)			
寺史等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前住	久寛寅昌		開山(慶長3)、高岳寺5世蓮室梵岳弟子、高岳寺首座		
法地開山	金提竜文	明治14 (1881)1・18	拝請(明治10、高岳寺住職)	高岳寺(531)16世、顕光院(1)23世、宗乗寺(460)25世、松寿寺(469)5世、大靈寺(533)4世	462d
2	大器実成	文久1 (1861)4・29		高岳寺(531)17世、大靈寺(533)5世	462b
3	戒完禪法	慶応1 (1865)10・2		高岳寺(531)18世	462c
4	大道玄祐	明治9 (1876)11・25		高岳寺(531)19世	462b
5	月山龍吟	明治25 (1892)9・22		高岳寺(531)20世	462c
6	玉翁竜珉			顕光院(1)24世	462b
7	大応良典		中興	孤雲院(538)15世、常現寺18世?	456c
8	転常法輪	昭和2 (1927)3・27	明治9入山 [近藤]	松寿寺(469)9世	462c
9	綱外逸定	昭和32 (1957)6・25			
10	豪山逸英	平成9 (1997)7・10	重興、昭和20飛行場建設により強制移転、昭和58・3本堂・庫裡再建、世寿91歳		
11	大鑑勝秋	現住	平成5・3・28晋山 [近藤]		

12教区	おおはたさん	だいらようじ	〒	426-0053
533番	大畑山	大靈寺	住 所	藤枝市善左衛門3丁目23-9
			住 職	近藤朋泰

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

開山年	永正年間(1504-1521)、(文明12(1480)3、大洲村誌より)	草創年	
本尊	聖十一面観世音菩薩		
開基	大畑作兵衛		
旧名称	上泉山		
旧所在地	(上泉村、現在地の東南、文政11・6大井川氾濫で現在地へ移転、大洲村誌より)		
本寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)		
寺史等			

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	玉翁周琳			盤石寺(528)開山、則心寺(530)2世、高岳寺(531)2世、高福寺開山?	325b
2	枚久林童		法地開闢	則心寺(530)25世、長昌寺(536)3世、高福寺法地開山?	22c
3	荊山石鼎				
4	金提龍文			顕光院(1)23世、宗乗寺(460)25世、松寿寺(469)5世、高岳寺(531)16世、正泉寺(532)法地開山	462d
5	大器實成			高岳寺(531)17世、正泉寺(532)2世	462b
6	實山梅芳		中興		
7	朴翁慧淳			則心寺(530)26世、高德寺(535)3世	22d
8	梁山石柱		(法地開闢始祖・初住(明治14・3・21)、大洲村誌より) [碓井]		
9	石成全瑞	大正3(1914)9・7			
10	大應禪道		[渋谷]	高岳寺(531)21世	462d
11	皎鶴恵順	昭和53(1978)10・31	世寿82歳 [近藤]	高岳寺(531)25世、正寿寺(539)法地開山	462f
12	康文朋泰	現住			462g

12教区	そうこうざん	こうとくじ	〒	421-0205
535番	宗高山	高德寺	住所	焼津市宗高988-1
			住職	畑中道雄
開山年	寛政6(1794)		草創年	延徳1(1489)真言宗
本尊	十一面観世音菩薩			
開基	一徳玄輪(文亀2(1502)1・21示寂)、池谷院源岳宗高居士(池谷清右衛門、元和7(1621)没)			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—則心寺(530)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前住	一徳玄輪	文亀2(1502)1・21	開基、草創開山、真言宗		
開山	雷雄守説	寛政7(1795)1・10	法地開山(草創以後開山まで不詳)	則心寺(530)20世	
2	大安道宗	慶応2(1866)2・6		則心寺(530)24世、長昌寺(536)2世	22b
3	朴翁恵淳	明治24(1891)2・11		則心寺(530)26世、大霊寺(533)7世	22d

4	無外禪量				
5	海林宣桂	明治31(1898)11・26	(法地昇等(明治15・1・9)、静浜村誌より) [延山]		
6	鉄翁拍舟	大正1 (1912)12			
7	禪海東舟	昭和25(1950)12・25	[鈴木]		
8	光道義範	昭和50(1975)4・13	[大原]	則心寺(530)30世	22f
9	大門証禪	昭和41(1966)9・13			
10	佛心得中	平成3 (1991)7・19	昭和53・3本堂再建		
11	傑堂静心	平成17(2005)7・10	福井県遠敷郡三生野出身、福井県常在院加藤碩翁弟子(昭和6・10)、世寿86歳 [畑中]	正傳院(581)3世、地藏院(福井234)6世	933g
12	大智道雄	現住	11世弟子、昭和58庫裡改築、平成6山門修復、平成16庫裡増築 [畑中]	正傳院(581)4世	

12教区	しゅうこうざん	ちょうしょうじ	〒	426-0055
536番	秀廣山	長昌寺	住 所	藤枝市大西町2-6-2
			住 職	鬼頭廣順
開 山 年	慶長1(1596)、(寛文4(1664)3、大洲村誌より)		草創年	
本 尊	地藏菩薩			
開 基	博室秀廣居士(朝比奈五郎兵衛)			
旧 名 称	覚皇山(お堂)			
旧所在地	(寛文4(1664))現在地に堂宇建立、志太郡誌より)			
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—則心寺(530)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	青山大秀	慶安2 (1649)10・13		則心寺(530)9世	
前住	榮山嬾秀	延宝3 (1675)4・12	開基?		
前住	眼應洞水	宝永7 (1710)5・21			
前住	潮音唵海	享保9 (1724)1・22			
前住	眼宗正法	享保17(1732)7・3			
前住	泰安見国	享保18(1733)1・11			
前住	徹圓寂堯	宝暦3 (1753)12・12			
前住	禪者教宗	享和1 (1801)4・13	中興、安永7本堂再建		
法地開山	伏山大宗(仏)	嘉永7 (1854)7・10		則心寺(530)23世、増善寺(60)33世、大泉寺	22d
2	大安同宗	明治26(1893)8・15		則心寺(530)24世、高德寺(535)2世	22b
3	牧牛林童	明治31(1898)9・13	法地初住(明治15、大洲村誌より)、慶應2・8・23論旨拝戴	則心寺(530)25世、大靈寺(533)2世、高福寺法地開山?	22c
4	靈潭桂淳	大正5 (1916)3・23			
(4)	(佛山瑞明)		(大洲村誌より) [増田]	法蔵寺(8)17世、洞慶院(34)独住4世、長光寺(61)31世、龍泉寺(92)3世、林泉寺(578)前住	503b
5	靈雲義綱	大正3 (1914)1	[大原]	則心寺(530)29世	22g
(5)	(祥道天瑞)		(同上) [朝比奈]	則心寺(530)27世	22e
6	聖庵靈光	昭和10(1935)7・1	[田中]	則心寺(530)28世	22f
7	休庵隆之	昭和48(1973)6・22			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

8	義山豊隆	昭和22(1947)8・18	6世弟子		
9	萊乗得運	昭和39(1964)3・22	中興、新潟出身、昭和9本堂再建 [阿部]		361e
10	乗運得聖	平成3(1991)5・25	9世徒弟、用宗大雲寺弟子、世寿81歳、法齢67年 [山田]		361g
11	大器俊雄	東堂	平成3から平成6まで兼務住職 [大原]	則心寺(530)31世	22g
12	大観廣順	現住	島田市川根万福寺住職二男、則心寺31世(当寺11世)弟子 [鬼頭]		

12教区	せいりゅうざん	こうんいん	〒	421-0201
538番	青龍山	孤雲院	住 所	焼津市上小杉578-1
			住 職	高橋甲陽
開 山 年	文明18(1486)8・15		草創年	不詳・真言宗
本 尊	薬師瑠璃光如来			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地	航空自衛隊静浜基地正門付近(昭和19(1944)まで)			
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—則心寺(530)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	茂山祖宗	明応1(1492)7・1 (延徳4)	則心寺4世南宗源心法孫		
2	天真 充	天文11(1542)3・21			
3	法山 堂	弘治3(1557)9・4			
4	方室善伯	天正15(1587)8・24			
5	天叟鏡公	元和2(1616)2・15			
6	然室呑廓	寛永3(1626)1・28			
7	桂巖秀嫩	明暦1(1655)6・8			
8	諾揚本應	正徳5(1715)5・13			
9	堅室本固	元禄6(1693)4・20			
10	仙山瑞鳳	宝暦4(1754)6・4	享保6・4・3本堂再建		
11	洞洪悦仙	宝暦5(1755)11・26			
12	大暁伯仙	宝暦12(1762)3・21			
13	太雲智朴	文化3(1806)8・21			
14	(摩天)春鳳		文化10・3・8本堂再々建	大学寺(529)14世、成道寺(551)19世	409g
14	秀山綏榮	嘉永6(1853)7・2	(過去帳に14世と記載あり)		
15	大應良典	明治23(1890)1・14		正泉寺(532)7世、常現寺18世?	456c
法地開山	眞應太淳	昭和55(1980)1・18	法地開闢(昭和17)、滋賀県彦根市出身、福井県興禪寺25世太岳玄冢法孫、昭和12入寺、昭和19強制移転命令、昭和44開山堂新築、世寿82歳、法齢69年 [寺村]		825g
2	重美天真	東堂	昭和50・3・30晋山式、平成17本堂新築、平成20・4・10退董 [寺村]		825h

3	大拙甲陽	現住	御前崎市白羽出身、御前崎市増船寺22世大道文雄法孫、平成20・4・10入寺〔高橋〕		
---	------	----	---	--	--

12教区	なんそんざん	しょうじゅうじ	〒	421-0212
539番	南村山	正寿寺	住 所	焼津市利右衛門1005
			住 職	溝口擴道
開 山 年	慶長5(1600)5・27		草創年	不詳・浄土宗
本 尊	阿弥陀如来(春日仏師作)			
開 基	移山永公記室			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—高岳寺(531)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	蓮室梵岳	元和4 (1618)9・2		高岳寺(531)5世、長樂寺(542)開山?	325e
2	宇雲宗文				
3	骨寒文徹				
4	路山洞前				
5	興天永國				
6	領門立官				
7	報専泰恩				
8	神良旭州	寛政4 (1792)5・16			
9	善國宗隨				
10	定宗珉宗	文政6 (1823)3・5			
11	慈川筏舟				
12					
13	完翁順國	明治44(1911)3・6	[小澤]?		409c?
14	癡禪大愚	大正11(1922)4・1		秀伝寺(愛知158)14世	913b
15	絶学貫禪	昭和21(1946)6・5	[溝口]	慈眼寺5世	913c
法地開山	皎鶴恵順	昭和53(1978)11・30	[近藤]	高岳寺(531)25世、大靈寺(533)11世	462f
2	國眼至道	昭和59(1984)3・20	[溝口]		913d
3	天山擴道	現住	[溝口]	徧照寺(430)25世	

12教区	だいじさん	きとくあん	〒	421-0213
541番	大慈山	喜徳庵	住 所	焼津市飯淵55
			住 職	梶田瑛浩
開 山 年	弘治1(1555)		草創年	
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—盤石寺(528)			
寺 史 等				

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	(覚州受泰)		(盤石寺記録より)	盤石寺(528)8世	
現住	瑛浩	現住	[梶田]		

12教区	ふどうさん	ちょうとくじ	〒	421-0213	
545番	不動山	長徳寺	住 所	焼津市飯渕20	
			住 職	鈴木俊祐	
開 山 年	永正15(1518)		草創年	長徳2(996)	
本 尊	不動明王				
開 基	不詳				
旧 名 称					
旧所在地					
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—盤石寺(528)				
寺 史 等					

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	(雪堂東積)		(盤石寺記録より)	盤石寺(528)3世、円応寺開山?、福寿院開山?	
2	陰山大林	昭和3(1928)4・9	[鈴木]	大智寺8世	326b
3	石天明祐	平成4(1992)3・11	世 寿87歳、法 齢73年 [鈴木]	大智寺10世	326c
4	大器俊明	東堂	平成4・11・12晋山 [鈴木]		326d
5	大徳俊祐	現住	平成20・2・1就任 [鈴木]		

12教区	はぶちざん	いうんあん	〒	421-0213	
546番	飯渕山	意雲庵	住 所	焼津市飯渕419	
			住 職	梶田恵光	
開 山 年	不詳		草創年		
本 尊	釈迦牟尼佛				
開 基					
旧 名 称					
旧所在地					
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—盤石寺(528)				
寺 史 等					

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	鳳山現龍			盤石寺(528)5世	
現住	恵光	現住	[梶田]	盤石寺(528)33世、龍泉寺(548)現住	326d

12教区	しょうせきざん	りゅうせんじ	〒	421-0213	
548番	正石山	龍泉寺	住 所	焼津市飯渕195	
			住 職	梶田恵光	
開 山 年	寛文3(1663)		草創年		
本 尊	釈迦牟尼佛				
開 基					
旧 名 称					

旧所在地	
本 寺	大本山總持寺—永光寺(石川64)—南明寺(山梨339)—盤石寺(528)
寺 史 等	

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	香外涼薫	寛文3 (1663)3・22		盤石寺(528)10世	
現住	恵光	現住	[梶田]	盤石寺(528)33世、意雲庵(546)現住	326d

12教区	えいせんざん	しょうこうじ	〒	426-0055
549番	詠川山	松光寺	住 所	藤枝市大西町3-17-21
			住 職	田中亮道
開 山 年	不詳、(貞享年間(1684-1688)以前、大洲村誌より)			草創年
本 尊	釈迦牟尼佛			
開 基	貴應玄尊居士(内藤源助、貞享3(1686)8・15没)			
旧 名 称	(源光庵(貞享年間)、大洲村誌より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—洞雲寺(459)—医王寺(609)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	意國英的	明暦2 (1656)3・3		石雲院(607)輪住(正保4)、医王寺(609)7世、西蓮寺開山、種月院開山、海蔵寺開山、宗光寺開山	410f
現住	演能亮道	現住	[田中]	傳榮寺(478)3世、浄円寺(525)現住	464e

13教区	くおんざん	じょうどうじ	〒	425-0054
551番	久遠山	成道寺	住 所	焼津市一色460
			住 職	伊久美清智
開 山 年	永禄10(1567)			草創年
本 尊	釈迦如来			
開 基	美濃国岩村城主秋山伯耆守信友			
旧 名 称	法鏡山光源寺(臨濟宗時代)、宝鏡山興源寺(3世代に末寺と山寺号交換)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—常楽院(425)			
寺 史 等	『久遠山成道寺六百五十年史』(1967)			

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前往	勉之背旃	建武4 (1337)6・3	臨濟宗開山(文保1)、信濃諏訪出身、成安寺源翁全婦法子、京都安国寺へ出世		
開山	月洲周隣	永禄12(1569)11・18	常楽院3世報室周恩法嗣	石雲院(607)輪住(永禄10)、常楽院(425)4世、用雲寺(450)開山	437d
2	超翁禅越	元龜2 (1571)3・1	開闢始祖、開山法嗣	興源寺(562)開山、栖源寺(廃)開山	437e

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

3	解庵春慧	天正19(1591)3・18	2世法嗣、末寺興源寺と山寺号を交換し「久遠山成道寺」と号す	石雲院(607)輪住(天正16)、興源寺(562)開基、長泉寺(567)開山、東春院(廃)開山	
4	盛巖舜隆	寛永14(1637)7・15	江戸下谷出身、3世法嗣	泉竜寺(558)開山、光西寺(569)開山	
5	縦国長逸	承応2(1653)6・6	岡部朝比奈村出身、4世法嗣、寛永11・4・5綸旨拝戴、慶安2・8・24朱印拝戴	石雲院(607)輪住(寛永20)、新福寺(廃)開山	
6	山叟梁岱	延宝3(1675)11・2	駿河瀬戸染飯町出身、5世法嗣、寛永21・3・16綸旨拝戴(長源寺)、本堂・衆寮・庫裡・山門再建、世寿69歳	永明寺(566)開山、洞福寺(572)開山、長久寺(577)開山、長源寺(廃)	
7	円輪長頼	正徳1(1711)9・26	焼津市一色和泉氏出身、6世弟子、同法嗣、大阪住吉快門律師に戒を受け結制を修す、延享2・2・8綸旨拝戴(新福寺)、世寿79歳	石雲院(607)輪住(天和2)、興聖院(554)草創開山	
8	享山鼎崇	元禄13(1700)6・22	焼津市一色良知氏出身、7世弟子、同法嗣、世寿40歳	久昌寺(580)開山	
9	劫外隆春	正徳5(1715)8・3	駿府伝馬町出身、8世法嗣、元禄14・2・24綸旨拝戴、岩淵慈林寺に住し本堂建立、世寿68歳	慈林寺	
10	活宗問禪	元文5(1740)10・13	重興、遠江菊川北川氏出身、7世弟子、9世法嗣、宝永5・3・15綸旨拝戴(新福寺)、宝永4・10の地震で倒壊した本堂・衆寮・禅堂・開山堂・蔵司・浄房・鐘楼・小方丈・鎮守等再建、世寿67歳	石雲院(607)輪住(享保15)、泰善寺(560)開山	
11	柏庭本樹	寛保3(1743)4・19	徳翁良高法嗣、享保9・8・25綸旨拝戴、世寿60歳		228g
12	真乗迪宗	明和4(1767)3・13	焼津市新屋寺尾氏出身、元文4・9・16綸旨拝戴(新福寺)、世寿60歳		
13	海屋添寿	文化3(1806)12・3	焼津市新屋寺尾氏出身、宝暦14・3・5綸旨拝戴(弘徳院)、天明7宝篋印塔建立、世寿73歳	石雲院(607)輪住(安永7)、弘徳院(393)14世、栖源寺(廃)隠棲	
14	恵獄蘭香	寛政12(1800)4・21	世寿46歳	大学寺(529)12世、竜江院13世	
15	定覚戒本	文政7(1824)10・1			
16	佛音蘭竜	天保8(1837)6・4	焼津市新屋出身、文化4・4・25綸旨拝戴、世寿59歳		
17	物外善応	文政13(1830)3・13	文政5・3・24綸旨拝戴		
18	大応智乗	天保6(1835)3・21	高岳寺満堂宝充法嗣、享和2・3・11綸旨拝戴(盤石寺)、世寿68歳	延命寺(191)2世、盤石寺(528)22世、泉龍寺(558)法地開山、興源寺(562)開山	325h
19	摩天春鳳	安政2(1855)6・9	大学寺より転住、世寿77歳、法齢57年	大学寺(529)14世、孤雲院(538)14世、栖源寺(廃)隠棲	409g
20	慧鑑大能	明治21(1888)3・23	隨意会地開闢(嘉永2・12)、愛知県丹羽郡岩倉羽根村祖父江久左エ門二男、18世法嗣、嘉永2当寺住職、隨意会地開闢発願、安政地震で諸堂倒壊、本堂修理、庫裡・方丈等再建、世寿78歳、法齢63年[祖父江]	一乗寺(126)18世、延命寺(191)5世、興聖院(554)法地開山、泉龍寺(558)3世、興源寺(562)2世、石雲院(607)独住4世、香積寺(愛知658)29世	325b 326a
21	天外良淳	明治14(1881)7・5	越後刈羽郡二田村古川文左エ門二男、同村長命寺良悟弟子、20世法嗣、嘉永3・10・2綸旨拝戴(延命寺)、文久1当寺住職、世寿66歳、法齢34年[古川]	石雲院(607)輪住(明治7)、洞慶院(34)輪住(安政年間)、延命寺(191)8世、興聖院(554)2世、泉龍寺(558)4世、興源寺(562)3世、石雲院(607)独住1世	326a

22	大乘道悟	明治41(1908)3・1	越後荊羽郡二田村白川伝兵エ二男、21世法嗣、文化3・9・14繪旨拝戴(長久寺)、明治9当寺住職、薬師堂建立、本堂・開山堂・地藏祠・総門再建、世寿66歳 [白川]	曹源寺(76)22世、宝珠院(78宝月院)伝法開山、養福寺(79)3世、延命寺(191)14世、盤石寺(528)28世、興聖院(554)3世、泉龍寺(558)5世、興源寺(562)4世、指月院(廃)2世	326b
23	大洞得仙	大正8(1919)9・2	岐阜県羽島郡西小熊村内栗野大野四郎右エ門二男、20世弟子(明治2)、22世法嗣、富士郡白糸村法蔵院22世(世代になし)、明治41当寺住職、曹源寺で示寂、世寿64歳、法齢38年 [大野]	曹源寺(76)23世、宝珠院(78宝月院)2世、養福寺(79)4世、泉龍寺(558)6世、指月院(廃)3世	326c
24	祖嶽天縦	明治37(1904)8・29	勸請(25世による)、志太郡高田村岡村兼吉家出身、21世弟子(慶応3)、同(石雲院住職)法嗣(明治9)、明治13常楽院住職、明治29庵原郡袖師村龍雲院住職、明治36準師家・丹波円通寺僧堂附、興源寺で示寂、世寿52歳 [岡村]	龍雲院(128)21世、常楽院(425)24世、泰善寺(560)法地開山、興源寺(562)8世	326b
25	対壑仰山	昭和12(1937)10・7	志太郡稲葉村宮原伊久美幸助二男、21世弟子、24世(興源寺住職)法嗣、明治37興源寺住職、大正2同寺住職、世寿66歳 [伊久美]	興源寺(562)9世、長久寺(577)法地開山	326c
26	莞翁謹爾	平成10(1998)12・25	再中興、25世長男、同弟子(昭和2)、同法嗣(昭和12)、昭和12住職、世寿81歳 [伊久美]	長久寺(577)2世	326d
27	大浄清智	現住	26世長男、同弟子(昭和40)、同法嗣(昭和48)、平成11住職 [伊久美]	永明寺(566)現住	

13教区	ほふくざん	ていぜんいん	〒	425-0026
552番	保福山	貞善院	住 所	焼津市焼津6丁目11-14
			住 職	木南広峰
開 山 年	延徳2(1490)		草創年	不詳・伝真言宗のお堂
本 尊	十一面観世音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	通山芳釈	永禄9(1566)12・28	林叟院3世・心岳寺開山兆山岱朕嫡嗣	信香院(556)開山	409b
2	光山芳清	天正15(1587)1・22	(諸堂全備、焼津町誌より)	松寿院(廃)開山	409b
3	泰翁春道	慶長16(1611)6・17			409c
4	見室吞牛	元和7(1621)1・1			409d
5	月秋周吞	慶安3(1650)12・26			409e
6	厚顔南敦	寛文3(1663)11・2			409f
7	轉山嶺左	元禄8(1695)6・5			409g
8	裏山魯門	享保12(1727)8・21			409h

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

9	普見柳朝	元文3 (1738)9・10		則心寺(530)14世	409c
10	徳峰龍禪	元文2 (1737)8・17	元禄12・8・15夜東海の海嘯で諸堂流失(当代?)、諸堂再建(焼津町誌より)		
11	福州洞牛	寛保3 (1743)1・26			
12	超宗喝玄	宝暦10(1760)5・28			
13	活翁本全	明和6 (1769)11・5			
14	實道龍真	安永5 (1776)5・6			
15	天室元長	天明4 (1784)3・21			177a
16	松翁徹筠	享和3 (1803)10・25	天明4・8暴風雨で諸堂半壊(当代?)、寛政6諸堂建立(焼津町誌より)		177b
17	活眼辨宗	文政3 (1820)8・8		龍光院12世	177c
18	貴宝章胤	安政3 (1856)10・25		石雲院(607)輪住(安政3)、總善寺(426)20世、大永寺(553)18世	177d
19	活應祖眼	天保13(1842)4・8		慈眼寺(432)前住11	
20	本提瑞光	文久2 (1862)5・25	(梵鐘再鑄・楼閣建立、同上)		177b
21	雄峰瑞英	明治25(1892)12・23			177c
22	大雄清峰	大正7 (1918)3・21	中興 [木南]		177d
23	喜雄英一	昭和40(1965)6・12	再中興、22世弟子、昭和38・5本堂鉄筋二階建再建 [木南]	(当寺再住)	
24	大英博雄	昭和19(1944)2・2	23世弟子 [木南]		
25	悟徹全英	昭和31(1956)11・5	23世弟子 [木南]		
(再住)	(喜雄英一)	(昭和40(1965)6・12)	(山西洞門より)	(当寺23世)	
26	大仙廣郁	平成17(2005)2・24	昭和5・2・28宮崎県出身、大阪府吉祥寺村山廣道弟子、昭和28・10・23兵庫県泉福院住職、昭和42・11・12当寺晋山、当寺で示寂、世寿76歳、法齢61年 [木南]	泉福院(兵庫)7世	128f
27	大岳広峰	現住	23世弟子、平成18・10・29晋山 [木南]	高福寺(534)9世	

13教区	れんぶつざん	だいえいじ	〒	425-0086
553番	蓮佛山	大永寺	住 所	焼津市小土253
			住 職	竹田教道
開山年	慶長2(1597)		草創年	
本尊	釈迦牟尼佛			
開基				
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	閑巢順学	慶長18(1613)1・15		心岳寺(461)6世、清源院開山	409f
2	格州菟逸	元和3 (1617)2・23			
3	桃翁大牛	寛文4 (1664)6・28			
4	子山官孫	宝永3 (1706)7・13	中興		
5	智靈大音	元文2 (1737)3・21			

6	花山良重	享保8 (1723)7・24			
7	透宗倍門	宝暦6 (1756)6・21			
8	大林普峰	寛延3 (1750)11・3			
9	育道麟禪	宝暦6 (1756)5・13		信香院(556)15世	409h 410f
10	郷山定本	天明1 (1781)10・7		永豊寺(555)11世	
11	啓方快門	明和8 (1771)7・1			
12	大寿龍峰				
13	一透無闇	文化5 (1808)12・22			
14	徳巖禪峰	寛政13(1801)2・14 (享和1)			
15	萬林文国	天保2 (1831)4・22			
16	徹関孝本	文久4 (1864)1・22		耕春院(424)13世	
17	徹箭宜透	天保12(1841)1・13			
18	貴宝章胤	安政3 (1856)10・25		石雲院(607)輪住(安政3)、 總善寺(426)20世、貞善院 (552)18世	177d
19	円山国明	11・28		伝心寺11世	
20	天山秀全				
21	賢峰義哲	明治11(1878)7・28		伝心寺13世	
22	大門哲心	大正11(1922)1・17	[杉山]	伝心寺15世、康泰寺(508)17 世	
23	含輝靈犀	大正11(1922)11・18	重興 [萬年]		38b
24	秀道金英	昭和24(1949)12・30	[竹田]	法昌寺(482)2世	38d
25	鳥道善逸	昭和19(1944)8・19	(世寿27歳、山西洞門より) [竹田]		38e
26	大晃昭三	平成15(2003)3・28	再中興 24世弟子 [竹田]	常観寺(570)前住、常元寺 (574)前住、一照寺(576)前住	38g
27	参学教道	現住	26世弟子 [竹田]	常元寺(574)現住、大竜寺 (575)現住、一照寺(576)現住	

13教区	そうけいざん	こうしょういん	〒	425-0068
554番	曹溪山	興聖院	住 所	焼津市中新田1036-1
			住 職	青野俊孝
開 山 年	天和2(1682)		草創年	元和1(1615)浄土宗正定寺末
本 尊	阿弥陀如来			
開 基	本誓祖三大徳			
旧 名 称	松見山帰命寺(明治26(1893)2・13まで)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院 (425)一成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	本誓祖三 大徳	(元和3 (1617)8・13)	(浄土宗、成道寺記録より)		
草創開山	円輪長頓	正徳1 (1711)9・26	勸請、山叟梁岱に師事、世寿 73歳	石雲院(607)輪住(天和2)、 成道寺(551)7世	

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

法地開山	慧鑑大能	明治21(1888)3・23	勸請、大応智乗に師事、世寿78歳 [祖父江]	成道寺(551)20世、一乗寺(126)18世、延命寺(191)5世、泉龍寺(558)3世、興源寺(562)2世、石雲院(607)独住4世、香積寺(愛知658)29世	325b 326a
2	天外良淳	明治14(1881)7・3	勸請、法地開山に師事、世寿60歳 [古川]	石雲院(607)輪住(明治7)、洞慶院(34)輪住(安政年間)、成道寺(551)21世、延命寺(191)8世、泉龍寺(558)4世、興源寺(562)3世、石雲院(607)独住1世	326a
3	大乘道悟	明治41(1908)3・1	勸請、2世に師事、世寿66歳 [白川]	成道寺(551)22世、曹源寺(76)22世、宝珠院(78宝月院)伝法開山、養福寺(79)3世、延命寺(191)14世、盤石寺(528)28世、泉龍寺(558)5世、興源寺(562)4世、指月院(廃)2世	326b
4	大津禅梁	明治28(1895)1・29	勸請		
5	徹乗友禪	明治36(1903)11・29	(法地昇等(明治14・3)、成道寺記録より)、明治14・3から明治36・11まで在住、(明治25・2・16梅林院末竜泉寺併合、明治26・2・13山寺号改称、成道寺記録より) [小池]	泉龍寺(558)7世	
6	祖淳孝山	昭和25(1950)4・2	盤石寺29世至山朴淳弟子、明治38・5から昭和14・10まで在住、盤石寺で示寂、世寿71歳 [青野]	盤石寺(528)31世、長徳寺法地開山?	326c
(7)	至道孝順		6世(盤石寺住職)弟子、昭和15・8から昭和18・10まで在住、昭和62頃除籍 [青野]		326d
7	白巖俊道	東堂	愛知県西加茂郡保見村殿貝津深見甚八二男、愛知県瑞泉寺32世篤山秀孝弟子、6世法嗣、昭和26・3・1晋山、昭和42開山堂竣工、昭和47本堂・庫裡竣工、平成4・11・5退院、世寿95歳、法齢82年 [青野]		326e
8	大岳俊孝	現住	7世弟子、平成4・11・5晋山 [青野]		

13教区	ふくでん(た)さん	えいほうじ	〒	425-0036
555番	福田山	永豊寺	住 所	焼津市西小川3丁目6-5
			住 職	近藤千秋
開 山 年	天正9(1581)		草創年	(天文年間(1532-1555)以前・臨濟宗、駿河記・駿河志料より)
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基	田中城主			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一洞善院(628)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	哉翁宋咄	天正17(1589)12・26	勅賜天龍圓鑑禪師	石雲院(607)輪住(天正11)、林叟院(388)6世、元長寺(7)開山、一乗寺(126)開山、法運寺(571)開山、洞善院(628)開山、玖延寺(1227)2世	409d
2	大宜祇徹	慶安2(1649)5・7		洞善院(628)2世、医王寺開山、養源寺開山	
3	高天龍石	慶長11(1606)3・17		洞善院(628)3世	
4	三陽能哲	寛永20(1643)8・20		(安泰寺(557)開山)	
5	鷲傳本鷲	万治2(1659)1・18	中興、(諸堂改修、小川村誌より)		
6	澤山隆恩	延宝2(1674)10・28			
7	機外探玄	正徳2(1712)10・3		(江月院(579)開山)	
8	俊翁探英	享保14(1729)11・9			
9	統垂探州	元文2(1737)7・14			
10	蘆江岳州	明和8(1771)8・10			
11	郷山定本	天明1(1781)10・7		大永寺(553)10世	
12	定隠龍京				
13	大轉蓮乗	天保3(1832)11・9			
14	祖關泰道	天保3(1832)10・3	再中興、(文化14・9本堂・庫裡再建、同上)	安泰寺(557)開山	
15	賢應泰國	明治15(1882)10・25	(世寿80歳、山西洞門より)	安泰寺(557)2世	
16	賢童國友	明治37(1904)7・10			
17	貫底圓一	明治20(1887)1・26			
18	一乗大圓	大正7(1918)9・23			
19	祖岳貫山	昭和38(1963)9・11	重興、大正13本堂大修繕[赤木]	江月院(579)開山	429c
20	洞岳道貫	平成6(1994)11・19	[赤木]		429d
21	祖岳孝道		[赤木]		
22	大洞千秋	現住	[近藤]		

13教区	ちょうこくざん	しんこういん	〒	425-0033
556番	長谷山	信香院	住 所	焼津市小川3481-7
			住 職	高田路久
開 山 年	不詳(永正14(1517)の説あり)			草創年
本 尊	十一面観世音菩薩			
開 基	長谷院殿前紀州守林叟信香大居士(長谷川紀伊守正長、元亀3(1572)12・22戦死)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	通山芳釈	永禄9(1566)12・29		貞善院(552)開山	409b
2	大淋法慶	天正8(1580)4・18		石雲院(607)輪住(元亀3)、昌泉院(561)開山、藏珠院(564)開山、福昌院(573)開山	409b 410a
3	不岩芳存	天正19(1591)9・14		不岩院(565)開山	410a

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

4	明天嶺察	寛永7 (1630)1・5		石雲院(607)輪住(慶長13)、林叟院(388)10世、十輪寺(391)2世、全珠院(400)開山	409h 410b
5	立山是健	慶長17(1612)10・7		石雲院(607)輪住(慶長17)	410c
6	明安寿察	明暦2 (1656)1・1	(中興、小川村誌より)、慶安1・7朱印拝戴		410d
7	峰谷春雄	寛文11(1671)10・26			410e
8	盛受茂学	天和2 (1682)4・15			410f
9	益峰巖州	天和2 (1682)5・9			410g
10	物外嶽応	寛永3 (1626)3・10			410h
11	通巖学園	享保6 (1721)3・29			410b
12	悦堂良観	享保14(1729)1・11		徧照寺(430)6世	410c
13	密定快禅	天文5 (1536)7・15			410d
14	泰州古泉	安永5 (1776)1・24		心岳寺(461)15世、正泉寺(464)3世	410e 409g
15	育道麟禅	宝暦6 (1756)5・12		大永寺(553)9世	410f 409h
16	仏山泰道	寛政5 (1793)8・4	(諸堂建立、同上)		409c 410g
17	笠翁大心	文化8 (1811)4・28			409d 410h
18	然亮湛湛	天保8 (1837)11・21		心岳寺(461)21世、正泉寺(464)5世	410b
19	天寿台全	嘉永6 (1853)9・7		石雲院(607)輪住(文政8)、心岳寺(461)22世、正泉寺(464)6世	410c 636d
20	応先実秀	嘉永7 (1854)6・7		心岳寺(461)23世、正泉寺(464)7世、富洞院22世	410d 636c
21	大乘旭禅	文久3 (1863)11・7		石雲院(607)輪住(文久1)、静居寺(493)24世、伝心寺9世	410e 411c 412a
22	雪堂祖桂	慶應3 (1867)3・25		盤脚院(421)15世	410f
23	悟山鉄道	万延3 (1862)1・6 (文久2)		盤脚院(421)17世	410g
24	秀全玉剛	明治11(1878)3・9	[高岸]	正泉寺(464)8世、富洞院25世	410h 636d
25	興宗禅隆	明治31(1898)10・9	[高田]	最林寺(422)22世、昌泉院(561)法地開山	409e 410b
26	玄隆雄道	明治30(1897)8・2	[黒石]	昌泉院(561)3世	410c
27	泰順恵謙	明治31(1898)3・2	[鈴木]	最林寺(422)24世、灌溪寺(433)法地開山、昌泉院(561)4世	409g 410d
28	志道泰賢	昭和29(1954)9・5	[前川]	最林寺(422)25・27世、灌溪寺(433)2世	409h 410e
29	徳雄堅高	昭和29(1954)3・26	静岡市茶町出身、昭和12本堂再建 [高田]	蔵珠院(564)法地開山	410f
30	堅堂龍雄	平成11(1999)9・15	森町自得院出身、昭和25曉幼稚園創設、昭和29晋山、昭和36鐘楼堂再建、昭和42庫裡改築、昭和55開山・位牌堂改築、平成4庫裡・客殿再建、平成6退院 [高田]		410g
31	堅龍路久	現住	30世弟子、平成1曉幼稚園園舎改築、平成6・5・27晋山、平成19本堂・位牌堂耐震工事、平成19曉幼稚園園舎再改築 [高田]	不岩院(565)現住、福昌院(573)現住	

13教区		あんたいじ	〒	425-0032
557番	(瑠璃山)	安泰寺	住 所	焼津市鰯ヶ島143
			住 職	山田恒敏
開 山 年	(寛永4(1627)、焼津町誌より)		草創年	
本 尊				
開 基	(城之腰村佐右エ門母ヤス、焼津町誌より)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―洞善院(628)―永豊寺(555)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
(開山)	(三陽能哲)		(焼津町誌より)	永豊寺(555)4世	
開山	祖關泰道	天保3 (1832)10・3	(勸請(法地開闢時)、焼津町誌より)	永豊寺(555)14世	
2	賢應泰國	明治15(1882)10・25		永豊寺(555)15世	
3					
4	天嶺靈苗	天保6 (1835)9・19			
5	靈嶺玄孝	明治19(1886)10・2	(法地昇等(明治16・3・26)、本堂・庫裡再建、同上)		
6	大覚宗音	明治35(1902)8・4			
7					
8					
9	雄山千英	昭和15(1940)8・12	(明治45・2諸堂再建、同上) [鈴木]		
10	穆雍玄英	昭和41(1966)2・14			
11	雄山鉄英	昭和52(1977)2・23	[小島]	永源寺(206)34世	177e
12	大融恒敏	現住	盤脚院山田義道弟子(昭和39・9・17)、平成10・11晋山 [山田]		

13教区	ちれんざん	せんりゅうじ	〒	425-0052
558番	池蓮山	泉龍寺	住 所	焼津市田尻321
			住 職	長尾明孝
開 山 年	寛永5(1628)		草創年	(旧清嚴堂、和田村誌より)
本 尊	延命地藏菩薩			
開 基	群雄順逸			
旧 名 称	光正庵(開創時)、(砂原山、駿河記・新風土記・駿河志料・和田村誌より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―梅林院(390)―常楽院(425)―成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	群雄順逸 (泉龍順逸)	(元禄7(1694)3・16)	(寛永5伽藍建立、後に開山を勧請、和田村誌・成道寺記録より)		
開山	盛巖舜隆	寛永14(1637)7・15		成道寺(551)4世、光西寺(569)開山	

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

法地開山	大応智乗	天保6 (1835)3・23	勧請、2世・3世の師、世寿69歳	成道寺(551)18世、延命寺(191)2世、盤石寺(528)22世、興源寺(562)開山	325h
2	大宝天産	文政10(1827)11・18	勧請、3世の法兄、世寿31歳	延命寺(191)4世	
3	慧鑑大能	明治21(1888)3・23	勧請、4世の師、世寿78歳 [祖父江]	成道寺(551)20世、一乗寺(126)18世、延命寺(191)5世、興聖院(554)法地開山、興源寺(562)2世、石雲院(607)独住4世、香積寺(愛知658)29世	325b 326a
4	天外良淳	明治14(1881)7・3	勧請、5世の師、世寿59歳 [古川]	石雲院(607)輪住(明治7)、洞慶院(34)輪住(安政年間)、成道寺(551)21世、延命寺(191)8世、興聖院(554)2世、興源寺(562)3世、石雲院(607)独住1世	326a
5	大乘道悟	明治41(1908)3・1	勧請、6世の師、世寿66歳 [白川]	成道寺(551)22世、曹源寺(76)22世、宝珠院(78宝月院)伝法開山、養福寺(79)3世、延命寺(191)14世、盤石寺(528)28世、興聖院(554)3世、興源寺(562)4世、指月院(廃)2世	326b
	(祖宝大榮)	(明治19(1886)4)	(法地昇等(明治14・4・8)、和田村誌・成道寺記録より) [池田]		
6	大洞得仙	大正8 (1919)9・2	法地初住、世寿64歳 [大野]	成道寺(551)23世、曹源寺(76)23世、宝珠院(78宝月院)2世、養福寺(79)4世、指月院(廃)3世	326c
7	徹乗友禪	明治36(1903)11・29		興聖院(554)5世	
8	叢山大林	大正11(1922)7・21			
9	義山良演	昭和13(1938)2・26	世寿65歳 [青木]	法幢寺(97)26世、林叟院(388)35世	88d
10	大誠佛心	昭和15(1940)10・2	愛知県海部郡出身、6世弟子、世寿69歳 [長尾]		326e
11	大忍一雄 (仙)	平成11(1999)6・16	勧請(12世により)、10世長男、世寿87歳		
12	大嶽覚正	昭和54(1979)10・10	掛川市真言宗顕光寺出身、大嶽一明二男、10世弟子(昭和13)、昭和46・9位牌堂新築、世寿65歳 [長尾]		326f
13	大栄明孝	現住	12世弟子、昭和55・10・10晋山、昭和58・2庫裡増改築、昭和60・9本堂再建、平成14・5位牌堂再建 [長尾]	福昌院	326g

13教区	こふうざん	えんせんじ	〒	425-0072
559番	虎風山	圓泉寺	住 所	焼津市大住484-1
			住 職	小川道雄
開 山 年	元亀2(1571)11・13			草創年
本 尊	十一面観音			
開 基	長嶺春性和尚			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	長嶺春性				
開山	悦州準恰			林叟院(388)11世、新豊院(214)3世、増福寺(廢)開山	
法地開山	祖海徹宗		(勸請、林叟院記録より)	總持寺普蔵院輪住・大本山總持寺兼務(弘化4)、石雲院(607)輪住(天保14)、林叟院(388)26世、法幢寺(97)15世、長福寺(395)2世	88b 1041d
2	義門良孝		開闢、(勸請、林叟院記録より) [池田]	林叟院(388)28世、光鏡院(90)17世、松壽院(96)前住、法幢寺(97)19世、源昌寺(434)10世、光月院12世、願成寺2世	88b
3	興庵恵宗		(勸請、林叟院記録より) [青島]	林叟院(388)30世、光泰寺(389)18世、長福寺(395)3世、源昌寺(434)12世、石雲院(607)独住5世、報恩寺2世、岩昌寺2世	88b
4	大演良雄	大正9 (1920)3・13	(勸請、林叟院記録より) [中川]	林叟院(388)32世、大仙寺(68)開山、光鏡院(90)18世、松壽院(96)法地開山、長福寺(395)4世、全珠院(400)開闢	88c
5	大賢良温	明治26(1893)2・16			
6	義範良堂		[岡田]	光鐘院(90)19世、松壽院(96)2世、法幢寺(97)24世	88d
7	良範純孝	昭和7 (1932)12・22			
8	穆良孝潤				
9	孝山達道	昭和58(1983)3・11	中興、名古屋市西区出身、洞雲寺28世達元弟子、洞雲寺へ転住、世寿84歳、法齢71年 [小川]	洞雲寺(459)30世、延命寺(466)7世	411e
10	大心道雄	現住	9世弟子、同法嗣、昭和62本堂再建、平成2・4・30晋山式、平成13庫裡再建 [小川]		

13教区	ちゅうこんざん	たいぜんじ	〒	425-0061
560番	中根山	泰善寺	住 所	焼津市中根388
			住 職	加藤俊隆
開 山 年	延宝2(1674)		草創年	
本 尊	延命地藏願王菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—常楽院(425)—成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	活宗問禪			石雲院(607)輪住(享保15)、成道寺(551)10世	
2	貞山頼利	貞享2 (1685)	開創(延宝2)		
	圓山牛頓	元禄2 (1689)5・8			
	頑山永愚	享保20(1735)11			
	祖峯益禪	寛保3 (1743)9・10			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

	實門禪參	天明3 (1783)4・16			
	大翁活禪	文化11(1814)1・15	中興、永平第一座		
	蘭山鉄翁		文久2住職?		
	大翁哲玄		文久4?住職?		
	嶺登		明治2住職?		
	嶺登		(上記と同一か?)、隠居? [山名]		
	嶺洞		明治7住職?		
	椎屋嶺童	明治9 (1876)6・23			
	活山曇龍	明治15(1882)12・23		成因寺(585)20世、積雲院19世	412g 462d
	曇龍		(上記と同一か?)、隠居? [石川]		
	祖鑑芳禪	明治19(1886)4・23			
	祖戒愚宗	明治35(1902)5・21			
法地開山	祖嶽天縱	明治37(1904)8・29	勸請 [岡村]	成道寺(551)24世、龍雲院(128)21世、常楽院(425)24世、興源寺(562)8世	326b
2	喚三俊應	大正13(1924)10・6	勸請 [加藤]		141d
3	玉含俊英	昭和31(1956)12・1	(法地昇等(大正15)、成道寺記録より)、中興 [加藤]		141e
4	静関俊隆	現住	[加藤]		141f

13教区	にちりんざん	しょうせんいん	〒	425-0028
561番	日輪山	昌泉院	住 所	焼津市駅北5丁目10-9
			住 職	小澤昭幸
開山年	天文年間(1532-1555)			草創年
本尊	聖観世音菩薩			
開基	叡翁桐林(乙卯(天正7(1579)?)6・8示寂)			
旧名称	日林山珠泉院(開創時)			
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一信香院(556)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	大淋法慶	天正8 (1580)4・16	勸請	石雲院(607)輪住(元龜3)、信香院(556)2世、藏珠院(564)開山、福昌院(573)開山	409b 410a
開基	叡翁桐林	天正7 (1579)?6・8	修善寺出身、天文年中に此地に來り村中一同帰依して伽藍一字を建立、信香院2世大淋法慶を開山に勸請		
	(永林?)		(慶長4・9当時住職、焼津町誌より)		
法地開山	興宗禪隆	明治31(1898)10・9	勸請(法地開闢時) [高田]	信香院(556)25世、最林寺(422)22世	409e 410b
2	徳明智宣	明治18(1885)7・22		最林寺(422)23世	409f
3	玄隆雄道	明治30(1897)8・2	[黒石]	信香院(556)26世	410c
4	泰順恵謙	明治31(1898)3・2	[鈴木]	信香院(556)27世、最林寺(422)24世、灌溪寺(433)法地開山	409g 410d

5	祥山鳳瑞	万延1 (1860)6・9		延命寺(191)6世、大学寺(529)16世、長泉寺(567)前住?	409h
6	瑞岸祥竜	明治27(1894)7・9	法地開闢・初住(明治14・4・2、檀中協議による)、信香院25世興宗禪隆を法地開闢始祖に勧請 [下條]	石雲院(607)輪住(文久2)、大学寺(529)17世	409c
7	永運國紹	昭和11(1936)2・25	志太郡前島村近藤辰蔵四男、浄心院20世完翁順國弟子 [小澤]		409d
8	永順好雄	平成1 (1989)5・12	7世弟子、在住50年、世寿88歳 [小澤]		409e
9	雄岳昭幸	現住	8世弟子、平成3・4・26晋山 [小澤]		409f

13教区	ほうきょうざん	こうげんじ	〒	425-0064
562番	宝鏡山	興源寺	住 所	焼津市三和68
			住 職	青木一成
開 山 年			草創年	
本 尊	薬師瑠璃光如来			
開 基	解庵春慧			
旧 名 称	久遠山成道寺(天正19(1591)本寺と山寺号交換)、(法鏡山、駿河記・新風土記・駿河志料より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院(425)一成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
(開山)	(超翁禪越)		(成道寺記録より)	成道寺(551)2世、栖源寺(廃)開山	437e
開基	解庵春慧	(天文19(1550)3・18)	(同上)	石雲院(607)輪住(天正16)、長泉寺(567)開山、東春院(廃)開山	
開山	大應智乗	天保6 (1835)3・21	在住6年	成道寺(551)18世、延命寺(191)2世、盤石寺(528)22世、泉龍寺(558)法地開山	325h
2	慧鑑大能	明治21(1888)3・23	勧請、愛知県丹羽郡岩倉羽根村祖父江久左エ門二男、天保6富士郡加島村延命寺住職、嘉永2・3成道寺住職、万延1・9長久寺に退隠、明治3・9成道寺再住、明治14・3興源寺・泉竜寺・帰命寺法地開闢に際して勧請 [祖父江]	成道寺(551)20世、一乗寺(126)18世、延命寺(191)5世、興聖院(554)法地開山、泉龍寺(558)3世、石雲院(607)独住4世、香積寺(愛知658)29世	325b 326a
3	天外良淳	明治14(1881)7・5	勧請、越後苅羽郡二田村古川文左エ門二男、長命寺良悟弟子、嘉永3富士郡加島村延命寺住職安政年間洞慶院輪住、文久1成道寺住職 [古川]	石雲院(607)輪住(明治7)、洞慶院(34)輪住(安政年間)、成道寺(551)21世、延命寺(191)8世、興聖院(554)2世、泉龍寺(558)4世、石雲院(607)独住1世	326a
4	大乘道悟	明治41(1908)3・1	勧請、越後苅羽郡二田村白川伝兵エ門二男、諸堂建立で功績大、明治9成道寺住職 [白川]	成道寺(551)22世、曹源寺(76)22世、宝珠院(78宝月院)伝法開山、養福寺(79)3世、延命寺(191)14世、盤石寺(528)28世、興聖院(554)3世、泉龍寺(558)5世、指月院(廃)2世	326b

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

5	大雲意海		(法地昇等(明治14・3)、成道寺記録より) [鈴木]		
6	獲定有隣	明治22(1889)6・18	勸請		
7	喚來遠音	天保8 (1837)8・16	勸請		
8	祖嶽天縱	明治37(1904)8・29	嘉永6・3・8志太郡高田村岡村兼吉家出身、3世弟子(慶応3)、明治13・3高田村常楽院住職、明治16・11当寺住職 [岡村]	成道寺(551)24世、龍雲院(128)21世、常楽院(425)24世、泰善寺(560)法地開山	326b
9	對壑仰山	昭和12(1937)10・7	明治5・10・8生まれ、志太郡稲葉村宮原伊久美幸助二男、3世弟子、明治37住職、大正2成道寺住職、昭和6当寺本堂再建 [伊久美]	成道寺(551)25世、長久寺(577)法地開山	326c
10	大馨棊仙	昭和33(1958)5・13	明治28・1・15生まれ、安倍郡美和村中之郷青木家長男、成道寺23世得仙弟子(明治41・4・8)、大正4・4・26から昭和4・4・17まで大仙寺住職、昭和4・5から昭和12・5まで慈慶庵住職、昭和12・5・8当寺住職 [青木]	大仙寺(68)6世、慈慶庵	326e
11	大忍義光	東堂	10世二男、磐田郡袖浦村出身、昭和19得度、昭和32住職、昭和50・12庫裡再建、平成1・4晋山式、平成3・5位牌堂開山堂再建、平成5・5墓地造成、平成11・10客殿新築、平成18・11・24退院 [青木]		326f
12	一成	現住	[青木]		

13教区	ばいりんざん	そうさんじ	〒	426-0044
563番	棊林山	宗参寺	住 所	藤枝市大東町135
			住 職	荒見一男
開 山 年	寛永13(1636)		草創年	
本 尊	葉師如来			
開 基				
旧 名 称	(梅林山、駿河記・新風土記・駿河志料より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一洞雲寺(459)一医王寺(609)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	年州吞壽	寛永13(1636)5		石雲院(607)輪住(元和3)、医王寺(609)6世、法林寺開山、養徳寺開山	410e
前住1	知源謙宗	享保10(1725)7			
前住2	一山可頼	享保20(1735)1	諸堂建立、当寺で示寂		
前住3	寶山恵鏡	天明2 (1782)7	当寺で示寂		
前住4	一鏡源朝	享和3 (1803)10	当寺で示寂		
前住5	丁山鏡童	文化7 (1810)6			
前住6	長安永昌		文久2過去帳整理		
前住7	義天		明治7本堂再建		
前住8	祖岳董賢				

2	悟庵宗覺	明治3 (1870)11	法地開闢、(勸請(法地開闢時)、大洲村誌より)	石雲院(607)輪住(慶応3)、医王寺(609)18世、大泉院19世	410d
3	梵谷悦音	明治21(1888)7	[大井]	医王寺(609)19世	410e
4	賢宗雄道	大正12(1923)10	[鈴木]	医王寺(609)20世	410b
5	佛心順應	明治15(1882)12		恵日寺(愛知303)20世、般若寺(同319)9世	746c
6	大應道仙	弘化4 (1847)3		般若寺(愛知319)8世	
7	開印喜運	弘化4 (1847)8		石雲院(607)輪住(天保9)、萬松院(394)19世	
8	孝順祖道	明治23(1890)2	(法地昇等(明治11・12・9)、大洲村誌より)、法地初住、当寺で示寂 [鈴木]		
9	恵學看禪	大正12(1923)11	[三浦]	萬松院(394)22世	747e
10	覺圓西天	昭和6 (1931)4	当寺で示寂 [中村]		
11	法覺繁道	昭和56(1981)5・24	島田市金谷町出身、荒見茂林二男、萬松院23世三浦通天弟子、昭和45庫裡建立、昭和53本堂改修、当寺で示寂、世寿74歳、法齡57年 [荒見]		747g
12	玄道一男	現住	11世弟子、昭和56・10・9晋山、墓地・駐車場整備、庫裡増築、平成10本堂・会館建立 [荒見]		

13教区	せきしんざん	ぞうしゅういん	〒	425-0041
564番	石津山	蔵珠院	住 所	焼津市石津1097
			住 職	杉山悦雄
開 山 年	天正8(1580)4・18		草創年	永禄3(1560)真言宗
本 尊	葉師如来			
開 基	名翼源有(永禄3(1560)5・15示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一信香院(556)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大淋法慶	天正8 (1580)4・18	(勸請、小川村誌より)	石雲院(607)輪住(元亀3)、信香院(556)2世、昌泉院(561)開山、福昌院(573)開山	409b 410a
1	名翼源有	永禄3 (1560)5・15	開基、(真言宗廃寺跡に当寺建立・田地寄進、同上)		
2	貴山瑞富	天正11(1583)1・29			
3	實岨真公	慶長19(1614)9・27			
4	清浦泉公	寛永18(1641)1・6			
5	法山闇説	寛文18(1678)1・6 (延宝6)			
6	葉耳沢徹	元禄10(1697)4・21			
7	不立恵蜜	享保8 (1723)3・29	(中興、同上)、元禄12・8・15 大津波襲来建物大破(当代?)、本堂再建		
8	圓澄智潭	宝暦3 (1753)12・21			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

9	仙岳玄麟	宝暦3 (1753)11・28			
10	忍州沢山				
11	玉免弥参	安永6 (1777)6・30			
12	白應寂玄	寛政1 (1789)3・16			
13	徳翁大高	寛政8 (1796)8・16			
14	見外哲道	文政1 (1818)10・15			
15	大透萬如	文政2 (1819)10・3			
16	松岩本栄	天保14(1843)8・13			
	(保順)		(大正年間住職、同上) [祖父江]	南叟寺(64)36世、太興寺(愛知305)8世	746d
17	雄山亮道	昭和40(1965)11・16			
法地開山	徳雄堅高	昭和29(1954)3・26	[高田]	信香院(556)29世	410f
2	眞鑑悦雄	現住	法地昇等(平成1)、平成17・5・1区画整理事業で境内・墓地移転、本堂・庫裡・客殿再建[杉山]		606h

13教区	せきようざん	ふがいん	〒	425-0041
565番	石陽山	不岩院	住 所	焼津市石津1201-3
			住 職	高田路久
開 山 年	天正8(1580)		草創年	不詳
本 尊	十一面観世音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一信香院(556)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	不岩芳存	天正19(1591)9・14		信香院(556)3世	410a
(3)	(石陽)		(中興、寛永5本尊再建・田地寄進・山号制定、小川町誌より)		
現住	堅龍路久	現住	[高田]	信香院(556)31世、福昌院(573)現住	

13教区	てんせいざん (てんりゅうざん)	えいめいじ	〒	425-0055
566番	天星山(天竜山)	永明寺	住 所	焼津市道原42
			住 職	伊久美清智
開 山 年	延宝3(1675)		草創年	
本 尊	釈迦如来			
開 基	永明播公			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院(425)一成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	山叟梁岱	延宝3 (1675)11・2	駿河瀬戸染飯町出身、世寿69歳	成道寺(551)6世、洞福寺(572)開山、長久寺(577)開山、長源寺(廃)	
開基	永明播公	(寛永5 (1628)1・24)	(成道寺記録より)		
前住	華珪菊公	明暦1 (1655)11・20			
前住	日山噉公	延宝1 (1673)9・30		光西寺(569)前住	
前住	清健永國	貞享4 (1687)4・3			
前住	翻龍見海	寛永6 (1629)11・18			
前住	孤岳永穉	享保4 (1719)3・4			
前住	聴法観悦	宝暦2 (1752)1・1			
前住	天溪蕃龍	天明3 (1783)11・28			
前住	活海達玄	寛政10(1798)8・1			
前住	鐵山密銀	文政6 (1823)5・9			
前住	喝參蜜音	嘉永3 (1850)10・6			
前住	祖印昭宗	明治16(1883)7・2	下野欄本村本光寺徒弟、世寿75歳		
前住	心月榮泉	明治18(1885)10・1			
前住	全鳳大光	明治40(1907)5・22			
前住	大智慧鏡	昭和24(1949)3・5	世寿62歳		
前住	岩水仙外	昭和48(1973)1・12	[伊藤]		326f
現住	大乘清智	現住	成道寺26世莞翁謹爾弟子、昭和54住職、平成3晋山[伊久美]	成道寺(551)27世	

13教区	こうたくざん	ちょうせんじ	〒	425-0066
567番	広沢山	長泉寺	住 所	焼津市大島1071
			住 職	
開 山 年	文明4(1472)		草創年	
本 尊	釈迦如来			
開 基	不応鉄伝(元和3(1617)8・20示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院(425)一成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	解庵春慧	天正19(1591)3・18		石雲院(607)輪住(天正16)、成道寺(551)3世、興源寺(562)開基、東春院(廃)開山	
前住	不応鉄伝	元和3 (1617)8・20	開基		
前住	長山見苗	寛保2 (1742)9・27			
前住	天山益補	寛政4 (1792)2・24			
前住	見流国泉	安永6 (1777)2・18			
前住	大応宗貫	安永8 (1779)9・3			
前住	洞明戒宗	文化3 (1806)5・8			
前住	祥山鳳瑞	天保14(1843)5・10	世寿59歳	延命寺(191)6世?、大学寺(529)16世?、昌泉院(561)5世?	409h?

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

前住	勉之肯旃	明治35(1902)8・31	明治24・9・4越後刈羽根郡和田村東光寺退隠、明治29・5・15当寺住職	東光寺(新潟542)18世	
前住	閑溪大雲				
前住	大間眞山	明治7(1874)11・6			
前住	大安得中	昭和	[梅川]	高德寺9世	252e

13教区	なんかさん	ようしんいん	〒	425-0082
568番	南河山	用心院	住 所	焼津市大村2丁目21-4
			住 職	糸柳格順
開 山 年	天正5(1577)		草創年	(旧秋葉堂、焼津町誌より)
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基				
旧 名 称	(鎮火山、焼津町誌より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一洞雲寺(459)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	信屋聚哉			石雲院(607)輪住(永禄2)、洞雲寺(459)3世、岳叟寺(427)開山、利勝院(428)開山、竜雲寺(470)開山、慈濟寺(廃)開山、用雲寺(廃)開山、峰叟院(廃)開山、竜泉寺(廃)開山、林昌寺3世	410a
(前住)	(連輔)		(大正年間住職、焼津町誌より) [中村]		
現住	格順	現住	[糸柳]		

13教区	げっこうざん	こうさいじ	〒	425-0057
569番	月江山	光西寺	住 所	焼津市下小田185-2
			住 職	青木一成
開 山 年	寛永7(1630)		草創年	
本 尊	阿彌陀如来			
開 基	一潤清公(正保1(1644)11・20示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院(425)一成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	盛巖舜隆	寛永14(1637)7・15		成道寺(551)4世、泉竜寺(558)開山	
開基	一潤清公	正保1(1644)11・20(寛永21)			
前住	日山叡公	延宝1(1673)9・30		永明寺(566)前住	
前住	朝光永叡	延宝5(1677)4・17			
前住	悦山梁喜	正徳5(1715)12・2			

前住	棟鴻梁円	享保13(1728)2・20			
前住	大林猷香	延享1(1744)11・20			
前住	全翁竜禅	宝暦6(1756)8・12			
前住	正研円宗	宝暦12(1762)3・12			
前住	祖晁察宗	天明2(1782)9・3			
前住	宝山泰麟	天明3(1783)12・21			
前住	心了祖印	天明7(1787)9・3			
前住	十山梁刹	寛政1(1789)2・8			
前住	覚春眠暁	文政5(1822)4・19			
前住	規方海円	天保11(1840)10・19	以下不明の間あり		
前住	潔山源嶺				
前住	鉄春禅牛	昭和4(1929)10・18			
前住	早雲		昭和4以後当寺住職、梅林院へ移転(世代になし) [加藤]		
前住	英山碩雄	昭和25(1950)7・7	[三輪]	真福寺(442)前住、恵鏡院6世、高德寺18世	251e
前住	大宗	昭和48(1973)2・1	[小出]		
現住	一成	現住	[青木]		

13教区	りゅうげんざん	じょうかんじ	〒	425-0075
570番	柳原山	常観寺	住 所	焼津市西焼津19-4
			住 職	辻田博道
開 山 年	慶長年間(1596-1615)		草創年	
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	儀堂宗威	元和2(1616)1・29		大洞院(1303)輪住(慶長15)、心岳寺(461)7世、法昌寺(482)開山、一照寺(576)開山	409g
前住	(大晃)昭三	平成15(2003)3・28	竹田金英弟子 [竹田]	大永寺(553)26世、常元寺(574)前住、一照寺(576)前住	38g
現住	博道	現住	辻田正苗弟子 [辻田]		

13教区	たいばいさん	ほううんじ	〒	425-0072
571番	太梅山	法運寺	住 所	焼津市大住30
			住 職	鈴木包一
開 山 年	天正年間(1573-1592)		草創年	
本 尊	不動明王			
開 基	仙石清安居士(曾根定次)			
旧 名 称	(松壽山、駿河記・駿河志料より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

寺 史 等					
世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創	大屋受賢	天正1 (1573)2・2 (元龜4)	林叟院4世持転性受弟子、北越耕雲寺住職(世代になし)	林叟院(388)5世	409c
開山	哉翁宋咄	天正17(1589)11・26	勅賜天龍門鑑禪師(永禄2・8・28)、今川氏重臣朝比奈氏出身、俗名朝比奈俊元、大屋受賢弟子	石雲寺(607)輪住(天正11)、林叟院(388)6世、元長寺(7)開山、一乗寺(126)開山、永豊寺(555)開山、洞善院(628)開山、玖延寺(1227)2世	409d
前住	太翁鑑道	平成14(2002)8・12	世寿92歳 [杉山]	瑞應寺(410)4世	606g
現住	牛岳包一	現住	[鈴木]	林叟院(388)38世、寛沢寺(399)12世	474g

13教区	ほでんざん	とうふくじ	〒	425-0066
572番	保田山	洞福寺	住 所	焼津市大島360
			住 職	
開 山 年	正徳1(1711)		草創年	
本 尊	釈迦如来			
開 基	真質来淳			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院(425)一成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	山叟梁岱	延宝3 (1675)11・2	焼津市一色良知氏出身、成道寺7世門輪長頼弟子	成道寺(551)6世、永明寺(566)開山、長久寺(577)開山、長源寺(廃)	
開基	真質来淳	(元禄3 (1690)12・12)	(成道寺記録より)		
前住	心了伝公	元禄6 (1693) 23			
前住	真安林崇	元禄9 (1696)9・29			
前住	雪應屯清	正徳2 (1712)10・30			
前住	別山智伝	寛保1 (1741)11・12			
前住	一透玄了	安永4 (1775)7・14			
前住	徳隠梁鳳	文化3 (1806)10・28			
前住	寿岳賢透	文政1 (1818)8・18			
前住	思学成賢	明治43(1910)9・6			
前住	凡外清人	昭和50(1975)2・2	世寿68歳 [伊藤]		453h

13教区	ぜんそうざん	ふくしょういん	〒	425-0071
573番	禅叟山	福昌院	住 所	焼津市三ヶ名538
			住 職	高田路久
開 山 年	天正3(1575)		草創年	不詳
本 尊	薬師如来			
開 基	不詳			
旧 名 称				
旧所在地				

本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—信香院(556)				
寺 史 等					

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大淋法慶	天正8 (1580)4・18		石雲院(607)輪住(元龜3)、 信香院(556)2世、昌泉院 (561)開山、藏珠院(564)開山	409b 410a
現住	堅龍路久	現住	[高田]	信香院(556)31世、不岩院 (565)現住	

13教区	くぼさん	じょうげんじ	〒	425-0086
574番	久保山	常元寺	住 所	焼津市小土977
			住 職	竹田教道
開 山 年	元和1(1615)			草創年
本 尊	十一面觀世音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—心岳寺(461)—大永寺(553) (旧)大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—心岳寺(461)(明治初期まで)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	蒲山孝順	天正1 (1573)11・29	勧請	心岳寺(461)4世、徧照寺 (430)開山、正泉寺(464)開 山、正岳寺(465)草創開山、 満蔵寺(471)開山、養源院 (474)、大竜寺(575)開山、高 山寺開山、普光寺(廢)開山、 心月寺(廢)開山	409d
前住	(大道)守禪	平成5 (1993)1・16	竹田金英弟子 [神谷]	法昌寺(482)4世、一照寺 (576)前住	38e
前住	大晃昭三	平成15(2003)3・28	竹田金英弟子 [竹田]	大永寺(553)26世、常觀寺 (570)前住、一照寺(576)前住	38g
現住	参学教道	現住	竹田昭三弟子 [竹田]	大永寺(553)27世、大竜寺 (575)現住、一照寺(576)現住	

13教区	こうちさん	だいらゅうじ	〒	425-0077
575番	広池山	大竜寺	住 所	焼津市五ヶ堀之内951
			住 職	竹田教道
開 山 年	寛永2年(1625)			草創年
本 尊	釈迦牟尼仏			
開 基	活山伝竜和尚			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—心岳寺(461)			
寺 史 等				

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	蒲山孝順	天正1 (1573)11・29	勸請	心 岳 寺(461)4世、徧 照 寺(430)開山、正泉寺(464)開山、正岳寺(465)草創開山、満蔵寺(471)開山、養源院(474)、常元寺(574)開山、高山寺開山、普光寺(廃)開山、心月寺(廃)開山	409d
開基	活山伝竜		寛永2当地に一字建立、開山を勧請		
前住	(慈孝)禪明	平成1 (1989)4・1	[吉岡]	心 岳 寺(461)30世、正 泉 寺(464)17世、正岳寺(465)6世	636e
現住	参学教道	現住	竹田昭三弟子 [竹田]	大 永 寺(553)27世、常 元 寺(574)現住、一照寺(576)現住	

13教区	こげつざん	いっしょうじ	〒	425-0076
576番	孤月山	一照寺	住 所	焼津市西焼津10-9
			住 職	竹田教道
開 山 年	慶長15(1610)			草創年
本 尊	大日如来			
開 基				
旧 名 称	(湖月山、駿河記・駿河志料より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一心岳寺(461)一大永寺(553) (旧)大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一心岳寺(461) (明治初期まで)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	儀堂宗威	元和2 (1616)1・29		大洞院(1303)輪住(慶長15)、心 岳 寺(461)7世、法 昌 寺(482)開山、常観寺(570)開山	409g
前住	(大道)守禪	平成5(1993)1・16	竹田金英弟子 [神谷]	法 昌 寺(482)4世、常 元 寺(574)前住	38e
前住	大晃昭三	平成15(2003)3・28	竹田金英弟子 [竹田]	大 永 寺(553)26世、常 観 寺(570)前住、常元寺(574)前住	38g
現住	参学教道	現住	竹田昭三弟子 [竹田]	大 永 寺(553)27世、常 元 寺(574)現住、大竜寺(575)現住	

13教区	えんつうざん	ちょうきゅうじ	〒	425-0051
577番	円通山	長久寺	住 所	焼津市田尻北342
			住 職	武藤大喜
開 山 年	(正保年間(1644-1648)、和田村誌より)			草創年
本 尊	聖観音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院(425)一成道寺(551)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	山叟梁岱	享保20(1735)10・6		成道寺(551)6世、永明寺(566)開山、洞福寺(572)開山、長源寺(廃)	
1	喜翁悦公	申 10・12	初住、(当寺創建(正保年間)、承応3開山勧請し成道寺末となる、和田村誌より)		
2	縦應悦公	巳 1・14			
3	諸山蓮序	辰 4・25			
4	十山良州	寅 2・8			
5	監應嚴察	享保16(1731)11・14			
6	俊猊嚴良	宝暦1(1751)2・7 (寛延4)	(延享3堂宇再建、同上)		
7	泰山周道	宝暦10(1760)1・26			
8	彼石節山	享和2(1802)10・13			
9	法山鉄眼	文政3(1820)11・15			
10	祖關忍宗	天保15(1844)1・20			
(13)	(照宗)		(安政地震で大破した堂宇修理、和田村誌より)		
11	鶴翁得随	大正9(1920)10・22		当寺3世	
12	真諦光彦	昭和45(1970)5・29	[加藤]	当寺4世	928c?
13	安道大喜	現住	佐賀県出身、昭和31・4晋山式、昭和45・11入寺 [武藤]	当寺5世	67c
14	玉峰英明	平成6(1994)12・27	13世弟子、世寿38歳	当寺6世	
法地開山	對壑仰山		法地開闢 [伊久美]	成道寺(551)25世、興源寺(562)9世	326c
2	莞翁謹爾	平成10(1998)12・25	[伊久美]	成道寺(551)26世	326d
3	鶴翁得随	大正9(1920)10・22		当寺(前)11世	
4	真諦光彦	昭和45(1970)5・29	[加藤]	当寺(前)12世	928c
5	安道大喜	現住	[武藤]	当寺(前)13世	67c
6	玉峰英明	平成6(1994)12・27	5世弟子、世寿38歳	当寺(前)14世	

13教区	ちこうさん	りんせんじ	〒	425-0091
578番	池口山	林泉寺	住 所	焼津市八楠310
			住 職	土井裕道
開山年	天文12(1543)		草創年	
本 尊	釋迦牟尼佛			
開 基	伊東家			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—最乗寺(神奈川374)—最勝院(298)—広嚴院(山梨111)—天寧寺(東京309)—楞嚴院(127)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	田夫慶文			洞慶院(34)6世、長光寺(61)開山、智満寺(651)開山、増福寺(廃)開山	383d
(開山)	(道白)		(当寺に居住し楞嚴院末になる、焼津町誌より)	楞嚴院(127)開山	614b
前住	久峰慶昌			長光寺(61)2世	383e 506a

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

前住	花巖泰春			長光寺(61)3世	506a
前住	東林永紹			長光寺(61)14世	
前住	宗外喆紹			長光寺(61)15世、福寿院(71)鑑寺	
前住	禅海恵純			長光寺(61)16世	
前住	幾就峰成			長光寺(61)17世	
前住	玉雲大瑞			長光寺(61)25世	
前住	大宗龍覺			長光寺(61)26世	
前住	佛覺禅道			長光寺(61)30世	
前住	佛山瑞明		[増田]	法蔵寺(8)17世、洞慶院(34)独住4世、長光寺(61)31世、龍泉寺(92)3世、(長昌寺(536)(4世?))	503b
法地開山	佛海道縁	昭和24(1949)8・18	世寿81歳	楞嚴院(127)26世、冷泉寺(130)5世、教福寺(134)2世、玉泉寺(143)2世	
2	篤巖良厚	昭和17(1942)5・26	世寿86歳 [青山]	長光寺(61)32世、福寿院(71)法地開山、鳳林寺(93)2世	463d
3	恵目良欽	昭和44(1969)3・23	開闢初住・中興、世寿89歳 [青山]	長光寺(61)33世	
4	大義裕道	現住	昭和34・5・13住職、昭和47・10・6晋山、平成17・11・6本堂・開山堂・庫裡・客殿落慶式 [土井]		477g

13教区	さいぐうさん	こうげついん	〒	425-0085
579番	西宮山	江月院	住 所	焼津市塩津182
			住 職	北上明宏
開 山 年	万治3(1660)		草創年	
本 尊	子安観世音菩薩			
開 基	明山頓察大和尚			
旧 名 称				
旧所在地	(焼津市塩津8、明治21鉄道工事のため移転、焼津町誌より)			
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―洞善院(628)―永豊寺(555)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	明山頓察		当寺創建(万治3)		
(開山)	(機外探玄)		(山西洞門より)	永豊寺(555)7世	
開山	祖岳貫山	昭和38(1963)9・11	[赤木]	永豊寺(555)19世	429c
2	梅巖正文	昭和37(1962)12・20			
3	本性寶源	平成15(2003)2・4	中興 [北上]	平等寺(新潟125)23世	650c
4	明宏	現住	[北上]		

13教区	ふしょうざん	きゅうしょうじ	〒	425-0045
580番	普照山	久昌寺	住 所	焼津市祢宜島77-2
			住 職	
開 山 年	延宝2(1674)		草創年	
本 尊	千手観音菩薩			

開基	郷応宅公
旧名称	
旧所在地	
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—常楽院(425)—成道寺(551)
寺史等	

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	亨山崑鼎	元禄13(1700)6・22	焼津市一色良知氏出身、成道寺7世門輪長頼弟子、世寿40歳	成道寺(551)8世	
開基	郷応宅公				
前住	蘭溪存洲	元禄12(1699)7・17			
前住	行歩蓮周	元禄18(1705)1・7(宝永2)			
前住	三應天州	寛保2(1742)9・27			
前住	雲外一峰	天明2(1782)9・19			
前住	長隨寛峯	文化8(1811)			
(前住)	(浄山)		(成道寺記録より) [田中]		

13教区	ほうじょうざん	しょうでんいん	〒	425-0091
581番	法城山	正傳院	住 所	焼津市八楠1丁目6-6
			住 職	畑中道雄
開山年	永禄10(1567)、(元亀年間(1570-1573)、焼津町誌より)		草創年	
本尊	大日如来			
開基				
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺—大興寺(657)—長興寺(584)—宗乗寺(460)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	一天存最	永禄10(1567)7・15	宗乗寺4世行室宗順弟子	宗乗寺(460)5世	
前住	大安宅公	元和6(1620)7・30			
前住	瑞岳存嘉	承応2(1653)9・21			
前住	裏珍刑屋	宝永4(1707)1・20			
前住	門領大鏡	享保2(1717)5・30			
前住	月心門了	享保17(1732)3・8			
前住	千丈活鷄	享保19(1734)9・28			
前住	成屋宏宗	明治4(1871)8・15			
(前住)	(道隣)		(大正年間住職、焼津町誌より) [尾澤]		
前住	宗全		[加藤?]	松源寺(73)?、東雲寺(75)23世?、松向寺3世?、高照寺(愛知60)4世?	251c?
前住	良禪隆道	昭和45(1970)11・2			
前住	一豊		[阿部?]		

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(7)

2	古道哲遠	昭和36(1961)6・19	勸請・法地開闢開山、愛知県東春日井郡下原伊藤喜藏四男 [伊藤]	宗乗寺(460)29世	190g
3	傑堂静心	平成17(2005)7・10	中興、福井県常在院加藤碩翁弟子、昭和46庫裡改築、平成6移転にともない本堂・庫裡落慶、世寿86歳 [畑中]	高德寺(535)11世、地藏院(福井234)6世	933g
4	大智道雄	現住	平成17兼務住職 [畑中]	高德寺(535)12世	

明治期以降曹洞宗人物誌（三）

川口 高 風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第五十八巻第一号（平成二十二年七月）に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌（二）」の続編で、「あ」項の続きである。全項の人物誌が完成した時は『近・現代曹洞宗人名辞典』と題して刊行する予定で、一日も早い完成をめざし精進している。

凡 例

「見出し項目」

- 一、収録人物は明治期以降の顕著な業績を残した人物で、その出典は「明教新誌」「宗報」「曹洞宗報」を中心に各種雑誌や著作などから採取した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。
- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げ

明治期以降曹洞宗人物誌（三）

四、かな見出し項目は姓と名の間にダッシュを挿入して読みやすくした。

「見出し項目の配列」

- 一、五十音順に配列した。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順（没年順）に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

「本文の記述とその順序」

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては歴住地、号、字、生年月日、父母、誕生地、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂（没）年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、本文は基本的に、編者が直接、歴住地へ問い合わせを行った返書にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初（初筆）に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地は、平成の大合併による新市町村名への変更を行っていないのがほとんどである。
- 六、歴住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

あぜがみーばいせん 畔上樸仙

文政八年（一八二五）―明治三十四年

（二九〇一）

長野県興隆寺十七世、長野市大林寺二十一世、前橋市龍海院三十世、長野市長国寺二十八世、南足柄市最乗寺独住一世、總持寺独住二世。号は大岡、隨時道人。禪師号は法雲普蓋禪師。文政八年七月十五日に信濃国下高井郡夜間瀬村字宇木の清水家に生まれる。母は畔上氏。受業師は微山活英。本師は活宗。下総国結城町孝顕寺の月山、相模国愛甲郡萩野村松石寺の国穂や信濃国松代の長国寺や一圭や覚巖、東京吉祥寺の愚禪らに参随した。天保十二年（一八四一）夏に信濃泰清寺の継宗の会で版首となる。弘化四年（一八四七）に駒込梅檀林に入學し、研学の傍ら吉祥寺の愚禪に参じて修行にはげんだ。嘉永四年（一八五一）に梅檀林の越後寮へ入り寮主となる。嘉永五年八月には永平寺に瑞世し、安政三年（一八五六）二月には相模国早川海蔵寺の月潭に随侍参禅した。五年七月十八日に信濃興隆寺に住職する。以後、各地の寺院において経

論を講じた。六年夏に信濃国英岩寺の結制で後堂を務める。七年夏には信濃国長国寺結制の後堂、万延二年（一八六一）夏に越後国普門寺結制の後堂、文久二年夏に信濃国泰清寺結制の後堂を務めた。同年夏、首先地興隆寺で初会結制江湖会を修行し『永平清規』を講じている。慶応三年（一八六七）四月一日には松代の大林寺へ転住し、同年夏、信濃国常昌寺の結制で西堂、明治元年（一八六八）冬に信濃国興禪寺の結制でも西堂を務めた。二年十月三日に前橋の龍海院に住職し、五年五月十二日には権訓導に補任され、十月三日には長野市長国寺へ転住した。六年の夏、三河国真光寺結制の西堂を務め、七年十一月七日には本山特選により神奈川県最乗寺の独住一世となった。八年十二月二十日に権少教正に補任され、九年六月二十八日には神奈川県専門学校支校教師に任命された。十三年二月十六日には總持寺へ晋住し、大教正に補任せられた。十四年四月一日には曹洞宗管長を務め、二十五年に両本山の分離独立を提唱し議論をかもし出した。二十九年には長野県

に永寿院を開いている。『円明国師御伝』、『坐禅用心記落草談』、『信心銘拈提落草談』、『総持開祖御伝抄』、『総持開祖御教義抄』、『戒中直壇手扣』、『仏戒落草』などを著わしており、三十四年十二月二十七日に東京都林泉寺の隠寮にて七十七歳で示寂した。〔総持寺誌〕、『洞上高僧月旦』〔通俗仏教新聞〕第三八九号）

あだちーぎじゅん 足立宣淳

―大正十三年（一九二四）

兵庫県氷上郡普蔵寺十七世、逗子市海宝院二十二世。号は明道。兵庫県氷上郡芦田村西芦田に生まれる。曹洞宗神奈川第二宗務所長として宗運の拡張に貢献し、地方布教部委員長として宗義の宣伝に努めた。大正十三年五月十一日に八十三歳で示寂した。

あだちーしゅうほう 足立宗法

明治元年（一八六八）―昭和十四年（一九三九）

豊岡市養源寺二十九世、静岡県周知郡崇信

寺。号は興山。明治元年十一月二十六日に愛知県海部郡佐織村字五軒屋の伊藤家に生まれる。受業師、本師は足立泰慶。十四年十一月、真如寺の足立泰慶について得度し、十六年冬に龍泉寺の木村桂鳳初会に入衆、二十一年夏に大洞院久林養洲の常恒会にて立身、二十二年十一月には足立泰慶に嗣法する。二十九年七月に曹洞宗大学林を卒業し、日置黙仙に随参した。二十九年十月に能本山で瑞世転衣し、三十四年八月には崇信寺に住職した。二十九年八月から曹洞宗大学林寮監を務め、三十一年から三十三年まで第二十五中学林教授を務める。可睡斎講師、監寺、副寺、師家も務める。大正六年(一九一七)六月に曹洞宗議会議員に当選した。前年の五年十一月には總持寺慶弔式礼単頭、十三年二月には總持寺授戒会教授師、昭和九年(一九三四)三月に大遠忌財務整理委員、總持寺再建勸募委員長、宗務所長などを務めた。十四年二月二十一日に七十二歳で示寂した。(養源寺歴住世代帳『曹洞宗名鑑』)

あだちーたつじゅん 安達達淳

文政五年(一八二二)ー明治三十七年(一九〇四)

大町市靈松寺三十世、長野県北安曇郡源長寺十八世、岡山県真庭郡極楽寺十三世、井原市徳聖寺、東京都慶安寺、松本市生安寺二世、松本市全久院二世、南安曇郡金松寺二世、自性庵及び龍昌寺を開山する。号は玉翁。文政五年十一月二日、越中富山千石町の安達達翁の子に生まれる。姓は清水であったが、後に安達と改名。受業師は活(豁)翁達禪。本師は達元智翁。嘉永三年(二八五〇)夏に越中国富山海岸寺の菜洲の会に入つて首座を務め、同年冬には美作国大庭郡三崎村の極楽寺に首先住職する。六年には總持寺に瑞世する。同年冬には備中国徳聖寺に転住し開単する。安政元年(二八五四)には能本山役局に任じられて江戸へ行き、下谷池之端の慶安寺に住職した。文久三年(一八六三)には信濃国北安曇郡大町の靈松寺に住職する。慶應二年(二八六六)より三年まで總持寺に輪住し、明治元年(一八六八)には永平寺が総

本山論を主張したため、京都表出役を任命され、在田彦龍とともに奔走した。六年には筑摩県曹洞宗録司に任命されており、教部省の訓導、中講義、大講義に補任された。四年頃に起つた松本藩の廃仏の暴政に対して憂憤し歎訴した。二十五年二月には在田彦龍らとともに宗門永遠の治安策として能本山分離独立案を建言し、顧問役を務めた。『妙明心源略鈔』、『曹洞宗革新論』などを著わしており、三十七年三月九日に示寂した。(水野靈牛『曹洞二十五哲』、『水月音容』)

あだちーてんりゅう 阿達天龍

慶應三年(一八六七)ー大正十三年(一九二四)

新潟県東蒲原郡多宝寺第十九世。慶應三年一月二十八日に新潟県東蒲原郡両鹿瀬村に生まれる。本師は丸山威音。明治十二年(二八七九)冬、新潟県中蒲原郡横越村の円通寺住職塚原快堂の随意会に入衆し、二十年、新潟県専門支校に入学。二十二年夏、北蒲原郡赤坂村の観音寺千葉良壽の片

法幢会で立職する。同年十月二日に多宝寺丸山威音の室に入り嗣法し、翌二十三年一月十七日、多宝寺に首先住職した。二十四年九月七日に總持寺へ瑞世し、三十四年夏、初会法幢を建立する。二十七年に組合総代に選挙されて以来二十年間、組長を務めた。地方布教部布教師も務め、大正十三年六月五日に五十八歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕

あだちーどうじゅん 安立洞順

明治五年（一八七二）―大正十五年（一九二六）

兵庫県水上郡宝林寺十三世、武生市宝円寺三十四世、兵庫県水上郡佐治村法光寺。号は天涯。明治五年七月十二日に越前南條郡武生町に生まれる。受業師は能山寛山あるいは大洞海順といわれる。本師は能山寛山あるいは覚印海天。日置黙仙、西有穆山に参随する。明治十八年（一八八五）冬、近江高島郡朽木村の興聖寺橋本台嶺の片幢会に入衆し、二十年夏、宝円寺で立身する。専門支校本科五級を卒業。二十七年に教導

講習院を卒業し、二十六年十月に永平寺で瑞世転衣した。三十一年一月に法光寺へ首先住職し、同年二月には宝林寺へ転住する。三十八年より両本山布教師、宗会議員を務め、大正十五年に五十五歳で示寂した。

あだちーふみよう 足立普明

万延元年（一八六〇）―明治三十六年（一九〇三）

丹波国何鹿郡以久田村高台寺六世。宮城県亘理郡大雄寺三十一世。万延元年八月五日に京都府下丹波国天田郡福知山城下で、父足立小右衛門某の次男に生まれる。号は圓界。受業師は祖覚省拙。本師は諦印愚観。京都府第二号曹洞宗専門学支校に入学する。明治十一年（一八七八）夏、久昌寺隨意会で首座を務める。能仁柏巖に参随する。十八年（一八八五）高台寺に住職せられ、救世館を創立、四恩社を組織した。二十一年に曹洞扶宗会の大会議が東京に開設される際、京都府第一号取締代理となる。同年六月には、大阪に関西有志会を組織

し、宗弊矯正の謀議に努めた。宗粋社を創成して「第一義」と題する雑誌を刊行した。二十五年には「如是」を発行して主筆となり、政教問題の論究に努めた。二十六年九月には能山議会議員選挙投票開緘係、能山議会議記にも任命される。能山独立運動に参加する傍ら、『耶蘇教亡国論』『天理教信ずるに足らず』『宣戰詔勅衍義』を著わしたが、二十九年二月五日に台湾、澎湖列島への特派布教に派遣され、三十六年九月九日に中国廈門の鳳山寺において示寂した。〔洞上高僧月旦〕、水野靈牛『洞門二十五哲』川口高風『近代の肖像』第一四八、一四九回

あつみーぎよくみよう 厚見玉明

安政六年（一八五九）―大正十三年（一九二四）

東松山市宗悟寺二十一世、入間川町安穩寺、入間川町天岑寺。安政六年二月二十五日に東京府北多摩郡調布町の原因忠司三男に生まれる。受業師は大寺弘明。本師は厚見玉峰。明治五年（一八七二）十月、西光

寺の大寺弘明について得度、同年冬、川越

養寿院の守慶良宗会下に首先安居、十一年冬、入間郡龍穩寺の即法の常恒会で立職、

十五年、川越の専門支校を卒業。十二年四月に厚見玉峰の室に入って嗣法し、二十六年二月に永平寺で転衣し、同年十二月には入間川町の安穩寺に首先住職した。三十一年三月、入間川町为天岑寺へ転住し、四十二年九月には宗悟寺に住職した。二十年より三十五年まで地方小学校、中学林、高等学林の学監、教授、地方布教部委員長などを務めた。大正十三年三月二十二日に六十六歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』）

あつみーじゅんみょう 厚見純明

明治二十二年（一八八九）ー昭和四十一年（一九六六）

狭山市天岑寺二十六世。号は天海。明治二十二年に埼玉県東松山市で生まれた。大正十一年頃、鐘樓堂を新築しており、昭和四十一年四月二十六日に七十八歳で示寂した。

あなみずーしょうゆう 穴水正雄

明治三十九年（一九〇六）ー昭和五十四年（一九七九）

湖西市正太寺十七世。号は雪英。明治三十九年一月十一日に静岡県湖西市入出に生まれる。受業師、本師は穴水秀賢。大正十四年（一九二五）世田谷中学校を卒業し、同年より昭和三年（一九二八）三月まで總持寺に安居する。四十四年に静岡県第四宗務所副所長を務め、その他、入出村長、農業委員、社会教育委員、村議会議員、民生委員、入出農協専務理事、湖西町子供会長、入出児童館長、入出区長、湖西市仏教会長、浜名郡仏教会長などを歴任する。昭和五十四年一月三日に示寂した。

あびこーこうどう 安孫子孝童

ー昭和十六年（一九四一）

敦賀市永厳寺三十七世。明治四十五年（一九一二）二月に若狭の玉泉寺より晋住した。号は黙仙。敦賀市の安孫子家出身。『道元禪師行状記』の木版を再版して永平寺へ献納。昭和十六年七月九日に六十歳で

示寂した。

あびこーとくぜん 安孫子得禅

明治九年（一八七六）ー昭和二十三年（一九四八）

宮城県柴田郡宝泉寺十五世。号は宝林。明治九年一月十七日に山形県北村山郡大倉村大字嶺山に生まれる。受業師は安孫子得秀。本師は安孫子得仙。明治二十二年（一八八九）夏、山形市龍門寺の今野玄濤の片法幢会に首先安居する。以後、独学で自修し、繁昌院の菊池大仙に十一年間随侍して宗乗、余乗などを学んだ。三十二年四月、柴田郡富岡村の龍雲寺の安孫子得仙の室に入って嗣法する。三十五年七月、宝泉寺に首先住職し、三十九年三月には總持寺において転衣し、同年冬には初会法幢を建てた。三十五年から宮城県第三宗務支局書記、会計、庶務、地方布教委員などを務め、昭和二十三年三月三日に七十二歳で示寂した。

あびこーほくしゅう 安孫子北宗

弘化四年（一八四七）ー大正七年（一九

一八）

富山県氷見郡光禪寺四十八世、長野県諏訪郡福寿院。号は祖山。弘化四年五月十三日に生まれる。受業師及び本師は安孫子玉英。富山県第二曹洞宗務所長として宗運の興隆に努めた。大正七年十月十三日に示寂した。

あべーじおん 阿部慈園

昭和二十二年（一九四七）ー平成十三年

（二〇〇一）

鎌倉市黙仙寺五世。号は大覚。昭和二十二年七月三十日、新潟県西蒲原郡分水町に生まれる。受業師は阿部秋好。本師は花本貫瑞。四十五年（一九七〇）三月、駒澤大学仏教学部卒業。五十三年三月、印度プーナ大学院修了。五十六年三月、東京大学大学院博士課程（印度哲学）単位取得。五十四年十二月 Ph. D (Pune University) の学位を受ける。平成元年（一九八九）第五回東方学術奨励賞、三年、第二十八回日本翻

訳文化賞を受賞する。昭和五十六年東方研究会専任研究員。東方学院非常勤講師に就く。五十七年日本大学文理学部、五十九年法政大学文学部、六十年放送大学哲学科、六十二年駒澤大学仏教学部、平成元年明治大学文学部及び駒沢女子短期大学英语英文科などの非常勤講師を務める。三年明治大学文学部専任講師となり、五年に助教授、十年には教授を務めた。十二年東京大学文学部非常勤講師にも就いている。著書に『頭陀の研究』『説む』『原典で読む』『インド仏教文化入門』『比較宗教思想論』などがある。平成十三年一月二十四日に五十四歳で示寂したため、追悼論集『仏教の修行法』が刊行された。

あべーしゅうこう 阿部秋好

大正十一年（一九二二）ー平成十一年

（一九九九）

さいたま市興徳寺三十二世、新潟県分水町吉田寺二十四世、岡山県現福寺十八世。号は耕雲。大正十一年（一九二二）九月七日に鳥取県東伯郡灘手村谷（倉吉市）に仲本

政蔵・かめのの二男として生まれた。受業師は東雄道、本師は花本貫瑞。駒澤大学仏教学部仏教学科を中退。昭和五十七年（一九八二）三月、特派布教師を拝命した。「生かされている実感を喜び精進」（『幕古の心法話集』大本山永平寺）「わが本師花本貫瑞老漢」（『空心静坐』黙仙寺）「法雄和尚を思う」（『愛憎超越』興徳寺）「初盆説教——親先祖を敬う」（『活捉瞿曇』黙仙寺）などの論稿がある。平成十一年九月二十七日に七十八歳で示寂した。

あべーしんりゅう 阿部信隆

明治三十四年（一九〇一）ー昭和五十八

年（一九八三）

愛媛県越智郡禅興寺十七世。号は碧堂。明治三十四年四月一日に北海道函館市湯川の阿部浅五郎の次男に生まれる。幼名は久吉。受業師及び本師は村上太信。昭和二年（一九二七）三月、曹洞宗大学を卒業し愛媛県瑞応寺専門僧堂に安居する。四年四月、禅興寺書道学校を設立した。同年三月には青少年保護司に就き、十六年九月三日

に禅興寺へ住職する。二十三年四月十日より永平寺貫首熊沢泰禅を戒師に迎え、授戒会を修した。三十三年に越智郡仏教団長、四十六年に四国総和会支部長などを務め、五十五年夏、本堂大屋根瓦葺替、庫裡修理を行った。昭和五十八年九月八日に八十二歳で示寂した。(『禅興寺歴住世代帳』)

あべーぜんがく 阿部善寛

明治二年(一八六九)―昭和二年(一九

二七)

水沢市大林寺二十八世、岩手県中興寺十二世。号は天山、戸籍は禅覚、明治二年九月、岩手県紫波郡赤石村に生まれる。受業師、本師は阿部禅法。阿部善英や穂積豊年らに参随する。十七年(一八八四)岩手県曹洞専門支校を卒業した。翌十八年県立盛岡中学に入学、四十二年直命一等布教師になり、各県下を巡教し宗門第一流の布道家と称せられた。大正七年(一九一八)六月より宗会議員を二期務め、十二年私立幼稚園を設立した。永平寺禅師随行長として数回補佐している。昭和二年九月二十五日に

六十歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』、『現代仏教家人名辞典』、『宗教時報』第四十九号)

あべーだいかん 阿部大環

嘉永六年(一八五三)―昭和八年(一九

三三)

盛岡市源勝寺三十一世、岩手県龍泉寺二十世。号は祖嶽。嘉永六年六月七日に生まれる。本師は可学祖文、明治二十二年(一八八九)六月二十六日末派総代議員になり、曹洞宗大会議の会頭となる。十二月十五日曹洞宗末派総代委員に当選。岩手保護院創立の中心的役割をなし、三十九年一月には岩手保護院理事長、大正三年(一九一四)八月四日には同院長に就任した。昭和八年七月二十三日に八十一歳で示寂した。(『曹洞宗年鑑』、『現代仏教家人名辞典』)

あべーどうざん 阿部道山

明治二十九年(一八九六)―昭和五十三年(一九七八)

大宮市普門院四十二世。号は道山。本名は

唯一。明治二十九年十一月二十日に東京都本所区向島に生まれる。受業師は安達東山。本師は岩本国宗。大正十年(一九二一)三月十五日に曹洞宗大学本科を卒業。

十四年五月に普門院へ住職。十四年三月一日に埼玉県曹洞宗布教管理を任命され、昭和十三年(一九三八)七月一日より十六年四月まで埼玉県宗務所長に任命される。十七年五月には曹洞宗会議員に当選し、二十一年六月には曹洞宗特選議員に任命され、二十二年四月に曹洞宗社会部長兼教学部長を務める。二十二年十二月に駒澤大学視学委員及び駒澤大学査察使を拝命し、翌二十三年三月に任務完了して辞職する。同年四月には学校法人普門院幼稚園を開設し、理事長兼園長を務める。二十六年五月に埼玉県私立幼稚園協会副会長、二十九年四月より埼玉県科学審議会委員、三十二年三月に大宮市文化財専門委員長、三十三年三月には埼玉県文化財保護協会会長、三十八年四月より埼玉県文化団体連合会副会長、会長、大宮市大成地区水道架設組合長、大宮市社会教育委員長、大宮市文化財保護委員長な

ども務めた。著書に『小栗上野介正伝』（昭和十六年十月 海軍有終会）がある。昭和五十三年六月十三日に示寂した。

あべーはくほう 阿部博邦

明治四十四年（一九一）ー福寿無量

山形県東田川郡乗慶寺三十五世、山形県東田川郡萬福寺十一世。号は大耕。明治四十四年十一月二十八日に山形県東田川郡余目町に生まれる。受業師、本師は阿部得髓。

昭和九年（一九三四）、駒澤大学人文学部を卒業。三十一年十一月に山形県第三曹洞宗宗務所長就任、四十一年曹洞宗議会議員に当選し五十六年十月に退任、五十七年より平成九年（一九九七）まで總持寺顧問、昭和六十一年五月より平成二年四月まで總持寺副監院、平成七年より九年まで總持寺嶽山会会長、昭和二十四年十一月より三十七年まで保護司を務めた。曹洞宗議会議員在職中の昭和四十六年一月に社会部長に、五十三年には教学部長に補任され、駒澤大学、愛知学院大学、東北福祉大学、世田谷高校、多々羅高校などの理事を兼任した。

平成六年には總持寺授戒会の教授師、九年の總持寺副貫首本葬の入龕師を務めた。

あべーぶんゆう 阿部文雄

明治十七年（一八八四）ー昭和五十二年

（一九七七）

宮古市常安寺二十二世、岩手県下閉伊郡常運寺三世、岩手県下閉伊郡好心寺二十三世、岩手県下閉伊郡宝福寺中興開山。号は意参。明治十七年十二月二十五日に盛岡市大沢川原に生まれる。受業師、本師は高橋超三。明治四十五年（一九一二）曹洞宗大学を卒業し、大正五年（一九一六）、東京帝国大学梵文選科を卒業、十二年、東京帝国大学文学部英文学科を卒業した。五年より河口慧海に就て西藏語学を修学し、九年より十三年まで世田谷中学教諭を務め、昭和四年（一九二九）より十六年まで駒澤大学講師、十五年より十九年までは梅檀中学学長を務めた。昭和三年より八年までは東洋大学梵語科教授を務め、十八年より二十二年まで東北大学文学部の西藏語講師、二十三年より宮古市公安委員長を務める。常安

寺保育園を創設しており、『チベット語文典』を著わした。昭和五十二年六月三日に九十四歳で示寂している。

あべーりょうどう 阿部諒童

明治四十一年（一九〇八）ー昭和五十六

年（一九八二）

宇都宮市林松寺十九世。号は天瑞。明治四十一年十月十三日に栃木県上都賀郡真名古に生まれる。受業師、本師は阿部秀苗。昭和六年（一九三一）に駒澤大学仏教学科を卒業し管内布教師、布教委員、中外日報記者、宇都宮実業学校教諭、元陸軍嘱託教官、民生委員、教誨師、保護司、宇都宮市教育委員、宇都宮刑務所篤志面接委員、宇都宮地方裁判所調停委員、宇都宮市社会教育委員、県仏教会理事兼事務局長、中外日報栃木支局長、宇都宮市仏教会会長などを務める。昭和五十六年十月三日に七十三歳で示寂した。

あべーれいじゅん 阿部豊純

ー昭和六年（一九三二）

盛岡市祇陀寺二十一世、岩手県紫波郡勝源院二十世、岩手県東磐井郡大光寺二十世、青森県三戸郡名川町東円寺十二世。号は柏

要。岩手県盛岡に生まれる。受業師、本師は狐崎靈道。専門支校を卒業して可睡斎の西有穆山に参随し立身する。宗議会特選議員、岩手県布教部委員長、管内布教師、岩手保護院長などを務める。昭和六年八月二十三日に八十歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』、『曹洞宗名鑑』)

あまうーせいりゅう 天雨清隆

明治四十四年(一九一)ー福寿無量
佐世保市興龍寺四世、佐賀県三養基郡栄福寺十五世。号は貫道。明治四十四年三月七日に長崎県北松浦郡小佐々町田原の細川奎三郎の次男に生まれる。昭和三十二年(一九五七)四月に天雨家の養子になる。受業師、本師は隆邦篤孝。中村応隆、村上素道に参随した。大正十三年(一九二四)四月一日より僧堂許可禅林を卒え、長崎皓台寺専門僧堂に三年間安居する。昭和二十七年に興龍寺を移転改築し、三十九年十月より

佐世保子供会連盟会長及び佐世保童和会を十五年間務めた。平成十年(一九九八)十月に退堂した。

あまおかーだいき 天岡大器

明治二十七年(一八九四)ー昭和三十八年(一九六三)

大田市栄泉寺二十三世。号は慈芳。明治二十七年九月十六日に島根県大田市久利町松代三十四番地に生まれる。本師は赤松慈潭。東洋大学大学院第二科を修学し、龍泰寺認可僧堂に安居する。樺太駐在布教師、樺太布教総監部主事、樺太布教総監事務取扱、警察布教師、両大本山巡回布教師、軍人布教師、特派布教師、曹洞宗報国会本部常任講師、樺太私大泊女子職業学校長、東洋大学嘱託、北海道帝国大学禅学講座講師、司法保護委員、保護司、大森町教育委員会委員長、大森町議会議長、大田市保護司会長、民生委員協議会長、大田市立大森公民館長などを務めた。『雄弁法と司会法』を著わしており、昭和三十八年十二月三十一日に示寂した。

あまおかーほうせん 天岡芳仙

元治元年(一八六四)ー昭和七年(一九三二)

池田市陽松庵三十一世、亀岡市曹流寺、守口市金龍寺。号は古潤。元治元年八月二十七日に兵庫県川西市平野の塩川光蔵の長男に生まれる。俗姓は初め塩川といい、後に天岡と改称した。受業師、本師は天岡桂巖。北野吾有、西野石梁に参随した。明治十三年(一八八〇)から二十年まで蔭涼寺に安居、二十四年(一八九二)より二十九年まで興聖寺に安居する。三十六年六月に陽松庵へ晋住した後、三十八年十月には古道場再興のための驢耳会を組織し、四十年には陽松庵に認可僧堂を開単した。四十四年に師家に認可され、昭和七年三月八日に六十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

あまじーへきたん 天地碧潭

文政三年(一八二〇)ー明治十二年(一八七九)

三原市宗光寺二十三世、愛媛県越智郡宝蔵寺十二世。号は碧潭、名は老龍。文政三年

誌)

一月八日に広島県御調郡丸河南村の小林友右エ門の子に生まれる。受業師は寿山泰量、本師は佛慧環道。風外本高に参随した。天保元年(一八三〇)、十一歳で行脚し、播州明石郡人丸町の雲晴寺に安居した。宗光寺では西国三十三霊場の石像を境内の山林へ列置しており、明治十二年十月二日に六十歳で示寂した。(宗光寺歴住世代帳)

あまつーえんしゅう 天津円宗

明治十八年(一八八五)ー昭和四十一年

(二九六六)

太田市浄光寺二十三世、号は白道。明治十八年一月十日に茨城県水戸市大字上市天王町の興津良承の二男に生まれる。受業師、本師は天津円宗。明治二十四年(一八九一)三月二十七日に茨城県上市尋常小学校を修業し、三十三年十月一日より三十六年十月一日まで、栃木県下都賀郡の大中寺に安居する。四十四年群馬県第五曹洞宗務所管内布教委員、大正十四年(一九一五)七月六日には社会事業布教師、昭和十五年(一九四〇)二月二十日に司法保護委員、二十六年六月二十日に高祖大師七百回大遠忌勧募専使などを務め、昭和四十一年三月十八日に八十二歳で示寂した。

沼田市舒林寺三十三世。号は大信。明治二十八年十二月三十日に山梨県東山梨郡岡部村に生まれる。本師は佐藤鉄額。北野元峰に参随する。大正十二年(一九二三)曹洞宗大学を卒業。昭和四年(一九二九)舒林寺、十五年音昌寺住職となる。宗務所長、管内布教師、布教委員、永平寺地方副監院、教区長、審事院審事、司法保護委員、保護司、前橋裁判所参与、各種調停委員、沼田市更生委員、沼田市公安委員、県更生保護事業協会評議員、民生委員推薦委員などを務め、昭和五十八年八月二十八日に八十九歳で示寂した。

あまじーゆうしょう 天地有生

慶応二年(一八六六)ー明治三十六年

(二九〇三)

三原市宗光寺二十五世、尾道市西金寺十三世。号は虎山。慶応二年六月十八日に三原の丹羽亀の次男に生まれる。碧潭老龍について得度し、俗姓を丹羽から天地と改称した。本師は月潭掉舟。明治三十四年(一九〇一)十二月、宗光寺に住職した。住山後、予州の寺院へ助化応請中、病を得て三十六年三月十七日に三十八歳で示寂した。温容慈顔、能弁宏辞と称され、至る所で道俗の帰崇があった。(有木環山『三利法流

あまのーえんしゅう 天野延秋

明治二十八年(一八九五)ー昭和五十八

年(一九八三)

あめみやーぎけん 雨宮義憲

明治二十二年(一八八九)ー昭和三十五

年(一九六〇)

奈良県吉野郡蔵心寺二十四世、門真市安養寺二十三世。号は大法。明治二十二年四月十五日に山梨県中巨摩郡龍王町龍王の雨宮徳太郎の長男に生まれる。受業師、本師は尾崎桂印。西野石梁に参随している。明治四十一年(一九〇八)第三中学林を卒業

し、大正二年（一九一三）曹洞宗大学を卒業した。宇治興聖寺の僧堂に安居する。大正二年門真市の安養寺住職、昭和二年（一九二七）蔵心寺住職を務め、曹洞宗大学寮監、副学監、駒澤大学監事に就き、奈良県保護司、方面委員、民生委員、司法保護委員なども務めて三十五年十二月二十日に七十二歳で示寂した。

あらいーかくぜん 新井寛禪

ー昭和十四年（一九三九）

横浜市福泉寺二十六世、春日部市浄春院三十二世、号は真法。福島県に生まれる。本師は新井石禪。数々の奇行があり凡骨を脱した和尚といわれ、昭和十四年二月二十二日に六十二歳で浄春院において示寂した。

（瀧田空華庵「新井寛禪和尚を憶ふ」（「大乘禪」第十七卷第七号）

あらいーかつぎゅう 荒井活牛

ー明治三十六年（一九〇三）

白根市永安寺十九世、五泉市瑞祥寺十五世。号は鉄学。扶宗会第一一二号社長を務

めている。明治三十六年一月十日に示寂した。

執筆者紹介

伊豆原英子（本学教授……………日本語）
IZUHARA Eiko

近藤勝志（本学教授……………英語）
KONDO Katsushi

清水義和（本学教授……………英語）
SHIMIZU Yoshikazu

吉井浩司郎（本学教授……………英語）
YOSHII Koshiro

木村文輝（本学准教授……………宗教学）
KIMURA Bunki

川口高風（本学教授……………宗教学）
KAWAGUCHI Kōhū

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 稲 垣 正 巳 (副会長) 佐 々 木 真

(会計) 北 村 伊 都 子

岡 島 秀 隆	尾 崎 孝 之	※河 合 泰 弘
小 林 秀 一	城 貞 晴	高 木 靖 文
※前 山 慎 太 郎	松 浦 國 弘	※安 富 眞 澄
鷲 嶽 正 道		

※本号編集委員

編 集 後 記

紀要58巻3号には論文4編、資料2編の投稿がありました。講義等でご多忙中に投稿頂き御礼申し上げます。いずれも力作揃いですので、多くの方々にお読み頂きたいと思います。慣れない編集ですので、瑕疵がありましたらお許してください。(安富記)

平成23年2月10日 印刷
平成23年2月25日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第58巻
第3号(通巻第169号)

編集責任者
稲垣正巳

発行者 愛知学院大学
教養教育研究会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12
電話 〈0561〉(73) 1111(代表)

印刷所 株式会社あるむ
電話 〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.58 No.3
(Whole Number 169)

C O N T E N T S

Articles

- Eiko IZUHARA : How Have Interjectional-Particles Been Positioned? (1)
- Katsushi KONDO : Unmanly People—Defoe's *Captain Singleton*— (13)
- Yoshikazu SHIMIZU : On the Possibility of Creative Avant-garde Art Between *Cherry Orchard*
by Anton Chekov & *Cache-Cache Pastoral (Death in the Countryside)* by Terayama Shuji (23)
- Koshiro YOSHII : Is It Possible to Find Hardy's Radical Assertion in *The Woodlanders*? (53)

Materials

- Bunki KIMURA : Annals of the Chief Priests at the Buddhist Temples belonging to the Sōtō Sect
in the Middle and Eastern Parts of Shizuoka Prefecture (7) (69)
- Kōhū KAWAGUCHI : On Sōtō Sect Priests' Lives and Works After the Meiji Era (3) (118)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2011